
S F 宝島 ~ 宇宙船野郎 ~

万墨人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

SF宝島〜宇宙船野郎〜

【Nコード】

N0259K

【作者名】

万墨人

【あらすじ】

遙か未来、少年パックは、スクラップの山から宇宙船を発見する。宇宙船には、一人の少女が、凍結時間に守られ、百年間眠っていた……。銀河の宝を求め、パックは宇宙へと旅立つのだったが……。ステイブンスンの『宝島』を元ネタに、宇宙を舞台にした科学冒険奇天烈冒流的熱烈活劇であります！

追跡

「ミリイっ！ 追いつかれちゃうよっ！」

「へロへロ、黙っててよ！ こっちは忙しいんだから」

狭い操縦席では、ミリイと呼ばれた少女と隣の副操縦席に座るロボットのへロへロが、切迫した調子で叫び交わしている。

ミリイは真剣な眼差しで操縦席に座り、必死の面持ちで目の前のスクリーンを睨んでいる。

スクリーンには巨大な宇宙戦艦の姿が映し出されていた。戦艦はじりじりと接近して、砲門が次々と回転して、ミリイの操縦する快速宇宙艇【フレイム・ドラゴン呑竜】に狙いを付けている。

操縦席のミリイは真っ赤な赤毛、抜けるように白い肌に、顔には雀斑が散っている。

いわゆる美人ではない。鼻は低すぎるし、顎は尖りすぎるくらいがある。目立つのは、ぱつちりと見開いた大きな瞳で、灰緑色の、そこだけは神秘的とっていい印象的な眼差しである。

しかし一度でも見たら忘れられない表情の持ち主だ。たつぷりとした肉付きのいい唇は、笑いを浮かべると生き生きと動く。

隣のへロへロと呼ばれたロボットは……これがロボットであろうか？

どてつと大きな丸い顔が身体の全体を占める。顔はまつ黄色で、まるでレモンそのものの色をしている。顔はふかふかと柔らかさそうで、顔の下半分にまつすぐ横に切れ込みがあり、それが口の役割を

している。

口の上に、大きな目玉が二つ。顔の造作は、それで終わりである。頭の天辺には一本のホイップ・アンテナがおっ立ち、動くにつれ、ふらふらと前後左右に揺れている。アンテナの先端には光が灯り、ヘロヘロが何か言ったび、ひこひこ、ひこひここと瞬いている。

顔のすぐ下には二本の……腕だろうか、足だろうか？ 自在ジョイントの太い先に、三本の指がくっついていて。どうやらこの腕が足の役割をし、場合によっては腕の役割をするらしい。実に簡単な構造のロボットだ。

「うううう……」

戦艦が接近すると、物凄い轟音が船内に満ちる。戦艦の立てる重低音が、いやがおうにも恐怖感をつのらせる。

戦艦の砲門が遂に火蓋を切る！

ずばっ！

ずばっ！

砲門から発射されたミサイルが宇宙空間を飛び、ミリーの【呑竜】の近くの空間で爆発した。

ずしんっ！

どかああんっ！

怖ろしいほどの砲撃音に、船内の壁がびりびりと震えた。

ミリーはちよつと鼻筋に皺を寄せ、ヘロヘロに命じた。

「ヘロヘロ！ 環境音スイッチを消して。喧しくて、まともに考えられないわ！」

「あいよ」と、へろへろは目の前のスイッチの一つを切った。

途端に、しーん、と辺りは静まり返る……。

警告

ここまで読まれてきて、なんだこの作者はSFの基本的な約束事も知らないド素人だと思いいになられただろうか？

宇宙空間で音がするわけ絶対ないのに……。

そうである。それは正しい。

しかし、この宇宙艇には「環境音再現システム」が搭載されているのだ。宇宙艇の外部探査システムに感知されたあらゆる事象が、このシステムによって効果音を再現されているのである。

巨大な宇宙戦艦が立てる轟音、爆発音、あるいは恒星の立てる太陽風などの現象が、船内に仕掛けられたスピーカーを通して再現されるのである。

なぜか？ それは、いくら「真空中では音がしない」と頭では分かっている、ついつい人間は目の前のあらゆることに音がするはず という思い込みにより、事故を避けられないからであった。危険なものが接近してきても、音がしないと、つい見過ごしてしまう。そういう失態を防ぐため、この「環境音再現システム」が宇宙船はおろか、宇宙服にも装備されている。

以後、文中に真空中で音がする描写があつたら、読者は、よろしくこの「環境音再現システム」のなせる業であることを、ご理解頂きたい。

さらに付け加えると、このシステムは、視覚にも当てはまる。

光の届かない宇宙空間で、宇宙船の姿がスクリーンに映し出され

る、あるいは真空中でレーザー光線が目に見える、などは「環境視覚再現システム」が活躍しているのである。

さて、それでは、ミリイとヘロヘロの運命はいかに？

スクリーンにミサイルが爆発し、ちかちかと火花を散らす。環境音スイッチを切っているので、無音である。

「下手くそ！ ちっとも当たらないじゃないの！」

ミリイはスクリーンに目をやり、嘲るような声を上げた。

隣のヘロヘロが叫んだ。

「違うよ！ 停船せよと警告してるんだ！」

ヘロヘロの指摘は図星だったので、ミリイは唇を引き結んだ。充分すぎるくらい警告は受けた。今度は、相手は本気で狙ってくるだろう。

ヘロヘロの操縦席に、ライトが瞬いた。ヘロヘロはミリイを見上げ、声を掛ける。

「ミリイ、相手が呼びかけてきた。どうする？」

ミリイは頷いた。

「回線を開きなさい！」

二人の目の前のスクリーンが明るくなり、そこに一人の男が姿を表した。

逃走

男を認め、ミリイは憎々しく呻いた。

「シルバー！ あんたって、どこまでも超しつっこいんだから！」

スクリーンの、シルバーと呼びかけられた男は「ほっ」と唇をすぼめた。

がっしりとした岩を刻み付けたような顔つき。頭には、いや、首から上には、唯の一本も毛が生えていない。

全体に人間とっていい顔つきだが、皮膚は銀色に輝いている。まるで金属の彫像のよう、見方によっては、魚市場で大量に売られているシルバーフィッシュ鯨の肌のようなだ。

シルバーの銀色の皮膚に、くしゃくしゃと皺が寄り、にまーつと笑顔になった。

「ミリイさん……それはないでしょう？ わたくしは、あなたに危害を加えようとは、これっぽっちも考えてはおりませんよ」

言葉付きは厭らしいほど丁寧で、シルバーの声は轟くような低音である。口調は柔らかく、このような緊迫した場面には似合わないが、シルバーは冷徹な瞳で、じっとミリイの顔を見返した。

「いい加減に降伏しなさい。今までは警告だったが、今度はそちらの無反動スラスターを狙う。一発こちらからレーザーを発射すれば、そちらはお手上げだ。どうです、そんなことに、なりたくないでしょう？」

ミリイは「ふん」と顎を上げた。

「それじゃあ、やってご覧！ そっちの射撃手の腕を試してみるの

も面白いわ！」

シルバーはゆるゆると頭を振った。

「お判りにならないようだ。こちらの射撃手は優秀だ。あなたの【呑竜】のスラスターを一発でお釈迦にできる。が、その衝撃で船内にいるあなたを傷つけてしまいかもしれないから踏み切れないだけのことなのだ。大人しく停船してくれませんか？」

ミリイはそれには答えず、いきなり操縦桿を握り、加速した。両者の相対速度が亜光速になる。赤方偏移によって通信装置の周波数がずれ、画面が乱れる。

スクリーンの向こう側のシルバーが慌てて部下に命令する場面が、最後にちらりと映し出された。

ぐいつとミリイは船を上手回しに旋回させ、スラスターの出力限界ぎりぎりに速度を上げる。

たちまち速度は光速近くになり、呑竜の通過した後は空間が一時的に凝集して、長い航跡が残った。重力レンズ効果で遠方の星の光が集まり、揺らめいた。

ばちばちつ、と二人の前の計器が一齐に赤く染まり、悲鳴のように警告の音が響く。

「ちつ」とミリイは唇を噛んだ。シルバーの船からレーザーが発射されたのだ。両者の距離はミリイの目測で三光秒、向こうの射撃手は呑竜の旋回を読んで狙ってきた。

「今のは、危なかったよ！ 船の外板の温度が九百度に上昇！ 直撃ではなかったけど、掠ったみたいだ……」

ミリイは無言で頷いた。この急場を逃れるため、思考が急速に、ジェット・コースターのように旋回する。

ちらちらとミリイは超光速ジェネレーターのスイッチを睨んだ。
ともかく、どこかへ逃げねばならない！

そうだ！ ミリイはある思いつきに夢中になった。

「へロへロ！ 超空間へ突入準備！ 座標を計算してっ！」

「ほい来た！ どこへ向かう？」

「洛陽よ！ 首都へ向かうわ……」

「なんだってえ！」

へロへロは仰天した声を上げた。

洛陽！

銀河帝国の首都。銀河系の数那由他人と思われる、すべての人類の要。

そこには歴代の皇帝が起居し、帝国を維持するための法律が日々
倦まず弛まず、次から次へと生産され、すべての殖民星から情報が
収集されていた。

「そうよ、洛陽へ向かうのよ！」

ミリイは会心の笑みを浮かべていた。

待機

「前方【呑竜】が、超空間フィールドを展開しています！ 超空間に転移するつもりです！」

部下の報告に、シルバーは頷いた。

やはりそうか、こちらから攻撃を仕掛ければ、かならず超空間に逃げ込むだろうと予測していた。

宇宙戦艦【鉄槌】^{トール・ハンマー}のブリッジでは、シルバーの部下が操作盤に向かい、次々と状況を報告していく。

艦長席からシルバーは叫んだ。

「【呑竜】の超空間フィールドを分析、ミリイがどこへ向かうのか、解析せよ！」

シルバーの声を受け、分析班が一斉に数値を読み上げ、計算機が忽ち結果を算出する。

「艦長！ 向こうは洛陽へ向かうつもりです！」

「なにっ！」

シルバーは怒号し、立ち上がった。

思っても見なかった。追いつめれば、ミリイは銀河系の外縁部へ向かうと予測していたが、まさか帝国の首都へ向かうとは……。

その理由に思い当たり、シルバーは齒噛みした。

しまった！

帝国首都付近の空域は絶対防衛圏内として、あらゆる戦闘行為が

禁止されている。もちろん、戦艦の接近も制限されている。シルバーの戦艦【鉄槌】は主星から二天文単位、つまりオールト雲より内部へ侵入することは禁じられているのだ。

どん、とシルバーは艦長席の肘掛けを叩いた。顎を撫で、考え込む。

「小賢しい娘め……それで逃げ込めるつもりか？ それなら……」

ぐいつと観測係に向けて命令した。

「向こうの空間歪曲航跡は記録しているな？ もしも【呑竜】が出てきたら、即座に探知できるはずだ。それまで待つさ……たとえ何年かかるうともな……！」

バック

銀河帝国の首都・洛陽シティの歓楽街、すらりと天を指すようなほっそりとしたスカイ・パレス・ビルのオープン・テラスに、一人の青年……いやまだ少年とっていい年頃だ……が、苛々とした様子でテーブルに席を取っていた。

地上数十キロという高みにあるオープン・テラスからは洛陽シティの全容が手にとるように見てとれる。

雪崩落ちるような無数のビルが犇く地上には網の目のような走路が張り巡らされ、覗き込むと眩暈がするほど精緻な模様を形作っている。

地上近くから成層圏ぎりぎりまでには数え切れないほどの多数の飛行モービルが斥力プレートを真っ白く輝かせ、シティの管理ビーコンに乗って、目まぐるしく各々の目的地へ向け、飛行していた。

少年の见ている真っ直ぐ先には帝国の中心である銀河帝国皇帝の住まう皇居があるはずだった。だが、無数の建物によって遮られ、ちらりとも目に入ることはない。

もつとも少年の関心は、そちらにはない。少年は忙しく宙に目をさ迷わせた。眼球に移植された情報表示を見ているのだ。

今は、それを時計モードにしている。少年の目には、空中に時刻が表示されているのが見えている。

丸い顔つき、太い眉に、いつもびっくりしたような表情を与えている^{どんぐりまなこ}団栗眼。獅子鼻に、顔全体を横断している大きな口。まあ、ハンサムとは言いがたいが、燃えるような黒い瞳が少年の熱情的な性

格を現していた。

少年は、このオープン・テラスではいかにも場違いであった。身に着けているのは宇宙パイロットがよく着ている作業服だし、頭には革製のヘルメットを被っている。太いズボンのあちこちには沢山のポケットが付けられ、そこには工具が無作法な光沢を見せはみ出している。足下は膝まで届くブーツで、長年の酷使に艶はほとんど無くなり、あちこち無残な傷跡が剥き出しになっていた。

少年の座っているテーブルの周囲は、混雑にかかわらず、一種の真空地帯ができていた。周囲を取り囲むようにして席を取っている客は、身動きにつれ虹のような光沢を与える布地や、微かな空気の流れにふわふわと纏いつくような動きをするシヨールをまとうている。時折ちらちら向ける客の視線は、無言の非難を浴びせかけているかのようである。

と、少年の表情が変わった！

ざわめきがテラス全体を包んだ。ミュージズだ……、という囁き声
が上がる。

ピーチャ

姿を見せた一人のミューズ人女性に、テラスに席を取っていた客たちの視線が釘付けになる。

ほっそりとした柳のような身体つきに、紅茶にミルクを一滴垂らしたような浅黒い肌をしている。それほど背は高くないが、見事なプロポーションと、長い手足がミューズ人の背を数パーセントは確実に高く見せている。

真っ直ぐな眉、彫りの深い顔立ちに神秘的な黒い瞳をしている。卵型の顔はややあどけないが、大股で歩くミューズ人は全身から自信を漲らせているようだ。

ミューズ人の遺伝子は慎重な組み合わせにより、天性の芸術家としての才能と、どの？種族？にも美と感じさせる外見を実現している。

ミューズ人女性は真っ直ぐ少年のところへ向かっている。

こつこつ……と、ヒールの足音だけがしーん、と静まり返ったテラスに聞こえていた。ミューズ人は少年の前に立ち止まり、じつと見つめた。

「お待ちどう……パック。待たせたかしら？」

形のいい唇から言葉が押し出された。聞いているだけでうっとりとして聞きほれるアルトの声調であった。

パック、と呼びかけられた少年の顔が真赤に染まった。ぶるん、とパックは急いで首を振った。

「い、いいや……待たせたなんて、そんな！ たった今、席に着いたばかりだよ。それに……とても綺麗だよ、ビーチャ……」

最後の言葉は躊躇いがちに発せられた。しかしビーチャと呼ばれたミューズ人女性は艶やかな笑みを浮かべた。

「そう！ 嬉しいこと……で、お話つて、何かしら？」

するりとビーチャは、パツクの正面に座る。

肘をテーブルにささえ、細い指を組み合わせる。両手の指先は念入りに爪先を磨がれ、偏光性を与えられてピンクに輝いていた。

さつとパツクは俯いた。

肩が大きく動き、内心の動揺を表していた。

ビーチャは促した。

「言いなさいな、パツク！ いつまでだんまりじゃ、分からないわ！」

激しい言葉にパツクは顔を上げる。目に決意が現れる。

「ビーチャ、おれと結婚してくれないか？」

ビーチャは驚きに目を丸くした。その表情の変化によって、ビーチャの本当の年齢が顕わになったようだった。

「ごくり、とパツクは唾を呑みこんだ。ビーチャの返事を待っている。」

溜息をつき、ビーチャは物入れから細い煙管を取り出し、先にシガレットを挟んだ。ぱちりと音を立てライターに火を点けると、一息ふーっと吸い込む。

はーっ、とビーチャの唇から紫煙が吐き出された。

「本気なの？」

ビーチャは問い返した。パックは大きく頷く。

「もちろん！ 本気さ！ ちゃんと考えてあるんだ。その……生活設計ってやつさ！」

ビーチャは、微笑んだ。

「聞かせて」

パックは勢いづいた。のめり込むように話しを続ける。

「金を貯めたんだ！ 個人用の宇宙艇の頭金くらいはある！ これ
で宇宙艇を買って、メッセンジャー^{シジブ}船の船長になる！ この洛陽シ
ティから遠方の星系に行けば、差分の情報料だけで充分、月々の払
いはできる。宇宙艇なら、おれと君が乗り込んでも生活できるくら
いの設備はあるから……」

ビーチャは手を挙げ、パックの長広舌をストップさせた。首を振
り、また溜息。

「パックたら……そんな夢のような話を、あたしに信じて言う
の？ あたしにこの洛陽での仕事を放り出して、あなたに従いてい
けと言っの？」

たちまちパックの自信が空気の抜けた風船のように萎む。上目遣
いになって囁く。

「駄目かい？」

困ったような表情がビーチャの顔に浮かんだ。どんな時も余裕を
失うことの無いミューズ人には珍しいことであった。どう言おうか
考えているようだ。

やがて煙草をしまい、ビーチャは改まった口調で話し出した。
「パック……あなたは、あたしのお友達だわ。あなたはいつも、あ

たしに親切だったし、一度だってあたしの信頼を裏切ることには無かった……でも、やっぱり、あなたはお友達なの。結婚となると、それ以上の関係になる必要があるけど、あたしにはあなたに、そこまでの関係を築く一步は踏み出せない。分かって下さるかしら？」

諄々と諭すビーチヤに、パックはがつくり目を落とした。膝に乗せた両手が固く握り締められている。

「おれが原型プロトタイプだからかい？ 君はミューズ人の？ 種族？ で、おれは遺伝子が祖先そのままの原型だ。それが理由か？」

パックの口調は呻きに近かった。声に苦悩がありありと表されている。

ビーチヤの眉が微かに顰められた。そんな表情を浮かべているのに、ビーチヤの美貌は微塵も崩れてはいない。

「パック……」

だん！ とテーブルを叩き、パックは立ち上がった。その派手な音に、テラスの雑音が、ぴたりと止まった。

「判った！ 君に信じさせてやるさ！ いいか、ビーチヤ。おれは必ず宇宙船を手に入れて君に見せてやる！ そうしたら、おれの決意が判るだろう？」

ぶるぶると両手が震え、パックはポケットから小さな包みを取り出した。その包みを床に投げ棄てる。

「こんなもの！」

包みが開き、中からケースが転がり出た。ケースの蓋がぱかりと開き、中から小さな指輪が覗いた。

ビーチヤの指のサイズに合わせた婚約指輪であった。

くるりと背を向け、パックは大腿にその場を離れて行った。

下町

スカイ・パレスからパツクの足は自然と洛陽シティの下町へと向かっている。

輝くようなビル群は、薄汚れた古ぼけた建物に場所を譲り、行き交う飛行モータービルの型も、時代遅れが目だって多くなる。走路を歩く人々の服装も、パツクと同じような実用的で、野暮ったいものに变化した。

ポケットに両手をつっ込み、前屈みで歩くパツクの胸は嵐が吹き荒れていた。

お友達でいましょう……だって！ 畜生！

なんだってんだ……。ただ、結婚を申し込んだだけじゃないか。

ぴたり、とパツクの足が止まる。

目の前に立体映像で最新の小型宇宙艇のコマーシャルが展開されていた。

星空をバックに、すらりとした優美なデザインの宇宙艇が宙に浮かんでいる。その前には、透明な材料で作られた宇宙服を身に纏った一人の女性が宇宙艇の性能や、最新の設備を捲し立てていた。CM嬢の透明な宇宙服の下に見えるのは、かろうじて全裸ではないと主張できるだけの僅かな布地の服装であった。

浅黒い肌、人目を釘付けにする美貌。あきらかにミューズ人である。ミューズ人はあらゆる場面でタレントとして活躍している。

「これだけの装備で、今ならプライス・ダウンであなたのものに！ クレジットは各社対応しております！ どうぞ、お早めにお申し込み下さい！」

刺激的なファンファーレとともに、宇宙艇の値段が大きく表示された。金額を見て、パックは溜息をついた。

とても手が出ない。というより、最初から諦めている。

狙いは、中古の宇宙艇だ。数年落ち、いや値段が折り合えば十年落ちだって構わない。ともかく宇宙へ出られれば、それで御の字である。

パックには、当てがあった。

この近くに軍の払い下げの宇宙艇や、事故で壊れた宇宙艇を修理して販売している店があった。

ともかく宇宙艇を手に入れば……もしかするとビーチヤの気が変わるかも……。

パックはぐつと顎を引き締め、心覚えの場所を目指して歩き出した。

ゴロス人

中古宇宙艇販売屋の親爺はゴロス人だった。

腕がなんと四本もある？種族？で、エンジニア向きの身体をしている。逞しい身体つきで、パックが店を訪ねたときは忙しく四本の腕を動かして、なにか機械の調整をしているところだった。

「宇宙船が欲しいんだけど」とパックが声を掛けると、親爺は上半身だけ捻じ曲げ、じろじろと疑い深い視線を投げかけてきた。

「宇宙船？ お前さんが？」

パックが頷くと作業の手を止め、尻のポケットからウエスを取り出し、四本の手についた油を拭った。口許に楊枝を咥えている。その楊枝をぶつ、と吐き出すと、新しいのを一本取り出し、また咥えた。

二本の腕を腰に当て、一本を鼻のところへ持つていくと鼻頭をほりほりと掻き、もう一本で身体についた汚れを拭っている。

「ふーん、^{プロトタイプ}原型が宇宙船をねえ……」

親爺の言葉にパックは怒りを堪えた。

「来な」とばかりに親爺は首をかしげ、店の外へ出た。

出たところが駐機場になっていて、剥き出しの地面に数機の宇宙艇が停泊している。どれもこれも、恐ろしく古ぼけ、機体には宇宙塵がこびり付き、窓のガラスはまるで擦りガラスのようだ。

それらを指し示し親爺は、べちゃくちやと喋り始めた。

「こいつは五年前の型で、超空間ジェネレーターはバクラン・スリパーの空間緊張位相タイプだ！扱いやすくて、修理も簡単だ。部品のスペアも揃っているしな！」

親爺の告げた値段に、パックはガツカリとなった。先ほど見たコマーシャルよりはかなり下がっているが、それでもパックの手持ち金では届かない。

首を振るパックに親爺は次々と宇宙艇を案内していく。

「こりゃどうだ？ 年式は古いが、出力は充分だ。値段は勉強してやるぜ」

親爺の告げた値段にも、パックは首を振るだけだ。親爺は呆れて尋ねる。

「いったい、幾ら持ってきているんだね？」

パックは側頭葉に移植されている情報出力装置を働かせ、送信した。親爺もまた自分の情報装置を働かせ、パックと同期する。二人の目の前の空間に、情報装置が視覚部位に現出させる映像が浮かび出た。

「おいおい…… たったこれだけで、宇宙艇を手に入れようって算段かね？」

親爺は眉を下げた。顎を撫で首を捻った。

パックは心細くなつて尋ねる。

「無理かい？」

「無理もなんも、これじゃ、頭金にすら届かねえよ！それに、うちクレジットはやっていねえしな。まあ、諦めるこつた！」

しょんぼりと両肩を下げるパックを見て、親爺は何か妙案を思いついたのか、にやりと笑いかけた。

「待った！ いいことを考えた。あんだ、宇宙船操縦の資格は持つ

ているんだろうな？」

パックは頷き、記録を見せた。数ヶ月前、宇宙船操縦資格の記憶移植を受けている。

この時代、あらゆる資格は記憶移植という技術で植えつけることが可能だ。何年間もの年月習得が必要な技術、知識も、たった数時間で身につけることができる。記憶RNAを投与し、あとは下意識による直接刺激で、あっという間にものにすることができる。

従ってこの時代、いわゆる学校教育は行われていない。あるのは、ごく少数の研究者、科学者のための研究機関であり、大部分の人間にとっては知識は簡単に手に入るものになっている。

その中でも宇宙船操縦資格は人気のある資格だった。なにしろ宇宙船の操縦は、技術の裾野が広い。超空間をあつかう数学の知識にくわえ、宇宙船のジェネレーターの修理、操縦のための空間認識など様々な知識が一辺に身につく。必要なら資格者は工具を手にしてばらばらの部品の山から一隻の宇宙艇を組み立てることすらやつのけるのだ。

親爺は宇宙艇を並べている場所の後ろにあるスクラップの山を指差した。

「あの屑山には、宇宙艇を何台でも組み立てられるほどの部品が積まれている。あんたがその気になれば、あの中から必要な部品を見つけ、組み上げることだって可能だ。どうだい、おれはあれをあんたに任そう。あの中にあるものは全部タダで進呈するよ！ あの屑の山を片付けてくれれば、あそこで見つけるなんでも、あんたに呉れてやるよ」

呆然とスクラップの山を見上げているパックの背中を親爺は、どん、と叩き、大声で笑った。

「まあ、頑張りな！ 十年もあそこで探せば、きっと一隻分の部品

を見つけることもできるさ！」

我ながらいい思い付きだとはかりに親爺はぐずぐずと下卑た笑いを続けた。笑いすぎて、親爺は咽せ返っている。目じりに浮かんだ笑い涙を拭い、親爺は鼻歌を歌いながら事務所へ引き上げてしまった。

後にはパックが残された。

へろへろ

じわじわと怒りがこみ上げてくる。

あの親爺、おれをからかってやがる！ こんなスクラップの山から宇宙船を組み立てるだって？

パックはスクラップの山を見上げた。

確かに、山の中には無数の部品が雨ざらしになり、積み上がっている。中には宇宙船の部品らしいものも散見される。

親爺の言うとおり、根気よく探せば宇宙艇を組み上げられるだけの部品は見つかるかもしれない。が、どうやって探せばいいんだ？

やっぱり無理なのか……。

パックは諦めて背を向けた。

その時「なあ、あんた」と声がかかる。

ぎくり、とパックは足を止めた。振り返る。

確かにあのスクラップの山の中から声がした……ようだったか？

「ねえ、その……あんた、宇宙船が欲しいんじゃないのか？」

パックは声の方向を見つめた。ごたごたと部品が山になっている真ん中から、ひこひこと小さな明かりが瞬いている。明かりは細いホイップ・アンテナの先についているようだった。その明かりが声とともに明滅していた。

「だれだ、お前は？」

「だから宇宙船が欲しいのか、って聞いているんじゃないか！」

声に苛々した調子が加わる。

「欲しいさ……」

パックは答えた。どんな相手が話しかけてくるのか判らないが、興味湧いてきた。

プロトタイプ
「あんた、原型だな？」

声にパックは、むっとなった。こんな相手にまで原型呼ばわりとは……！

「だから、なんだ！」

「原型なら、宇宙船を上げるよ。僕、ずっとあんたみたいな人を待っていたんだ。ここに宇宙船を探しに来るのは、？種族？の連中に限られていたからね。やっと原型の人間を見つけられて、ほっとしているんだ」

ますます興味が増してくる。まるで嘘みたいな話だが……それが本当なら？

「おれが原型だから宇宙船を貰える、ってのか？　どういう訳で、そういうことになるんだ？」

「船が欲しくないのか、欲しくないのか、どうなんだい！」

声が急に強い調子になった。パックは唾を呑みこんだ。

「欲しいさ、そりゃ……」

「それじゃ」

ホイップ・アンテナが興奮したように、ぷるぷると震える。

「僕をここから掘り出してくれ！　ずっとこのスクラップに埋まって動けないんだ」

がらがらと崩れそうになるスクラップの山をパックは苦勞してよじ登った。瞬いている明かりの前に立つ。

「掘り出してくれって……ここに埋まっているのか？」

手を伸ばし、アンテナを握る。ぐいっと引っ張る。

やたら重い。ずるずるとスクラップの山に埋もれた声を掛けてきた相手が、どうにかゴミの間から引き出された。

「な、なんだあ、お前は？」

パックは叫んでいた。

アンテナにくっついていたのは、まん丸の顔だった。黄色い肌の、どうやらロボットの顔の部分らしい。大福餅のような柔らかな素材で、真っ直ぐな口と大きな目玉がついている。

口をにたりと笑いの形に歪ませ、ロボットは口を開いた。

「へへへ……僕、へ口へ口っていうんだ。よろしく」

宇宙船

「やれやれ、いったいこのゴミの中で何年いたことやら……。やっと外へ出られて、ほっとしたよ」

へろへろと名乗ったロボットの表情は、喋るにつれ、目まぐるしく変化した。

パックはロボットの顔をスクラップの山に置き、その前に座り込んで話に耳を傾けている。

「それにしても、なんで顔だけなんだ？」

パックの問いかけに、へろへろは渋面を作った。ロボットにしては、やたら表情が豊かである。

「失敗したよ。このスクラップ置場には、ちよくちよく近所の悪ガキが遊びに来るんだ。部品を失敬しにね……。もっとも、この親爺はぜんぜん気にしていないけど。そいつらに見つかって、面白半分には足を外されちまったのさ」

へろへろは急に熱心な表情になった。

「なあ、あんた！ 僕の足を探してくれないか。このままじゃ動けないし、動けなきゃ、あんたに宇宙船の有りかを教えて上げられないからさ！ どっか、その辺に僕の足が転がっているはずだよ」

パックは立ち上がった。

「判った、探してやる。しかし、おれの名はパックだ！ あんた、なんて呼ぶな！」

ロボットは、しゅん、となった。

「判ったよ……パックさん」

立ち上がったパックは、スクラップの山を見渡した。

日差しにきらりと銀色の光が目に入る。他のスクラップと違い、新しい。

近寄ると、二本の自在ジョイントの先に太い三本の指がついた部品が見つかった。それを手に取り、へろへろに翳して見せた。

「これか？」

「そう！ そうだよ、それだっ！」

へろへろは動けない顔だけで精一杯の勢いをつけ、ぴょんぴょんとその場で跳ねた。パックが手に持ったまま近寄ると、待ちきれないのか「早く、早く！」と急かす。

ころり、とパックはへろへろの顔を引っくり返した。顔の裏側に二つの接続部分があった。

「これだけでいいのか？ 胴体は、ないのか？」

「いいのさっ！ 僕は省エネタイプなんだ。無駄な胴体なんか要らないっ！」

パックは二本の部品をへろへろにくつつけてやった。かちり、と音がしてへろへろの顔に二本の自在ジョイントが嵌まる。

その途端、すつくとへろへろは二本の足で立ち上がった。ぎくしやくと何度も体操をするように動きを試す。

「おい、宇宙船は？」

「こっちだよ！」

へろへろは返事をする、と、まっしぐらにスクラップの山を駆け上った。慌ててパックは後を追いかける。意外とロボットの動きは身軽だった。

山の隙間にへろへろは駆け寄り、片方の足を使って地面を掘り始めた。

「ここか？」

へろへろは無言で頷くと、夢中で掘り返す作業が続いている。パツクは先端が尖っているパイプを探して地面に突き刺し、手伝い始めた。

それから当分は、二人の地面を掘り返す作業が続いた。

がちつ、と音がしてパツクは手応えを感じて作業の手を止めた。

何か固いものにパイプの先端が当たっている。

急に興奮が湧き上がり、パツクは腕に力を込めた。

「これか……」

掘り返した地面から宇宙船の外板らしきものが顕わになっている。ハッチの上蓋部分である。これが宇宙船の塗装色なのか、目にも鮮やかなオレンジ色だ。

ある種の達成感を憶えたパツクは顔を上げた。

びつくりしたことに、いつの間にか時刻は夕刻近くになっていた。夕日が洛陽シティの空を燃え上がるようなコーラル・ピンクに染め上げていた。

へろへろは蓋の横にあるパネルを引っくり返した。パネルが開くと、そこには十進数のキーが並んでいる。へろへろは太い指先で起用にキーを素早く叩く。暗証番号を入力しているらしい。

ぴっつ、と音がして、ハッチの上蓋がしゅつと溜息のような音を立て開いた。覗き込むと、内部に下りる梯子がある。

へろへろは、さっと内部に飛び降りる。

パックは慌ててへろへろに続いて内部に潜り込んだ。宇宙船が現れた途端、へろへろは人が　ロボットが変わったようになっていた。

「おい……へろへろ……」

梯子を降りると、どうやらそこはエア・ロックになっているようだ。エア・ロックの入り口は開け放たれて、内部は真っ暗だった。相当な長期間ここに埋まっていたのか、微かに埃っぽい。

かちやり、という音にふり返ると、入り口の天井近くから監視装置のようなレンズがパックの動きを追尾している。

いきなりレンズから細いビームが放たれ、パックの全身を舐めた。走査しているのか？

なんだこりゃ！

びっくりしてパックは一步後じさりする。

一瞬のことで、ふたたびかちやりという音とともに監視装置のレンズに蓋が閉まる。パックは体中を撫で回すが、なんともない。それきり、監視装置はうんでもなければ、すんでもなかった。

タダの認証装置か？

パックはエア・ロックから船内へと移動する。足を踏み入れると、いきなり明かりが灯った。

「うおっ！」

そこは、操縦室になっていた。人の出入りを感知して明かりのス
イッチが入ったのか。

ぱたり、という音に見上げると、ハッチが閉まったところだった。

？種族？たち

「それで、^{プロトタイプ}原型の小僧、どんな顔していた？」

問いかけられゴロス人のエンジニアは、思い出し笑いを浮かべた。

販売店近くのパブは仕事帰りの呑んべえたちで賑わっていた。カウンターに群がった連中の話題の中心は、パックにスクラップの山を掘り返せとけしかけた例のゴロス人である。

ゴロス人は酒の肴に、パックとの遣り取りを一同に話して聞かせていたのである。ゴロス人がスクラップの山を指差し、この山の中のなんでもタダで進呈するというくだりで全員がどっと沸いた。

みな、人類とは懸け離れた姿をしている。多いのは四本腕のゴロス人だが、ほっそりとした身体つきのパリス人もいる。皮膚の色が緑色がかっているのは、葉緑素が含まれているからだ。

パリス人の故郷は食糧に乏しく、体内で栄養を作り出すため、植物の遺伝子を混入させている。がっしりとした身体つきの身長百五十センチにも満たないのは高重力環境で知られているバルト人だ。むっつりとした顔つきのバルト人は、特に彼ら向きに作られた劣化ウランでできた重いカップを持って、火の噴き出るような強い酒を啜っている。

話に弾んでいる彼らから少し離れ、数人の原型の客たちが固まって目立たないように安酒を飲み続けている。

遺伝子に変更を加えている人類の子孫は？種族？で、変更を加えず祖先の人類のままなのは？原型？と呼ばれている。

原型は？種族？により徹底的に差別、侮蔑の対象として存在した。

「それがなあ……情け無さそうな顔してやがってよ……それでもスクラップの山を見上げて、何か考え込んでやがったのよ！ あの小僧、本気で掘り返すつもりかな？」

わはははと笑い返した、もう一人のゴロス人が聞き返した。

「それで、おめえ、もしその小僧がスクラップの山から宇宙船を組み上げたらどうするね？ タダでいいって言ったんだろっ？」

ぐすんとゴロス人は、鼻を鳴らした。

「そんなこと金輪際あるもんけえ！ あのスクラップから船を丸ごと一隻、掘り出すなんてこたあ、百年かかっても無理つてもんよ。もしできたら、おいらこの四本の腕で逆立ちしてスカイ・パレスの屋上まで歩いて登ってやるさ！」

「そいつは豪気だ。そのときゃあ、おれも付き合ってやるぜ」

最大出力

ひゅう ん……

操縦席の無数のランプが灯る。
船が目覚めた！

「おいっ！」

パックは操縦席に突進した。
へろへろが操縦席にかじりつき、片手で操縦桿を握っている。パ
ックの声に、ひよいと顔を上げた。目がきらきらしている。

「パック、有難う！ あんたのおかげで【呑竜】が目覚めた！」

「【呑竜】？ この船の名前か。おれのせいで目覚めたって、おれ
がいったい何をしたってんだ？」

早口に質問するパックに、へろへろは大きな口をにんまりと笑み
の形に歪める。

「この【呑竜】は原型の遺伝子を持つ人間が入室しないと動力炉を
作動させないようセッティングされているんだ。だから、あんたを連れて
きたってわけさ！」

「おれを利用したってことか……さっき、入り口でスキャンしたの
はこのためなんだな。あのビームでおれのDNAコードを読み取っ
たんだ！」

パックは、ちょっとむっとなった。なんだかこのロボット、下心
がありそうである。

にたりと笑ったへろへろは操縦席を指し示した。

「いいじゃないか！　ともかく出発だ。そっちの席が空いているぜ！」

無言でパックはへろへろの隣に座った。操縦席の計器を見て、呆れた。

「おいおい、この船、どのくらいここに埋まっていたんだ。この装置は、優に一世紀は前の型だ。こんなんで、飛べるのか？」

「心配なんぞ要らないよ。とにかく飛ばしてくれよ。操縦資格あるんだろう？」

へろへろは、しゃらつと言り返す。

一応の文句は言ったが、パックの心は躍っていた。資格を取ってからというもの、パックはいつしか、こうして宇宙船を動かすことを夢見ていたのである。

指先を操縦桿に伸ばす。

目の前に広がっている窓には、びっしりとスクラップが埋まっている。船内の明かりに照らされ、べつとりと泥や小石、その他ありとあらゆるゴミがぎっしりと窓ガラスに押しつけられ、壁を作っていた。

パックは反重力装置のスイッチを入れた。

だしぬけに、背中を蹴飛ばされたような衝撃が襲った。

しまった！　最大出力にしたままだった！

パックは悲鳴を上げていた。

始動音

ゴロス人エンジニアが大見得を切った直後、物凄い爆発音に似た衝撃が、パプの天井を揺すった。

「な、なんだ……地震か？」

驚き慌てる客たちは次に聞こえた甲高い音に目を剥いた。じつと耳を澄ませていたゴロス人の一人が、口を開く。

「おい、ありや宇宙船の始動音だぞ！」

「馬鹿あ言え！ 洛陽宇宙港は、こっからどのくらい離れていると思ってるんだ……あつ！ まさかつ！」

みな、同じ？ 仮説？ を考え付いたようだった。どやどやとパプの出口に殺到し、外へ飛び出ると、空を仰ぐ。

「ひゃあつ！」と頓狂な声上がる。

パプの近くの中古宇宙船販売店の辺りから、盛大な土埃が舞い上がっている。

がん！ ごん！ からん！

目の前の道路に様々なスクラップが立て続けに雹のように落下して、騒々しい騒音を立てていた。

土埃の中から、一隻の宇宙船が姿を表した。

目にも鮮やかなオレンジ色の塗装、デザインは百年も前のものだが、船尾の噴射口からは青白い光が放出され、モーターが健在であることを示している。

「ま、まさか、あの小僧、本当に山の中から船を掘り出したってことか？」

販売店の店長であるゴロス人が呻いた。
反重力で浮かぶ宇宙船の船首がまるでゴロス人を見つけたかのようにつーっ、と真ん前に回転して止まる。

ばかり、と船外ハッチが開き、中から一人の少年が満面の笑みを浮かべて姿を表した。

ゴロス人は呟いた。

「小僧……！」

少年は両手を口に当て、叫ぶ。

「おじさん！ あんたの言うとおり、スクラップの山からこいつを見つけたぜ！ 確か、山の中から見つけたものは、なんでもタダで貰っていいって言ったよな？ 有りがたく、頂くぜ！ サンキュー！」

ばたん、とハッチが閉まり、少年は再び船内に戻る。

くるりと船尾を向けると、宇宙船はその場を飛び立ってゆく。

呆然と口を開き、見送るゴロス人の顔色が徐々に真っ赤に染まる。

「畜生！」

怒りに我を忘れ、地団太を踏んだ。

「凄い……原型の少年が、宇宙船を掘り出したんだ……」
声に振り返ると、先ほど隅で固まっていた原型の客たちが飛び去

る宇宙船を憧れるような眼差しで見上げている。原型たちの顔には、晴々とした表情が浮かんでいた。

目が合うと、にやりと笑い叫ぶ。

「スカイ・パレスを逆立ちで登るところ、是非とも拝見したいもので……」

ゴロス人は「くっ」と唇を噛んだ。

悔しいことに、言い返せない。

「こいつはいつたい、何年ぐらい埋まっていたんだ？」
上機嫌にパックはへろへろに訊ねた。へろへろはちよつと考え込む。

「百年……は、優に経っているかな？ 憶えていないや」

「その間、お前はずっと、あそこで原型の人間がやってくるのを待っていたって訳か？」

へろへろは頷いた。パックは呆れた。いくらロボットとはいえ、一世紀も待ち続けるとは、尋常ではない。その間、こいつはここで何をしていたのやら……。

そのことを尋ねると、へろへろは恥ずかしそうな表情を浮かべる。

「うーん……まあ、いろいろとね……」

へろへろは言い淀んだ。

パックは肩を竦めて見せた。ロボットが何をしようと興味は無い。とにかく、今は宇宙船のことで頭が一杯になっている。

宇宙船【呑竜】は洛陽シティ上空へと上昇していく。パックは操

縦桿を傾け、水平飛行にさせる。

通信装置が金切り声を上げた。許可を受けていない宇宙船の上昇に、シティの交通局の自動監視装置が反応したのだろう。

パックは監視装置の喚き声を無視して、接続を一方的に切ってしまった。

へろへろが不安そうに尋ねる。

「いいのかい？ 無視して」

パックは笑って見せた。

「知らんぷりするに限るさ！」

どうせこれから宇宙へ向かうのである。洛陽シティの交通局なんか知るものか！

へろへろはパックに顔を向け、口を開く。

「ねえ、どこへ行くつもりなんだ？ 宇宙へ向かうんじゃないのか？」

「もちろん、そのつもりだ。でも、その前に行くところがある」

パックは【呑竜】の針路を洛陽シティの高級住宅街へと向けた。

ミュージズ人

浴室からビーチヤが出ると、さつと数匹の妖精が^{フラウニー}出迎え、小麦色の肌にガウンを掛ける。化粧台に座ると、妖精は髪の毛に取り付き、手早く最新の髪型に纏め上げる。

妖精はピグミー・マーモセットの遺伝子を改良し、愛らしい姿形を与え、有る程度の会話能力を持たされた流行のペットだ。人間には絶対服従で、生殖能力を制限しているから、繁殖行動に伴う反抗心も皆無である。

ビーチヤによる遺伝子デザインの成果である。妖精は洛陽シティのセレブたちに大歓迎を受け、デザイナーのビーチヤには、膨大な権利料が入ってくる。

ビーチヤは遺伝子デザイナーなのだ。

高級住宅街の、数百階建てのマンション屋上に、ビーチヤは住まいを持っている。

室内はすべて、ミュージズ人によるデザインの家具で占められている。居間には同じくミュージズ人芸術家の手による空間偏光彫刻のオブジェが、ゆつくりとした光の乱舞を見せていた。

ミュージズ人は芸術家であり、デザイナーである。絵画、音楽、演技など、ありとあらゆる芸術分野にミュージズ人は活躍していた。

逆に言うとミュージズ人以外の芸術家は事実上、存在しない。ミュージズ人の手によらない芸術作品、あるいはデザイン、音楽……そういった作品は？ノー・ブランド？であり、市場において相手にされないのだ。

ソファに横座りになると、それまでベランダに立っていたもう一人のミューズ人の男性が室内に入ってきて、手にしたグラスを差し出した。

それまでビーチャに群がり、なにくれと世話を焼いていた妖精たちが男性の入室でさつと四方に散り、大人しく自分たちに用意された控えの窪みに戻る。

男性は黒檀のような黒い肌をしている。

がっしりとした逞しい身体つき、顔は男性の理想形といっていいほどハンサム。この男性もまた、ミューズ人である。

礼を言つてビーチャはグラスを受け取り、唇に近づけた。火照った頬に冷たいグラスが心地よい。

ミューズ人の男性は口を開いた。

「結婚を申し込まれたんだって？」

男性の口許には面白がっているような笑みが浮かんでいる。

ビーチャは首を小さく振った。

「その話は、よしにして、アラン……」

アランと呼ばれたミューズ人男性の眉が持ち上がった。

「なぜだい？ 原型の……確かパックという男の子だったな。それが、ミューズ人の女性に結婚を申し込むなんて、そうあることじゃない。興味津々なんだ、僕は。なんでもパック君とやらは、君に宇宙船を手に入れると大見得を切ったそうだね」

「あたしは断ったわ。それでいいでしょう。もう、この話は止めにしましょう」

ビーチャの声には憂鬱そうな響きが込められている。アランはちよつと肩を竦めて再びベランダに出た。

夜が迫って、濃いプルシャン・ブルーに染まった夜空には星が輝き出している。

「宇宙船か！ 原型の人間が宇宙船を所有するなんて、考えられんよ！」

空を見上げるアランは眉を寄せた。

「ありゃ、なんだ……！」

アランの声にビーチチャは顔を上げた。

きい ん……

甲高い音が近づいてくる。ビーチチャの住まいに一隻の宇宙船が接近してくる。

驚いて、ビーチチャはベランダに歩み寄った。アランが側に立つと、ビーチチャの肩を抱いた。

反重力場による気流の乱流がビーチチャのガウンの裾を翻させる。

形のいい両足が剥き出しになった。

宇宙船はベランダに着陸し、ハッチが開くと、パックが上半身を乗り出した。

「ビーチチャ！ おれは約束どおり、宇宙船を手に入れたぜ！」

宇宙船のモーターの音に負けないよう大声を張り上げたパックは、ビーチチャの隣に立つアランを見て顔色を変えた。

「ビーチチャ、そいつは、なんだ？」

アランは叫び返した。

「君がパックか！ お初にお目にかかる。僕はアラン！ ビーチチャの婚約者だ！」

パックは仰天した。

「婚約者！」

ビーチャはアランの顔を見上げた。

「アラン……あなた？」

アランは笑顔でビーチャに答える。

「どうした、ビーチャ。僕では不足かい？」

さつとビーチャは俯いた。

その様子を見て、パツクは怒りの表情を浮かべる。口許が、きりきりと引き結ばれた。

「そうか……よく判った！ 君の幸せを祈ってるさ！」

言葉は祝福を送るものだが、怒号していた。ばたんと音を立てハッチを閉める。

再び宇宙船は甲高いモーターの音を立てて宙に浮かんだ。と見るや、あっという間に飛び去った。

見送ったアランは、ほっと溜息をつき、ビーチャに言葉を掛ける。

「やれやれ、本当に手に入れるとは、驚いた原型の男の子だな」

ビーチャは飛び去った宇宙船を無言のまま、じつと見つめていた。アランはあやふやな動作でビーチャの肩を抱いた手を離れた。キスをしようと顔を近づけたが、ビーチャが応じる気配がないので諦める。その動作の一つ一つが、まるで芝居でも演じているように決まっていた。

ミューズ人は決して、どんなときでも格好の悪いことはしない。できないのだ。そう、遺伝子に書き込まれているのだから。

反応

宇宙船……いや、宇宙船と言うには大げさすぎる。やはり宇宙艇だろう。宇宙艇【呑竜】は、一世紀もスクラップの中に埋まっていたとは思えないほど良好な状態だった。

コンソールのデザインは古臭く、計器の中には見慣れない形式の表示も多く、それらには戸惑いを隠せない。

それでもパックの受けた記憶移植と潜在意識下への教育効果は抜群で、まるでベテランの宇宙飛行士のように易々と操縦ができた。

宇宙艇は成層圏を抜け、どんどん加速していく。すでに窓外は真つ暗な闇で、瞬かない星々が張り付いたように見えてきた。

「どこへ行くのか？」

パックは呟いた。

そうだ、目的地を決めなきゃあ……。

パックの目がコンソールの計器に留まった。

無意識に表示を確認する。

燃料よし！ 気圧よし！ 各計器類は正常……。

おや？

「なんだこりゃ、船倉にエネルギー反応があるな」

パックは船内のエネルギー表示を見つめて呟いた。

隣に座るへ口へ口の顔色が、さっと変わった。本当に変わったの

である。

レモン色だったロボットの顔の表面が、真っ白になり、ついで真っ青になった。まるで絵の具を塗ったように、本当にその色に変化したのだ。多分、へろへろの皮膚はカメレオンのように変色する機構が組み込まれているのだろう。

「どうした？　へろへろ」

「……」

へろへろは硬直したまま動かない。顔からは、ふつつつと大量の汗が噴き出す。玉のような水滴を見て、パックは呆れた。

ここまで人間の表情を真似することないのに……。

ちらり、とへろへろはパックの顔を見上げる。ひくひくと口が動き、なんとか笑顔を浮かべている。

「な、なーんでもないよ！　多分、計器の間違いだ……そ、そうだ、そうに決まってる！　だ、だから気にしないで……」

パックは操縦席から立ち上がった。

「ちよつと見てくる」

「パック！」

へろへろは慌ててパックの前へ立ち塞がった。

「やめようよ、ねっ？　船倉に行っても、何にも無いからさ！」

パックはへろへろを無視して操縦席から船倉へ続く階段を見つけ、降りていく。

へろへろの悲鳴が背中から聞こえてくる。

「頼むよ……パック、行かないで……！」

サイレン

船倉は狭苦しく、ごたごたと様々な荷物が積み重なって、薄暗い。パックは照明のスイッチを手探りして入れた。

ぱつと照明が灯り、目の前に現れた物を見てパックはぎくりと立ち竦んだ。

「こりゃ……何だ？」

一人の少女が立っていた。いや、改めて眺めれば、少女の立像である。

真っ赤な髪の毛、肌は抜けるように白く、顔には細かな雀斑が散っている。見開いた両目の瞳は鮮やかなグリーン。細い、尖り気味の顎と、低い鼻の女の子で、美人ではないが印象的な表情をしている。

立像は、まるで何かを言いかける途中のような口を微かに開けたままのポーズで立っていた。

最初は生きているのかと思ったが、女の子の立像のあちこちに埃が薄っすらと積もり、ぴくりとも動かないので、どうやら立像であると判断したのである。

それにしても、まるで生きているかのような迫真力である。

恐る恐るパックは手を伸ばした。上げている右手の指に触れた。

固い。まるで大理石を触っているかのようだ。

やっぱり立像……いや！ 違うぞ！

パックは、あることを思い出した。

これは停滯状態スレイシスの、本物の人間なのではないか？

停滯状態とは、時間が止まった状態を指す。

超光速の研究で副次的に生まれた発見で、停滯フィールドというのが発明された。

この停滯フィールドに包まれた物は時間が止まる。その一瞬が凍りつき、永遠にそのまま保存される。

洛陽シテイの王立博物館では、古代の文物で時の経過に耐えられない展示物を、この停滯フィールドを利用して展示している。

この女の子も、多分そうなのだ。何か事情があつて、停滯フィールドに避難したのではないだろうか？

気配に振り向くと、へろへろが上目遣いに立っている。パックと目が合うと、ついと視線を逸らす。

「へろへろ、これ、知っているのか？」

「知らない……」

へろへろは横を向いている。しかしその表情は明らかに「嘘をついています」と大声で叫んでいるかのようだ。

大抵の場合、ロボットは嘘が苦手である。本質的に人間の命令に忠実に従う本能を植え込まれているので、嘘をつくという行為は、その本能に逆らうものだからだ。

パックはへろへろに向き直った。

「おいっ！　へろへろ、こっちを向け！」

できる限りの威厳を込めて命令する。

ヘロヘロは、ぎくしゃくとした不自然な動きで、パックに向き直る。

パックが目にも力を込めぐつと睨むと、ヘロヘロは金縛りになったかのように凍りついた。

一語一語、パックは区切るように命令を下した。

「いいか、良く聞けよ。これは命令だ！ め、い、れ、い、だ！ この女の子はいったい何者だ？ 教えるんだ。繰り返す、これは命令だ！」

大声を張り上げると、ヘロヘロは細かく震えだした。今にも部品が吹っ飛んで自然分解しそうだ。

こいつは相当に強く命令を受けているな。なんとしても、この女の子の正体を明かさないう命令されているんだ。

パックは戦略を変えた。

「それじゃ、この女の子の名前はなんだ？」

「ミリイ……」

か細い、雑音のような声で、ヘロヘロは答える。

ミリイか。やっと名前だけは答えた。

次に何を訊くか考えている時、操舵室からけたたましい騒音が聞こえてきた。はっ、とパックは顔を上げた。

ありや、警察のサイレンだ。

ポーラン人

操縦席に戻ると、船窓に無数の警察宇宙艇が宇宙空間に集合して【呑竜】の周りを取り囲んでいる。

白と黒のツートーン、船体の外にパト・ライトが旋回して、ちかちかと瞬いている。船腹には「帝国警察」の文字が、でかでか書かれていた。

サイレンの音は宇宙艇の「環境音再現システム」による効果音だ。宇宙艇からサイレンを鳴らすための電波が放射され、それを受け取った【呑竜】のシステムが鳴らしているのだ。このサイレンを拒否することはできない。

モニターの画面に厳しい顔つきの、警官の制服を着用したポーラン人の顔が映し出された。皮膚は昆虫を思わせる硬質のもので、キン質に覆われ、一見ロボットのように見える。が、まぎれもなく？種族？の一員である。

ポーラン人は蟻のような社会を形作ることで知られている。

母性の女王を中心に、無性の下級階層が奉仕する仕組みで、本質的に官僚に適合した性質を持つ。上からの命令には絶対服従で、断固やり遂げるという性格をしているため、どんな言い訳も許さない。

コチコチの石頭、いや、人工超硬度透明ダイヤモンド頭、いやいや、立方晶窒化炭素頭揃いである。

ポーラン人は昆虫そっくりの口を開いた。キチキチ……と聞こえる奇妙な音声が聞こえてくる。

「そちらの船には、盗難の被害届けが提出されている。すぐ洛陽シティに戻るよう命令する！」

「盗難届け？ どういうことだ？」

パックが聞き返すと、警官は答えた。

「中古宇宙船販売の店主が、自分の敷地から宇宙船を盗まれたと訴えてきたのだ」

パックの頭にかーっ、と血が昇る。

「馬鹿を言っな！ あのスクラップの山から好きなのを掘り返していい、と言ったのは、親爺のほうだぞ！ なんでもタダで呉れてやるって、おれはこの両耳でしっかりと聞いたんだ！」

ぎろりとボーラン人の複眼がパックを見返した。

「事情は聞いていない。当方は、そちらの宇宙船を接收せよと命令を受けているのだ。拒否するなら、逮捕する！」

「やるなら、やってみやがれ！」

パックは叫び返した。

警官が何か言いかけるのを待たず、パックは操縦桿をぐいと引いた。

だしぬけに【呑竜】は全速力で飛び出した。

船内の加速度調整装置が働き、大部分の加速は吸収できた。それでも処理できない僅かな加速が、プレス機のようにパックを操縦席に押しつける。

警察の宇宙艇は慌てて【呑竜】の追跡に入った。それでも【呑竜】の加速が勝っているのか、見る見る彼我の距離が開く。

「すげえ！」

パックは喚声を上げた。

一瞬にして【呑竜】は亜光速になっていた。

モニターに映し出された警察の宇宙艇は後方に押し付けられたように平べったくなって見えている。ローレンツ短縮のせいである。赤方偏移により、薄暗く赤みがさして見えていた。やがて距離が開きすぎ、船のカメラの撮影可能範囲を超えてしまい、捉えきれなくなっ て見えなくなる。

あっという間に【呑竜】は外惑星を越え、最外縁を構成するオルト雲まで達していた。

さて、それでは超空間ジェネレーターを始動させようかとパックが考えていると、いきなり【呑竜】は巨人に掴まれたかのように、がくんと速度が落ちた。

急激に停止状態に陥り、巨大な慣性が熱に変換されて船の外部放熱板に送り込まれ、赤外線となって放出される。

「どうしたのっ？」

へ口へ口がやっ と操縦室へと走りこんでくる。

「判らねえっ！ いきなり速度が落ちやがった……」

船窓を見たパックの顎が、がくりと落ちた。

「あーや……」

ぱくぱくと言葉なく、口だけが動く。驚きに言葉を失う。

目の前に、途轍もなく巨大な宇宙戦艦が見えていた。

待っていた男

船は動かない。パックが何をどうしても、びくとも動かない。操縦桿を力一杯うんうん唸りながら引いても、押しても、てんで駄目だ。まるで膠が張り付いたかのように、宇宙空間の一点に凍りついている。

原因は判っている。

あの無闇矢鱈とでかい、宇宙戦艦に決まっている！
しかし、でかいにも程がある。

全体はごつごつとして、小惑星をそのまま利用した艦体に、あちこちから不恰好な艦橋だの、超光速ジェネレーターだのがくつついている。おまけに、地獄の針の山のように、無数の砲列が四方八方を睨んでいた。

全長五十キロはありそうだ。これだけ馬鹿でかいと、どんな重力制御装置を搭載しているようが、惑星表面には降下できない。純粹に宇宙空間を航行するための宇宙戦艦なのだ。

小惑星の表面のあちこちには、大小無数のクレーターがあつた。もともとあつたのか、それとも、宇宙での戦闘の傷跡か？

呑竜を引っ張っているのは牽引^{トラクター}ビームってやつだ。
収束した重力波を集中させ、呑竜をがっちりと掴んで離さないつもりだ。

へ口へ口はガタガタと震えている。パックは声を掛けた。
「へ口へ口、あの宇宙戦艦を知っているのか？」

パツクの声にへろへろは「はっ」と我に帰った。この様子では、見知っているに違いない。

「知らないよ」

「嘘だね」

パツクが決め付けると、へろへろは俯いた。

「ありや、何だ？ 何で、この船を無理矢理こっやって停める？ お前、その訳を知っているな！」

へろへろの身体の中から「ぶぶぶぶ！」という震動音が響いてきた。

くるり、と両目が白目に引っくり返り、ぱかりと口を開けるや、へろへろはぼったり仰向けに倒れる。

ぽあ……、とへろへろの口から薄く煙がたなびいた。さっきのパツクの追及と合わせ、機能停止の限界に達したのだろう。

う~~~~う~~~~……

この緊迫した場面に似合わないのんびりとしたサイレンを響かせ、警察の宇宙艇が“押っ取り刀”で接近してきた。

ちかちかとパト・ライトが近づき、停泊している宇宙戦艦に気付いたのか、宇宙艇は急制動を掛ける。

環境音再現システムは、それに「ききーっ！」というブレーキの音を付け加える。

この宇宙戦艦の出現は警察当局にとっても予想外のことだったらしい。宇宙艇は戸惑ったように、じりじりと距離を詰めてきた。

モニターにボーラン人の警察官が現れた。

「船籍不明の宇宙戦艦に警告する。貴艦の所属、艦名を明らかにせよ！ 当宙域は銀河帝国首都宙域であり、絶対防衛圏内として、い

かなる軍艦の接近も禁じられている！」

モニターが分割され、そこに一人の人物が姿を現した。銀色の皮膚、つるつるの頭をした、がっしりとした体格の男である。

男は口を開き、話し出した。まるで洞窟の奥から響いてきそうな、低く轟くような声音であった。

「こちらは【鉄槌】^{トル・ハンマー}。銀河帝国宇宙軍アンドロメダ方面軍司令を任されているシルバー艦長だ。当方は銀河帝国皇帝の正式な勅許状を受けている。印璽を見るかね？ それに、確かに首都惑星の周囲は絶対防衛圏内だが、ここは主星から二天文単位は離れている。本艦が停泊しているのは、オールト雲の外側であるから、防衛圏外だ」

警察官は、明らかに怯んだようだった。

「し、しかし貴艦が捕獲している宇宙艇は、洛陽シティの市民から盗難の届出があり、接收の命令を受けている。直ちに当方に引き渡すよう、要求する！」

シルバーはぐい、と首を揺すった。

「その船は、我がほうが優先権がある！ そちらより上級よりの命令なのだ！ いいかね？ 恐れ多くも、皇帝陛下直々の命令なのだぞ！」

ポーラン人は困惑したように、びくびくと全身を奮わせた。葛藤が高まったときのポーラン人の反応である。

「こ、こ、こ…… 皇帝陛下！」

シルバーはうんざりしたような声を上げた。

「だから、先ほどから申し上げている。正式な勅許状を受けていると。皇帝陛下の印璽も押されたものだ」

これは、効き目があった。

ボーラン人は根負けしたように、がつくりと項垂れた。額から生えている触角が、だらりと、だらしなく下がる。

「判った……しかし、その命令を確認させて欲しい。唯今より速やかに我らは首都惑星へ引き返し、そちらの命令を確認するので、そのまま停泊したままにいるよう、要求する」

この場所から首都惑星へレーザー通信で質問を送っても、返信が届くのは丸一日近くかかる。超光速航法は実現されていても、超光速通信ははまだ夢のままだった。だから直接赴くほうが早いのである。

あたふたと警察の宇宙艇が引き返すと、画面のシルバーはパックを見つめた。

微かに眉根を寄せ、問いかける。

「そっちの船は【呑竜】だな。それは間違いない。しかし操縦席に座る君は、わたしの知っている相手ではない。ミリイはどうしたんだね？」

「ミリイってのは、船倉にいる停滞フィールドで固まっている女の子か？ おれはパックだ。いったい、どういう訳か、こっちのほうがいいよ」

シルバーの唇が「ほ！」というように窄まった。

「停滞フィールドか。成る程。それで、君が代わりに操船していると、そういうことか。ま、どちらにしても【呑竜】は、こちらで頂くことになる。抵抗するなよ。こちらの牽引ビームに掴まったままじたばた暴れると、ばらばらに分解しかねないからな。わたしは、そっちの船を無償で手に入れたいのだ」

シルバーの視線が冷酷なものに変わり、一方的に接続を切ってしまった。

パックは慌てて通信回線をオープンにして呼びかけた、だが、シルバーは無しの礫で、だんまりを決め込んでいる。

ぐい、と【呑竜】の船体が揺れた。

じんわりと宇宙戦艦【鉄槌】に引き寄せられていく。戦艦の表面がするすると開き、巨大な格納庫が現れる。

パックは操縦席で腕を組んだ。背後を振り返り、声を上げる。

「おい、へロへロ！　いつまで気持ち良く気絶しているつもりだ？　へロへロの目玉がぱくりと元に戻った。ひょい、と立ち上がり、きよろきよろと辺りを見回す。

「どうなってるの？」

パックは船窓を指さした。

戦艦が近づいてくる。いや【呑竜】が近づいているのだ。パックは待ち受けた。

こうなったら、どうにでもなれ！

相談

がっちりと牽引ビームに捉えられたまま、【呑竜】は着実に蜘蛛の糸に絡まれた虫けらのごとく、シルバーの宇宙戦艦【鉄槌】に引き寄せられていく。

近づけば近づくほど向こうの巨大さが際立つてくる。まるで一つの都市が超空間ジェネレーターを備え、宇宙を航行しているといつてよかった。引き寄せられている格納庫以外にも大小無数の格納庫が口を開け、そこからは【呑竜】と同じくらいの大きさの宇宙艇や、遙かに大きな駆逐艦クラス、巡洋艦クラスの宇宙船が何かの任務を帯びているのか、さかんに出入りを繰り返している。

多分、格納庫には人間がいるのだろうが、距離が遠すぎて、姿を確認するには至っていない。

パックはへろへろに話しかけた。

「へろへろ、船倉のミリイって女の子、停滞フィールドから出してやれないのか？」

へろへろは、ぎくりとなった。

「ど、どうして？」

「どうも、シルバーって銀鍍金野郎、あのミリイって女の子の知り合いらしい。そうなんだろう？」

問いかけると、渋々とへろへろは頷いた。

「今、この船は引き寄せられている最中だ。おれはさっぱり事情が判らねえまま、巻き込まれちゃまっている。せめて何がどうなってるのか、知りたいじゃないか。だから停滞フィールドから出してやれよ。事情を聞きたいしな。それに、あっちに行ってから停滞フィー

ルドを切ったら、色々まずいんじゃないのか？」

これには素直に頷いた。

「そうだね、こうなったら……」

ヘロヘロは船倉へと足を向ける。パックはその後続いた。

光線銃

最初に見たときと同じく、女の子の立像はぴくりとも動かない。へロへロは自分の頭から伸びているホイップ・アンテナをミリイに向けた。

「僕がミリイの停滞フィールドの解除スイッチになっているんだ……」

へロへロのホイップ・アンテナの先端がミリイに触れた。アンテナの先端に灯っている明かりがひととき強く輝く。

ふっ、と少女の立像が動いた！

途端に「はつくしょん！」とミリイは大きく噓くしゃみをする。身動きすると、それまで積もっていた埃が舞い上がる。この埃が鼻に入ったのだろう。

目に埃が入ったのか、しきりと瞬きをし、両手で目を擦っている。

「ああ、もう！ なによ、これは……。ひっどい埃……」

ようやく目が開くようになって、ミリイは目の前に立っているパツクに気付いた。

「誰、あんた」

表情が険悪になる。さっと身構え、いつでも攻撃に移る姿勢になった。

それまでパツクは気がついていなかったが、ミリイは銃を携行していた。まるで手品のように、ミリイは手に光線銃のようなものを握っていた。銃の先端がパツクの胸に狙いを付けている。

思わずパックは両手を挙げた。

「よ、よせよ！ そんな物騒なもの、振り回さない！」

「あたしの船に何の用？」

「おれの船でもあるんだぜ」

パックの言葉にミリイは「へっ？」と、ぼかんとした表情になる。
「ちよつと待ってくれよ、ミリイ。穩便に行こうよ……」

へろへろがしゃしゃり出た。

「へろへろ！ あんたまで！ ということは……あつ、あたし停滯
フィールド……」

眩き、目を細めた。へろへろを見て叫ぶ。

「いったい何年、あれから経っているの！」

一瞬にして状況を理解するとは、大した女の子だ、とパックは感
心する。

「百年くらい……」

へろへろの言葉に、ミリイは衝撃を受けた様子だった。手にした
銃がだらりと下がる。銃の狙いが逸れて、パックは内心ほつと安堵
の溜息をついた。

「百年……」

手を髪にやり、くしゃくしゃと掻き回す。

パックは声を掛けた。

「え、ええと……いいかな？」

挙げている両手を下げる素振り。

さつとミリイは銃を持ち上げた。

「そのままよ！ 動かないで！」

パックは、ぴん、と両手を垂直に差し上げる。

ミリイの勢いにつられ、へろへろも両手を挙げようとする。だが、二本の腕兼用足を上げたので、ころんと無様に引っくり返ってしまった。

どすん！ 船体が震えた。

「何、あれは？」

「この船はシルバーって奴の【鉄槌】って戦艦に掴まったのさ。今、牽引ビームで引っ張られている」

「なんですってえ！」

パックの説明にミリイは悲鳴に近い叫び声を上げた。

見る見る顔が真赤になり、銃をホルスターに納めると、脱兎のごとく操縦室へ駆け込んでいく。

格納庫

戦艦【鉄槌】の格納庫が大きく迫り、宇宙艇【呑竜】は今にも呑み込まれるところだった。

格納庫には数十名、いや百名にも及ぶ手に武器を持った？種族？が待ち受けている。全員が油断なく、銃口を通過する【呑竜】に擬していた。

二人は船窓に顔を並べて格納庫の光景を見守っていた。

ミリイはパックに銃を突きつけることを忘れていたようだった。パックは目の前の光景に首をかしげた。

「妙だな」

「なにが？」

ミリイが素早く言い返す。

「この戦艦は宇宙軍のものなんだろう？ それにしちゃ、こっちを取り囲む連中、まるで制服なんか気にしちやいない。皆、思い思いの格好だし、手にした武器も、てんでばらばらだ。本当に宇宙軍なのか？」

ミリイは目をまじまじと見開き、パックの顔を覗きこんだ。

「誰がそんなこと言ったの？ シルバーの戦艦が宇宙軍に所属しているなんて与太を」

「その、シルバー本人がさ。警察の宇宙艇を、そうやって追っ払ったんだ」

ミリイは爆笑した。

「あっはっはっはっは！ おっかしい！ そんなシルバーの嘘っ八

を頭から信じるなんて、なあーんて甘ちゃんなのかしら！」

パックは仰天した。

「嘘なのか？」

ミリイは笑い止んだ。

両手を振り回し、あたりを指し示した。

「当たり前じゃないの。こんな、小惑星を改造した宇宙戦艦なんて、正式の宇宙軍艦艇の中にある訳ないわ！」

パックはあんぐりと口を開け、ようやく言葉を絞り出す。

「そ、それじゃ、シルバーの正体は？」

「宇宙海賊よ。ま、百年も経っていたら、あんたが知らないのも無理はないわ。百年前……あたしにとっちゃ、ついこないただけど……あいつつたら、あたしのお祖父ちゃんの恩も知らずに、さんざっぱら宇宙を荒らし回った挙げ句、今度はあたしの【呑竜】を狙ったのよ……。でも、どうして楽々と掴まったりしたの？」

おずおずとへろへろが説明を開始した。

百年間、ずっとスクラップに埋まっていたこと。パックが【呑竜】の封印を解いて宇宙へ飛び出したこと。警察の包囲を振り切るため、亜光速の速度で突進したこと……。

最後のくだりでミリイは叫んだ。

「それよ！ 亜光速を出すため、無反動スラスターを使ったんでしよう？ スラスターの宇宙に残す航跡を、シルバーの奴め、感知したんだわ！ それで、ここで待ちつけ、牽引ビームで動きを止めた。まさに、飛んで火に入るお馬鹿虫、って状態ね！」

最後のセリフはパックに向けて言ったものだった。パックの胸に怒りがこみ上げる。

「そんなこと、おれが知るわけないじゃないか！ あのシルバーがこの宇宙艇を欲しがっていること、へ口へ口は何にも言わなかったぜ！」

ミリィが言い返そうとしたその時、宇宙艇の動きが止まった。

死刑宣告！

しずしずと格納庫の床に着地する。当然のことながら、重力発生装置のおかげで、ちゃんと上下の感覚がある。

ずらりと居並んでいる戦闘員を見て、パックは合点した。

成る程、目の前に武器を構えている連中は、どう見ても正規の戦闘員には見えない。だらしない服装で、手にした武器の構えもなげやりだ。中には煙草を吹かしているやつもいるくらいだ。

その中に、銀色に輝く皮膚をしたシルバーの姿がある。シルバーは【呑竜】の船窓を覗き込んでいるミリイを見つけ、驚きの表情を浮かべた。

が、すぐにやりと笑いを浮かべる。口許が動いた。

「ミリイさん、お久しぶりですな！」

シルバーの声が船内スピーカーから聞こえてくる。

どうやって通信しているのだろう、とパックは不思議に思った。

シルバーはそういった通信装置を何も持っていない。

「あんたは久しぶりでも、あたしには、ついさっきのことに思えるわ。なにしろ停滞フィールドで固まっていたから」

ミリイが答えると、シルバーは何度も頷いた。

「成る程、成る程、それは失礼しました。ともかく、こうしてお目にかかれ、嬉しい限りで御座いますな。さ、こちらへお出でを願いますかな。格納庫はちゃんと空気も御座いますよ」

「出たくない、と言ったらどうするの？」

シルバーは大げさに肩を竦めた。

「さあ、どうなりますことやら……。その場合、無理矢理にも押し入ることになります。わたしとしては【呑竜】に髪の毛一本ほどの

傷もつけないのですよ。そんな哀しいこと、わたくしにさせないで下さいよ」

最後は哀願するような調子になった。

二人の遣り取りを、パックは奇妙に思った。

この二人、古くからの知り合いらしいが、シルバーはまるでお姫様に対するような態度で終始、ミリィに接している。

ミリィはぐい、と顔を上げた。

「しかたないわね。ともかく出るから、そこらにいるガラクタどもを、どけなさい！」

ミリィに「ガラクタ」呼ばわりされた手下は、シルバーの合図でさっと後ろに下がる。

ミリィはパックを見た。

「あんたも出るのよ。悪いけど、あんたも一蓮托生ってことで、諦めて頂戴」

パックは首を竦めた。

「しかたねえ……。何がどうなっているか皆目だが、付き合つよ」

二人はエア・ロックへ向かった。

ミリィは途中で振り返り、ぼけっと突っ立っているヘロヘロに叫んだ。

「ヘロヘロ！ あんたも来るのよ！」

ヘロヘロは、ぴょん、と一飛びすると、ぱたぱたと足音を立ててミリィの背後につき従った。

「ご、御免……つい、ぼんやりしてた」

二人と一台のロボットは、エア・ロックから船外へ足を踏み出した。

シルバーが満面の笑みを浮かべ、ミリィを待ち受けていた。

どっしりとした身体つき、身長はパックに比べ、頭二つ分は超えている。体重は四倍はありそうだ。いや、どう見ても金属製だから、十倍にはなるのか？

シルバーはじろりとパックを睨んだ。

「その小僧は殺せ！ 部外者だ！」

さっと周りの戦闘員がパックに向け、武器の狙いをつけた。

パックの心臓が凍りつく！

？
雑種？

突然、ミリイが高らかに笑い声を上げた。

「馬鹿なこと言わないで、シルバー。本気でパックを殺す気などないんでしょう？　そう言えば、あたしが折れると思ってるに違いないわ」

シルバーは眉を上げた。顔は無表情のまま、水のように静かである。

「違いますかな、ミリイさん。この小僧とどういう関係があるのかわりませんが、目の前で同じ原型の人間が殺されるとあれば、多少は心の痛みなど感じるはずだ」

ミリイは首を振った。

「あたし、たった今、停滞フィールドから出されたところなのよ。知り合うなんて暇、ある訳ないでしょう？　それに、もしパックを殺したら、ますますあたしは、あんたを信用しなくなる。そうなるに困るのは、あんたじゃないの」

シルバーは大きく溜息をついた。

「やれやれ……まったく、あなたという、お方は大変な娘さんだ。煮ても焼いても食えないとは、ミリイさんのことかもしれないな！」

パックの額に汗が噴き出してくる。

丁々発止の遣り取りに、パックは呆然となっているだけだ。

さつとシルバーは手を上げた。

「ともかく、あなた方は、しばらく当【鉄槌】に留まって頂きましよう。おい！」

さつと手下の数人がパツクの肩を掴み、物でも扱うように乱暴に引き立てる。

「その小僧とロボットは、ガラクタ倉庫にでも、ぶちこんでおけ！ ミリイさん……」

慇懃にミリイに向かい話しかける。

「あなたは、わたしの賓客として招待いたします。わたしとご同行を願えますかな？」

そこで初めて気がついた、というように言い添える。

「よろしかったら、その腰の物、お渡し願えましょうか？」

ちら、とミリイはこつちを見た。が、その視線はパツクではなく、へロへロに向けられている。ミリイは腰のホルスターから光線銃を抜き出し、銃把を先にして、シルバーに渡した。

「へロへロまで、どうして？」

シルバーは、くしゃっ、と顔を笑いに歪めた。

「これから晚餐を始めるつもりなのですよ。久しぶりに旧交を温めたいところなので、無粋なガラクタ・ロボット風情など、出る幕はないということですね！ ま、こちらへどうぞ」

腕を振ってミリイを招く。

ミリイは肩を竦めた。

「まあいいわ。でも、約束して頂戴。あたしが居ない間に【吞竜】には指一本たりとも触れない、と。もしも、あたしが居ない間、押し入るような真似をしたら……」

シルバーは両方の手の平を顔の前で振り、それを否定した。

「そんなことは致しませんと！ 第一、あなたのことだ。船を出る前に防護措置を取っておられるのでしょうか？」

ミリイは薄っすらと笑いを浮かべた。

「そういうこと！ あたしの許しなくエア・ロックを開けたら、直

ちに【呑竜】の自爆装置が働くわ！ これは、脅してはないのよ」
シルバーは頷いた。

「信じましょう。絶対に誰の手にも触れさせません！」

ミリイは歩き出した。

「案内しなさい！」

ミリイの命令にシルバーは先にたち、歩き出す。

それを見送るパックとヘロヘロを、手下の？種族？が手にした武器を振って促した。

「歩け！」

パックは相手を見た。

ぶよぶよとした身体つきで、両手は鰭のような形に変化している。水棲生活に適応した身体つきで、初めて目にする種族だ。ちょっと河馬に似ている。

両目が乾くのか、目尻に水分を補給するチューブが取り付けられ、時々チューブの先端から水がぴゅっ、ぴゅっと噴出して目を洗っている。

その他、雑多な連中がパックとヘロヘロを取り巻いた。

こいつら？雑種？だ！ パックは驚きを禁じえなかった。

遺伝子を変更した？種族？は、もともと人類である。従って、原型の人間とは遺伝子は○・○○○○数パーセントほどしか違ってない。つまり原型と？種族？あるいは？種族？同士の結婚により、中間種が存在しえる。

が、そういう例は絶無に近い。各？種族？は、おのれの出自に誇りを持っており、原型はおろか、他の種族をも内心では馬鹿にしている。理論上は中間種族は存在しえるが、広い銀河でも滅多に見当たらないのが実情だ。

それがこの戦艦内部には、うようよ居るようだ。

いったい、シルバーとは何者なのだろう？

武器を突きつけられ、バックとへろへろは歩き出した。

牢屋

シルバーの命令どおり、パックとヘロヘロは、牢獄に限りなく近いガラクタ倉庫に「ぶちこまれ」た。

二人を連行した河馬のような姿の手下は扉を開けると、ひよいと手を伸ばし、二人を宙吊りにして思い切り放り投げたのである。恐ろしいほどの馬鹿力であった。

がちゃん、と音を立て鋼鉄製の扉が閉められ、ロックが掛けられた。

「いててて……」

ヘロヘロは情けない泣き声を上げた。

パックも放り投げられた時に激しく腰を打ち、一瞬、悶絶した。それでも、悲鳴を上げるのは我慢した。あいつらに一瞬でも満足感を与えたくないという意地である。

倉庫は寒々として、壁際に壊れたベッドやら椅子やら、原型不明のガラクタ類が無造作に積んで置かれ、反対側には簡易便器が剥き出し状態で置かれている。窓などは見当たらない。もっとも戦艦の内部だから当然だが。

天井は高く、床はもちろん、壁も総て剥き出しのスチールだ。触るとひやりと冷たい。

そろり、とパックは扉に近づいた。

ロックを調べると、パックの手に負える機構ではない。もしかすると解除できるかという淡い希望は、あっさり碎けた。

パックのズボンのポケットには、宇宙パイロット必携の修理工具が入れている。手下はパックが原型であるという先入主から、身体検査の必要性など頭には端からなかったに違いない。これを使ってロックを解除しようと考えたのだが、さすがに戦艦の牢獄兼用の倉庫である。それは無理そうだった。

へロへロは倉庫の床を、うろつろと歩き回っていた。

「大丈夫かなあ……ミリイ。シルバーと二人きりにされて……」
「シルバーが何かする、と思うのか？」

パックの問い掛けにへロへロはぶるん、と頭を振った。^{かぶり}

「違うよ、ミリイが妙な気を起こさないか、心配なんだ。ミリイつて、ほら……ちよつと気が短いところがあるだろう？」

パックは短く笑って同意した。

「まあな。停滞フィールドから目が覚めたら、次には早速おれに銃を突きつけるくらいだからな。ちよつと、どころじゃないけど」
諦めてパックは壊れかけのベッドに、ごろん、と寝ころんだ。頭の後ろに手を組み、天井を見上げる。

高い天井には換気口が覗いている。

ここで三流娯楽ホロ・ムービーのスパイ物だったら、主人公は換気口から忍び込んで牢屋を脱出する、なんてのが定番だ。しかし、飛びつくには、とてもじゃないが手が届かない。

それでもパックは無意識だが呟いていた。

「あーあ、あの換気口に手が届けばな……高すぎて無理だけど」

へロへロが振り向く。

「届くよ」

「へっ？」

パックは起き上がった。

シャル・ウィ・ダンス？

ミュージズの楽隊がさつと手にした楽器を構え、室内にモーツァルトの管弦楽が響き渡る。

四本腕のゴロス人の給仕が、優雅な仕草でワインをシルバーとミリーの食卓に用意し、グラスに静かに注ぎ入れた。

ロココ様式の部屋に、天井からはシャンデリア。壁にはおそらく複製であろう泰西名画が幾枚も飾られている。

さらに念入りなことに、窓には立体映像でどこかの宮殿の庭園の昼間の映像が映し出され、ここがシルバーの戦艦内部である現実を忘れさせる。

演奏する楽隊も、ゴロス人の給仕も、服装は共に十七世紀フランスの古風なもので、シルバー自身も、その時代の貴族の服装に着替えていた。

音楽が始まると、そろそろと貴族の衣装を身に纏った男女が現れ、優雅な仕草で踊り始めた。

ここで違和感を主張している人間は、ミリーだけである。

ワイン・グラスを目の高さに上げ、シルバーは思い切り香りを吸い込み、一口含むとゴロス人の給仕に頷いて見せた。給仕は頷き返し、ワインの瓶を置いて引き下がる。

ミリーは用心深く手をつけようとしない。その様子を見てシルバーは笑顔を見せた。

「何も余計なものは入れてはおりませんぞ！ 第一、高貴なワインにそのような薬を入れるなど、わたくしが許しません！」

肩を竦め、ミリーは手にしたグラスをぐつと一息に飲み干した。

シルバーに向けてグラスを突き出す。

「もう一杯！」

「お見事！」

シルバーは感嘆した声をあげ、ミリイのグラスになみなみと注ぎ入れた。今度はミリイは味わって呑み始める。

踊っている男女に目をやる。

「全員が原型なのね。？種族？のカップルは、一組もないわ」
シルバーは大きく頷いた。

「さよう、この【鉄槌】において、原型はわたくしの賓客となっております。彼らは、わたくしの希望なのですよ」

シルバーの言葉に、ミリイは目を細めた。

「相変わらず、諦めないつもりね。あれが不可能だってこと、どうしたら、あんたが悟るのかしら？」

シルバーは苦笑った。

「不可能であることは、まだ証明されておりません。不可能の証明がなされない限り、わたくしは断固、諦めませんよ。そのためにはミリイさん、あなたの協力が是非とも必要なのです。判ってくれませんか？」

ミリイは首を振った。

「お祖父ちゃんは、そんな目的のために、あたしにあれを残してくれた訳じゃない。ここにいる原型の人たち……それに、全銀河系に存在する総ての原型の人たちに残したのよ。あなただけの物ではないわ」

シルバーは失望したようだったが、顔には出さなかった。

ミリイは窓を見て笑った。

「晩餐にしては時刻が間違っていない？ 窓の外は昼間よ」

「おお！」とシルバーは弾かれたように顔を挙げ、手を上げてゴロス人の給仕を呼びつけた。耳を近寄せたゴロス人に何か囁く。ゴロス人は頷き、窓の側へ早足で移動した。

窓の側のパネルを開き、内部の機械を顕わにする。機械を調整すると、いきなり窓の景色が早送りされた。

青空に浮かんでいる雲が見る見る飛び去り、太陽が地平線に沈んで夕方の景色になり、更には夜を迎える。星が煌くようになって、ゴロスは機械の操作を停めた。

「あの景色は一日二十四時間をエンドレスにしておりますからな、時刻を飛ばすことはできませんですよ」

シルバーは楽隊に向け、ぱちりを指を鳴らして合図する。

楽隊がそれまで演奏していたメヌエットから、テンポが速いポルカに変えた。踊りを踊っていた男女は曲目に合わせ、手を打ち鳴らし、足で床を踏み鳴らしてリズムを刻む。

浮き浮きとリズムに合わせていたシルバーはミリイに囁いた。

「踊っていただけませんか《シャル・ウィ・ダンス》？」

「いやよ！ 誰が、あんななんと！」

ミリイは言下に拒否した。

落胆もせず、シルバーは立ち上がった。

「そうですか……それでは！」

ずい、と踊りの輪の真ん中に飛び出し、独りで踊り出す。まわりのカップルたちは歓迎し、輪になってシルバーを取り囲み、両手を打って拍子をとった。女性たちは次々とシルバーに近寄り、手を繋いでくるくと回転するダンスを踊る。シルバーは楽しそうであった。

ミリイは面白くなさそうに、ぐいぐいとワインを開けていく。
「ひくっ！」としゃっくりがこぼれた。

超？種族？

「ま、まだ手が届かないのかい、パック！」

「も、もう一寸だ！ あと三センチ……頑張れ！」

パックは歯を食い縛り、必死に手を伸ばしていた。その足下にヘロヘロがいる。

ヘロヘロの両足は、長く伸びていた。関節が広がり、元の何倍もの長さに伸びていたのである。

つまり、ヘロヘロがパックのために脚立になっているのだ。パックはヘロヘロの顔を踏んづけ、天井近くの換気口に手を伸ばしている。

指先が換気口を覆う金具の留め金に触れた。

素早く工具をあてがい、留め金を外す。覆いの金具は内側に倒れこんだ。換気口に指を掛け、どうにか身体を引っ張り上げ、潜り込んだ。

ヘロヘロは伸ばした片手を掛け、それまで伸びていた関節を元に戻して、パックの後に続いた。

「覆いを元に戻してくれ！」

パックの命令でヘロヘロはくりりと身体を回転させ、覆いを内側から元の位置に戻した。これで、露見しても少しは時間が稼げるかもしれない。

ごそごそとパックは四つん這いになって、先を急ぐ。ヘロヘロは逆に足を半分の短さに縮め、ちょこちょこ普通に歩いていく。

先に進みながら、パックはへろへろに尋ねた。

「いったい、あのミリイとシルバーって、どんな関係なんだ？ 古い知り合いみたいだけど……それに、いやにミリイに対して謙って、まるでお姫様扱いしてたな」

「……」

へろへろが無言なのでパックは声を厳しいものにさせた。

「おい！ こうなったら喋ったっていいだろう？ おれも巻き込まれているんだぞ」

へろへろは、ようやく口を開いた。

「そうだね……しかたないね。実は古い知り合いってのは当たってる。ミリイのお祖父ちゃん……」

「それぞれ！ ミリイがそんなこと言っていたな」とパックは合いの手を入れた。

「そのミリイのお祖父ちゃんは昔、すごく有名な科学者だったんだ。フrint教授という……」

話の腰を折られてもへろへろは平然と先を続ける。パックは首を捻った。

「フrint教授？ どっかで聞いた覚えあるな……。あっ！ 有名な探検家じゃないか。銀河系で、人類が住める環境の星を次々に発見した……」

「そのフrint教授の下で働いていたロボットが、シルバーなんだ。シルバーはミリイに対し、服従回路をプログラムされてたから、今だってそういう態度をとるんだ。もっとも服従回路はシルバー自身で消去したんだろうけど、昔の習慣は変えられないんだ」

「ロボット！ あのシルバーが……！ てっきり、おれは？ 種族？ だと思ってた」

パックは大きな驚きに溜息をついた。

「うん。最初は、あんな姿じゃなかった。普通の、いかにもロボットらしいロボットだった。ああいう変更を施したのは、フrint教授なんだ。フrint教授はいろんな研究をしていたけど、超？種族？を作り出す研究もしてたんだ」

「超？種族？？　なんだ、そりゃ？」

「？種族？というのは、もともと人間に住めない環境の星に適應するため、遺伝子エッチング・マシンで遺伝子を改造した人間の子孫のことだよな。いろんな環境に適應した？種族？が生まれたけど、フrint教授はどんな環境にも適應できる超？種族？が必要だと考えて、実験的にそういった身体を設計したんだ。シルバーはその身体に記憶を移植され、生まれ変わった。脳はイリジウムのスポンジ、皮膚はプラチナの重合体、人間と同じ食物を摂取でき、感覚も有るもつとも、あの金属製の体を維持するため、大量の重金属を食べる必要があるけど」

「百年も前の話だろう。もし、そんな超？種族？がいたら、今ごろ、うようよシルバーみたいな銀鍍金重金属豚野郎が、銀河のあちこちに進出しているんじゃないのか？」

パックはへろへろの超？種族？という言い方に本能的に反発を感じていた。今だって？種族？は原型を馬鹿にし、差別して蔑んでいるのに、それよりさらに進んだ超？種族？なんてのが生まれたら、この銀河系は原型にとって、もつと住み難くなる。

へろへろは頭を振った。

「そこら辺の事情は、判らない。教授は途中で研究を中止したみた

いだ。何があつたか知らないけど、シルバーは教授のもとを飛び出し、宇宙海賊になった」

「それで、ミリィをシルバーが追っかけている訳は？」

へ口へ口は首をかしげた。

「さあ……シルバーの欲しがっているものが【呑竜】に隠されているって話だけど、僕は教えてもらっていないんだ」

パツクは進むのを停めた。

換気口からの明かりは、とつくに届かず、真っ暗だったが、へ口のホイップ・アンテナの先に灯る明かりでほの明るい。

先が二股に分かれている。どっちへ向かうか。

いや、それより、どこへ向かえば良いのか？

「パツク、これからどうする？」

へ口へ口の言葉にパツクは座り込み、腕を組んだ。

計画

「ねえ、どっちへ行くんだい？ パック」

へロへロに促され、パックは弱りきった。

ガラクタ倉庫を脱出したときは、それから先の予定など、まるで頭に存在しなかった。ただ、閉じ込められるのが厭で、脱出したのだ。

さて、いざ自由になってみると、さっぱり先の計画は考えてなかった間抜けさに、我ながら気付いた。

「うるさいなあ……今、考えているところなんだ……」

「パック。ちゃんと先の行動を頭に入れていなかったのかい？」

いかにも呆れた、というようにへロへロは呟いた。

「ちえっ！」とパックは舌打ちした。ロボットに呆れられたら、世話はない。

へロへロは分別臭く忠告した。

「一つ。この戦艦【鉄槌】から逃げ出すには【呑竜】に乗り込むしか手がない。しかし【呑竜】にはミリイが防護装置を施している。その防護装置を解除できるのはミリイだけである。二つ。従って、まず最初にするとは、ミリイを見つけて【呑竜】に戻ることである！ どうだい、この計画？」

得々と説明するへロへロに、パックは苦りきった。

「はいはい！ お前の計画、その通りで御座いますよーだ！ ちえ

っ！ そんなこと、おれだって考え付いたはずだよ」

「はて、どうだかね」

へロへロは、にやにや笑った。

かっとなったパックは、へロへロに向かって、ぐい、と顔を突き出した。

「だったら、どうやってミリイを見つけるんだよ？」

「うふっ！」へロへロは得意そうな表情を浮かべる。「何も知らないんだね」と言いたそうに、上目遣いになった。

「ミリイの居場所は、ちゃん、と判ってるんだ。僕はミリイの発信するビーコンを受信できるからね。ミリイには生きている限り、僕だけが受信できる周波数の発信装置を持っているからな」

「それを先に言えよ！」

パックは叫んだ。へロへロは慌ててパックの口を塞ぐ。

「パック！ 声が高いよ！」

「うぐっ！」とパックは声を呑みこんだ。小声で囁く。

「それで……今も居場所は判っているのか？」

へロへロも小声で返した。

「もちろんさ！ こっちの方角が、強く感じる」

ちょこちょことへロへロはパックの側をすり抜け、二股になった換気ダクトの内部を歩いていく。パックはへロへロの後に続いて、ごそごそと四つん這いを続けた。

ワイン

「なによお！ あたしが酔っているだなんて、誰ーれが言ってるのよ……。あ、あたしは酔ってしまえんから、ほ、本当に……」

ぐだぐだとミリイは酔眼を据えて、介抱するゴロス人の腕を振り払った。

すでにミリイは、ワインの瓶を十本近くも空にしていた。食卓にはごろりと横になった瓶や、食べ散らかした食べ物が散乱し、惨状を顕わにしている。

ゴロス人は無表情にミリイの腕を、がっちり掴んだ四本の腕を使って離さない。

「判っております。ただ、すこーし、お眠むで御座いますようで……。さ、こちらへ案内いたしますから、お休みになられたら如何で御座いましょう？」

ミュージズ人たちの楽隊は、ミリイの眠気を誘うようなゆったりとしたリズムの曲を演奏している。その曲に、ミリイはゆらゆらと上体を揺らしている。

遂に、ごとり、とミリイの額がテーブルに転がり、がっくり全身から力が抜ける。

「ごおーっ、ごおーっ」と盛大に鼾が響いた。

「眠ったか？」

シルバーが近寄って囁いた。ゴロス人は頷いた。

「よし、例の場所へ運んでおけ。あとは、静かに寝かせておくんだ。誰も邪魔するんじゃないぞ！」

ゴロス人は頭を振った。

「しかしまあ、よくも呑んだものですな。上等のワインを、まるで水でも飲むように」

シルバーは笑った。

「この娘、酒には目がないんだ。おれは良く知っている」

ゴロス人は肩を竦める。

「それで次々とワインを勧めていたんですな？ 酔いつぶれるように」

「まあな。これからの作業を邪魔されたくない。この娘、見かけによらず頭は回るから、こうしていてくれれば安心だ」

よいしょっ、とゴロス人はミリイの身体を担ぎ上げた。ミリイはまるで骨がないようにぐたりとゴロス人の肩に担がれる。ミリイが運ばれていくと、シルバーは顔つきを精悍なものに変え、足早に去っていく。

ミュージズ人はそんな遣り取りをまるで知らないように単調な曲を演奏し続けていた。その曲に合わせ、原型のカップルたちは優雅な踊りを続けている。

超空間

シルバーが向かったのは【鉄槌】の艦橋だった。

艦橋は、それ自体、余裕で小型戦艦を納めることができるくらい広い。何層にも重なった操作卓には、様々な？種族？あるいは？種族？同士の雑種が各々の仕事を続けている。宇宙海賊らしからぬ整然とした仕事振りだ。

艦橋の中心の空間には、巨大な球体が浮かんでいる。立体三次元レーダーである。

艦長席に座ったシルバーに、飛び出るような巨大な両目をした？種族？が振り向き、報告した。

「艦長！ 首都惑星から警察の宇宙艇が数隻、こっちへ向かってきます！ 全速力です！」

シルバーは、にやりと笑って頷いた。

「よしよし、今頃やって来たって遅い！ 超空間ジェネレーター用意！ 無反動スラスター始動！ 亜光速に移る」

シルバーの命令に原型の乗組員が超空間ジェネレーターの前に座った。

超空間ジェネレーターを始動できるのは遺伝子が小数点以下十一桁以上一致する原型の人間だけである。

理由は全然わからない。

ともかく、恒星間を飛び越える超空間ジャンプに必要な超空間ジェネレーターを始動できるのは原型の人間と決まっている。このため？種族？によって蔑まれ、軽蔑されている原型であるが、超空間ジェネレーターの始動係として、あらゆる宇宙船に搭乗している。

その結果、原型の人間は銀河系のありとあらゆる星系に見られることになった。

超空間ジェネレーターが原型の人間にしか操作できない理由については、謎だった。

ジェネレーターのプログラムに原型の人間であることを識別する何かが含まれているのではないか、という疑いに、コンピューター・プログラムを得意とする？種族？によって徹底的に逆コンパイルされたが、そういったプログラム・コードは遂に発見できずに至っている。ジェネレーターの機構そのものにも、操作する人間の遺伝子を走査するメカニズムは存在せず、結局は宇宙の構造そのものが原型の人間による操作でしか超空間ジェネレーターを始動させられない何かがある、としか結論するしかなかった。

無反動スラスタが戦艦【鉄槌】を亜光速に加速させる。

光行差現象により船窓前方の宇宙空間に星が集まり、青方偏移で進行方向のスペクトルがX線領域までズレこんでいく。逆に後方の星は滲んで、赤方偏移を起こし、暗く固まった熾火のような光になった。

「光速度の九十九パーセントに達しました！」

部下の報告にシルバーは叫び返した。

「超空間ジェネレーター始動！」

原型の乗組員が超空間ジェネレーターのスイッチを入れた！

通路

不意に湧き上がった体内の衝撃に、パックは歩みを止め、首を傾げた。

「なんだ、ありや……？」

「超空間ジェネレーターが始動したんだ。今、この戦艦は超空間にいるんだよ！」

「あれが、そうか？」

二人はとつくと換気ダクトから抜け出して【鉄槌】の通路を歩いている。人気はほとんどなかったが、時折ちらほら通路の先に乗組員らしき影が見えると、二人は急いで陰に隠れたり、曲がり角に飛び込んだりしたので、たちまちパックは方向感覚をなくしていた。

通路は小惑星の内部を切りぬいたもので、多分レーザーで大急ぎに掘ったらしく、ところどころ不整合な場所があった。剥き出しの岩壁に配線や、動力を伝えるパイプがうねうねと続き、とてもじゃないが戦艦内部とは思えない雑然さだ。天井からは点々と配線から繋がれた照明が垂れ下がり、壁には案内図が掲げられている。

実を言うと、パックは超空間ジャンプの経験はゼロ。首都洛陽シティで今までずっと過ごしてきて、宇宙に出たのもこれが初めてだ。

また何か言われるのではないかと、パックはへろへろの目を見ずに歩き出した。

それにしても広い！

通路はどこまでも続いているようで、徐々にパックは自分が出口のない迷路をさ迷っているという不安に襲われてくる。

「どこにいるんだよ、ミリイは？」

「この近くだと思っただけど……」

ヘロヘロの返事は頼りない。

歩いていくと行き止まりで、先にはドアが一つ、ぽつんとある。

寒々とした小さな明かりがドアを照らしている。

「ここは、どの辺だろうな？」

パックが問いかけると、ヘロヘロはちよつと考え込んで答えた。

「今まで歩いてきた距離から考えると、戦艦の中心部近くだと思う」

「ふうん」と頷くと、パックはドアのノブに手を掛けた。

何の気なしにドアを引き開けたパックは、驚きに立ちすくんだ。

「わあっ！」と思わず叫んでいた。

森

フラッシュのような眩しい光の爆発に、パックはぎゅっと目を閉じていた。

恐る恐る薄目を開け、強烈な光に目を慣らしていく。

ぴちゅぴちゅぴちゅ……と、小鳥の声が聞こえてくる。一面の緑、ここは森の中だ。

宇宙船の中に、森？

全長五十キロにもなろうかという巨大な小惑星である。その小惑星に艦橋や、超空間ジェネレーター、無反動スラスターを備え付けた戦艦であるから、森の一つくらい内部を割りぬいた中に存在してもおかしくはない。

それにしても、予想もしなかった光景にパックは驚いた。

空は、きらきらとした光に覆われている。壁面が発光しているのだろう。太陽は見えないが、昼間の光を再現していることは直感で分かる。

隣でへろへろが、ぽかんと口を開けていた。

「凄いや……」

パックの耳は微かな水音を捉えていた。水音に誘われて歩いていくと、森の中に小川が流れているのが判る。

覗き込むと、日差しに銀鱗がきらりと光り、小魚がつんつんと小石についた苔を突っついていている情景が見えた。

パックはずっと首都洛陽シティで育ってきた。だから、こんな自然を目の当たりするのは初めてである。

振り仰ぐと、押し掛かるような大木が聳え、枝を四方に伸ばして

空からの光りを一杯に受けている。緑の葉むらの裏側がエメラルド・グリーンに光っている。

さっと枝から枝へ目にも止まらぬ速さで小動物が走っていく。

栗鼠だ……。

子供のころにホロ図鑑でしか見た記憶のない動物である。動きがあまりに素早く、はつきりとは見定めることはできないが、確かに栗鼠だ。

歩いていくと、唐突に前方の視界が開ける。森を抜けたのである。

日差しに揺れる金色の穂、麦畑だ！

なだらかな草原と、糸杉の小道。典型的な田舎の風景である。遠景に山脈が迫り、ここが小惑星の内部であることを忘れさせる。パックの目は丘の上に建つ、小さな家を認めていた。赤い屋根瓦、白い壁。切妻屋根には、風見鶏が付いていた。

と、へろへろがととと……と、足を速めた。

「どうしたへろへろ！」

「ミリイだ！ 近くにいる！」

へろへろは叫び返した。

分析

艦橋に分析班が集まり、モニターに格納庫に停泊している【呑竜】を映し出している。背後にシルバーが傲然と控え、鋭い目で分先班の作業を見守っていた。

「ニュートリノ・スキャン開始！」

分析班の主任は、ほっそりとした指先をしたタリア人である。もとと外科医に向いた身体つきをしているが、こういった科学的な分析にも優れた能力を発揮する。

タリア人の指先が素早くキー・ボードを走り、分析装置が作動した。

一瞬にして、作業は終了した。

「終わったのか？」

シルバーは不審そうな声を上げた。あまりにあっけなさすぎた。タリア人は自信満々に頷いた。

「これで【呑竜】の内部構造は総て、こちらのメモリーに納められております。ご覧になりますか？」

シルバーが頷くと、タリア人の指がまた素早く動く。

モニターにコンピュータ・グラフィックスで再現された【呑竜】が映し出される。宙に浮いたように見えるほかは、本物の【呑竜】と瓜二つだ。

「まず外板を外します」

タリア人が宣言すると、【呑竜】の外板が消え去った。骨組みと、内部のメカニズムが剥き出しになる。

スキャンされた結果、分析班は自由自在に画面の【呑竜】を分解、解析できるようになったのである。モニターの【呑竜】は螺子一本にいたるまで本物と同じである。従って、実際に分解する必要はないのだ。

「エア・ロックを」

シルバーの命令に従って【呑竜】のエア・ロック機構が大写しになる。シルバーは眉を顰めた。

「あの娘の言うとおり、防護機能は認められるか？」

タリア人は自信なさげに首を振った。

「判りません。もし防護機構があるとしても、それがどのようなものか、あらかじめ予想できませんから。この画面にあるものの、どれが防護装置かの判断は……」

もう一人のタリア人が、ほっそりとした指先を画面に向けた。

「あれは爆発物ではないのかな？ エア・ロックの外枠を取り巻くようにあるやつだ」

「指向性爆薬か！ あれが爆発すれば、エア・ロックに押し入った者はいちころだな！」

タリア人は興奮したように、ぺちやくちやと話し合っている。

シルバーは手を振って、タリア人のお喋りを中止させた。

「防護装置など、どうでもいい！ それよりは【呑竜】に隠されているはずの星図だ！ 必ず【呑竜】の船内に隠されている。それを見つけ出せ！」

タリア人が不審そうに尋ねる。

「しかし、そのようなデータなら、船内のメイン・バンクに納められているのでは？」

シルバーは首を振った。

「違うな。メイン・バンクは容易にアクセスできる構造になっている。ミリイが、そんな危険を冒すわけがない。多分、メモリー・ク

リスタルの形で密かに隠されているはずだ」

分析班がシルバーの言葉で各自のモニターに注意を向けたとき、ひそひそと足音を忍ばせ、四本腕のゴロス人が近づいてきた。

例の給仕の役を演じていたゴロス人である。

ゴロス人はシルバーの側に近づくと、伸び上がるようにして何か耳打ちした。

シルバーは「何っ！」と短く叫び、仰け反るような姿勢になる。ぐつとゴロス人に顔を近づけ、囁いた。

「本当か？」

ゴロス人は大きく頷いた。表情に憂慮が表れている。

「小僧と、あのガラクタ・ロボットが、どのようにしてか抜け出した模様です。まずいことに、例の場所を見つけ出したようで……」

シルバーは拳を固め、親指を噛んだ。

「まずいぞ！ それは超まずい！ 一世紀も掛かって準備していた計画が台無しだ！」

「いかがいいたしますか？」

「すぐ行くっ！ あいつらのせいで、おれの計画を投げ出す訳にはいかんっ！」

どすどすと足音も荒々しく艦橋から出て行こうとするが、不意に振り向き、モニターに嚙りついている分析班に向かって指を振り立て、命令した。

「いいか！ おれが戻るまでに、必ず成果を上げておくんだ！ 判ったな？」

シルバーの勢いに分析を続けていたスタッフは、呆然とした表情になる。

シルバーは後をも見ずに早足で艦橋の出口へと走っていく。その後、遅れじとゴロス人が続いた。

祖父

がんと杭打ちハンマーで頭を殴られるような痛みに、ミリイは呻き声を上げた。

「……つつ……！」

ごろりと寝返りを打った。

「また、呑みすぎたのかい？ まったく、お前は どうして、そんなに酒が好きなんだろうね」

穏やかな声音に、ミリイは「えっ？」と顔を上げる。

聞き覚えの有るその声。朦朧とした視界に、一人の痩身の老人の姿が映ってくる。

老人は窓辺に籐の椅子を出し、顔全体を覆うゴーグルを掛けて何かファイルの調べ物をしているようだ。何やらぶつぶつ呟きながら指先を宙にさ迷わせ、老人だけに見える視界でメモリの世界へ遊んでいる。

ミリイが起き上がると、老人は顔を上げ、ゴーグルを外して微笑んだ。笑い皺に囲まれた、ミリイそっくりの灰緑色の瞳。

「お祖父ちゃん？」

ベッドに起き上がったミリイはぼかんと口を開いた。

がんと頭の奥を蹴飛ばされたような痛みに、ミリイは目を閉じた。

「ベッド・サイドに水を出しておいたから、呑みなさい。二日酔いには冷たい水が一番だ……。それと、酔い覚ましの薬も」

言われて、そちらを見ると、成る程、確かにサイド・テーブルに水差しと錠剤が置かれている。水を口を含み、錠剤を飲み込む。体内のアルコール分解生成物であるアセトアルデヒドがたちまち薬剤の効果で消えていくと頭の痛みもすっきりとする。

なんとか世間の荒波に立ち向かう気力が湧いて出た。

「お祖父ちゃん、どうして……ここは、どこなの？」

老人は奇妙な表情を浮かべた。

「どうした？ 自分の家を忘れたのか？」

ミリイは、辺りを見回した。

天井の太い木の梁、やや黄色みがかった壁、その壁には無数の写真が飾られ、家具は古ぼけているが丁寧にワニスが塗られ、時代がかった艶が出ている。書棚にはきちんと整列した小さな箱が整列していた。箱には色々な字が表示されている。「スペース・パラノイア」「中央突破」「ライト・サイクル」「悪徳警官」。どれもこれも、数百年前のゲーム・ソフトだ。本物の、手でコントローラーを握ってやるコンピューター・ゲームである。祖父のプリント教授はこういったレトロ・ゲームのコレクターであった。

ここはミリイの育った家である。少なくとも、そう見える。

呆然とミリイは立ち上がり、床に降り立つ。

老人は面白そうな表情を浮かべた。

「どうしたね？ まるでここがどこか、判らないようだったぞ」
ミリイは頭を振った。

違う！ ここは自分の家なんかじゃない！
なぜなら自分の家は……。

きつとミリイは老人を睨んだ。

「誰なの、あなた？」

老人はぼかんと口を開いた。

「おいおい、ミリイ……わしの顔を見忘れたのかね？」

ミリイは叫び返した。

「忘れる訳、ないわ！ 確かに、あなたはあたしのお祖父ちゃんそっくりよ。だけど、お祖父ちゃんは……」

不意に込み上げた嗚咽にミリイは口を噤んだ。鋭い胸の痛みが、あの時の悲劇を思い起こさせる。

「お祖父ちゃんは死んだ！ あたしの目の前で……」

「わしが、死んだ？ 馬鹿なことを言うんじゃない。わしはこれ、この通り、ぴんぴんしているではないか」

背後の気配に、ミリイは振り返った。

どっしりとしたデザインの、灰色のプラスチックの肌をしたロボットが立っている。角ばった身体つき、両目はいかにもロボットらしく、ガラス製のレンズの奥が暗い赤色に光っている。

「フrint教授、お呼びですか？」

ロボットの声は硬質で、きしるような響きを持っている。フrint教授と呼びかけられた老人は頷いた。

「ああ、シルバー。そろそろ例の実験を始めようと思う。準備はできているかね？」

ロボットは重々しく頷いた。

「できております。わたくしの記憶移植も、すべて準備は整いました」

老人は立ち上がった。

「よし、それでは、お前のバージョン・アップを始めよう！ 喜べ、シルバー。今日からお前は、人間と同じ感覚を持ち、生きるという意味を知ることになる！」

ロボットは再び頷く。

「楽しみです。わたくしはずっと、自分が人間と同じ感覚を持ちたいと思ってきました」

ミリイはゆっくりと首を振った。

「やめて……」

老人は眉を上げた。

「どうした、ミリイ。顔色が真っ青だぞ」

「やめて、お祖父ちゃん、その実験はやめて！ 恐ろしいことが起こる……」

老人の口許が笑いに広げられた。

「大丈夫だよ、ミリイ。何も起きんよ。さ、行こうかシルバー」

ロボットと連れ立って部屋を出て行こうとする老人を止めようとするが、ミリイは自分の身体が凍り付いていることに気付いた。

一歩も動けない！

ミリイの視線は狂おしく、辺りを彷徨った。

何か違う……この場面は何かが足りない……。

はっ、とミリイは顔を上げた。

へろへろがない！

あの二本足の、黄色い顔をしたロボットがここにはいない！

へろへろはミリイが生まれたときから一緒だった。あの時も、へ

ろへろはミリイの側にいたのに……。

「へろへろ！ どこ？」

ミリイは叫んでいた。

フェイズ2

だん、とその場面を見守っていたシルバーはモニターの画面を拳で叩いていた。

「へロへロだと？ 何で、あんな旧式のロボットが気になるのだ？ 総て完璧に準備したはずだぞ！」

モニター・ルームで映し出されたミリイは、ぽつんと立ちすくみ、今にも倒れそうだ。顔色は真っ青で、両目は大きく見開かれ、普段の倍ほども瞳孔が開かれている。

赤外線レーザーがミリイの肌を走査し、肌からの発汗量、血流量の変化を刻々と記録していた。

「この娘の心理状態は極めて不安定で、混乱しております。脳波分析によると、懐疑心は強烈ですが、過去の記憶のフラッシュ・バックによる自己暗示の状態です。総ての反応は、計算の範囲内！」

モニターの数値を読み取った部下が冷静に報告する。

シルバーは迷っていた。次の手を打つべきか？ パックとへロへロが、せっかくの準備をぶち壊しにする可能性は高まっている。

しかし計画は、すでに走り出していた。途中でやめる訳にもいらない……！

ゴロス人が呟いた。

「あの小僧どもは、如何致します？ すでにミリイの家へ近づいております」

さっとシルバーはモニターを操作している部下に命じた。

「小僧どもの映像を出せ！」

画面が切り替わり、田園地帯を駆けているパックとヘロヘロの姿を映し出す。二人は、ミリイの家へ向かっている。

「どうします？ あの場合には、部下は一人も配置しておりません。今から向かわせるには、少し時間が足りません」

シルバーは「うぬぬぬ！」と呻くと咆哮した。

今こそ決断の時！

「フェイズ2に移行！ 場面転換だ！」

部下はさつとシルバーの命令に従い、キー・ボードの上に両手の指先を構える。

「フェイズ2に移行します！ 失神ガス放出……」

乗組員の指先が目の中のキー・ボードで踊った。

画面のミリイは、ぐらりと傾くと、ぱたり、と倒れこんだ。無色透明無味無臭の失神ガスが、ミリイの意識を失わせる。

と、どこに隠れていたのか、小柄な身長一メートルにも足らない？ 種族？ がそろそろと現れ、意識を喪失したミリイの身体を担ぎ上げ運んでいった。

この種族の生まれ故郷は地上には人間の呼吸できない有毒ガスで満たされていたため、地下生活を余儀なくされ、その結果、身体を小さくさせたのである。そこでは、小柄な者のほうがより有利な生活ができることで、どんどん小さくなるよう、遺伝子を改造していた。

彼らはガスを吸い込まないために、各々呼吸マスクで顔を覆っていた。小柄ではあるが、力は強い。ミリイの身体は軽々と担ぎ上げられていた。

「フェイズ2、準備完了！」

操作している部下が宣言した。シルバーは頷いた。
「よし、侵攻部隊を登場させる！」
命令を下すと、シルバーはその場から立ち去った。

戦場

「ここは、いったい、何のための場所なんだ？　まるで、どこかの農業惑星みたいに見える……」

走りながらパックは、ヘロヘロに尋ねていた。ヘロヘロは顔を振った。

「判らないよ。でも、まるでミリイの生まれ故郷そっくりだ！　あの家も、ミリイの育った家みたいだし……」

二人は赤い切妻屋根の見える丘へ向かっている。丘の周りには一面の麦畑が広がり、二人は、その麦畑を突っ切っていた。

「なんだって……」

パックが何か言いかけたその時、いきなり周りの地面がぐらりと揺れた。

どかあーん！

炸裂音とともに土塊が跳ね上がり、地面から猛然と土埃が巻き上がった。

地面に横倒しになり、パックは空を見上げ「あっ！」と叫び声を上げていた。

いつの間にか空はヴァーミリオン・オレンジの色に燃え上がり、毒々しいほどの夕空をパックに雲霞のごとくといった表現がぴったりにくるほどの大量の戦闘機、爆撃機が空を埋め尽くしている。

再び砲弾が飛来する音がして、今度はあの赤い屋根が吹き飛んだ。屋根の真ん中から黒い煙が立ち昇り、風見鶏の飾りが吹き飛んで宙に舞った。

パックがやってきた森の方向から、地響きが近づいてくる。

振り返ると、巨大な戦車がずしんと地面を踏みしめ、接近してくる。戦車の後方からは、戦闘服に身を包んだ地上部隊が隊伍を組んで従っていた。

「戦争だ！　ここは戦場だぞ！」

パックは今こうして眼前に見えている光景が、信じられなかった。まるで悪夢の一場面だった。

「へロへロ、こりゃ、いったい何だ？」

言いかけて、へロへロを見ると、呆然と立ちすくみ、硬直している。

「おい、へロへロ？」

声を掛けられてもへロへロは動かない。いや、動けないらしい。両目をまん丸に見開き、かたかたと細かく震えている。

「へロへロ！　とにかく、あの家へ急ぐぞ！」

棒立ちになっっているへロへロを抱え上げ、パックは走り出した。何があだか判らないが、ここに立ち止まっただけでは危険だ、という本能的な判断だった。

びいーんつ、と斥力プレート音が近づき、パックの目の前に一台の戦闘用飛行モータービルが立ち塞がった。

モータービルは無蓋タイプで、銃座があり、いかにも破壊力がありそうな大口径の銃が装備されていた。

運転席に座る相手を見てパックは叫んだ。

「あんたは……？」

「お前をあの家へ近づけさせる訳にはいかんな。前はミリィに止められたが、今は違う。今度こそ、死んで貰おう」

にやりと笑って答えたのはシルバーだった。素早く立ち上がり、銃座に取りつくと、銃口を旋回させ、パツクの胸に狙いをつける。

実験室

がらがらと崩れ落ちる家の中でミリイは目覚めた。土埃が舞い、辺りはほとんど見えない。見上げると、天井に亀裂ができて、その隙間から毒々しい夕空が見える。

素早く周囲を見回し、自分がいつの間にか祖父の実験室にいるのに気付く。

様々な機器が雑然と置かれ、部屋の真ん中には、がくりと膝を折った一台のロボットが蹲っていた。

シルバー……。

いや、かつてシルバーと呼ばれた祖父の助手ロボットである。その？人格？は抜き取られ、今は新しいボディに再生している。蹲っているのは、ただの抜け殻に過ぎない。やや俯けられた顔の両目はただのレンズのごとく差し込んでいる夕日を反射しているだけ。微かな呻き声に、ミリイはそちらを見て、悲鳴を押し殺した。

老人が床に横たわり、長々と仰向けに寝そべっている。こめかみから顎にかけ、べつとりと血糊がこびり付き、眼鏡は罅割れていた。ミリイは近づき、膝を下ろした。

「お祖父ちゃん……？」

そっと呼びかける。

ぱちぱちと老人の臉が震え、不意にぱつちりと、両目が見開かれた。

「ミリイ……」

弱々しく呼びかける。

ミリイの両目に涙が溢れる。

違う！ この老人は祖父のフrint教授では絶対、有り得ない！
祖父はミリイの目の前で死んだのだ。今、見ている場面は何かの
間違いだ！

必死に自分に言い聞かせるが、徐々に確信が揺らいでいく。

これは……これは……夢？

「お祖父ちゃん、死んじゃ厭！」

思わず叫んでいた。あの日の通りに。

老人の手が差しのべられ、ミリイの右肩をがしつ、と意外な強さ
で握った。

「ミリイ……失敗だった……。わしは大きな間違いを犯した……！
シルバーはわしの失敗作だ！ あやつに人間の感覚を与えたのが
間違いだった。あいつめ、人間の感覚を憶えると、ロボットには有
り得ない野望を抱くようになった。なんという計算間違い……」

老人の目が実験室を彷徨う。

蹲っているロボットに止まり、震える指先で指し示す。

「あいつ……あの日、新たな実験体で目覚めると、ここを飛び出し、
あるうことか、軍隊に飛び込みおった。たちまち軍隊で実権を握り、
政治まで動かし、戦争を始めおった……。次は、何をしでかすか……」

ぐつとミリイを睨む。

「ミリイ！ わしの研究……、あれを守れ！ あれは、わしら原型
……いや、もしかしたら宇宙全体の運命を握ることになるかもしれ

ない……なんとしても守り通せ！ わかったな？」

ミリイは無言で頷いた。

唐突に老人の口調が変わった。

「ミリイ……あれは……どこに隠した？ え、どこに隠したのじゃ？
【呑竜】か？ あの船に隠したのじゃな？」

ミリイの全身に戦慄が走る。

言葉

「ミリイの反応に変化！ 現状認識力が急激に低下！ 今です！」
部下からの無線報告がシルバーの体内に仕掛けられている受信装置に入った。

報告にシルバーは動きを止めた。

その瞬間、シルバーは自分のコントロールを再現されたフロント教授の実験室に蹲る、かつての自分のボディにリンクさせた。それは、パックにとっては、なぜかシルバーが金縛りに会い、動けなくなったように見えた。

シルバーの両目は見開かれているが、何も見ていない。

そろそろとパックは狙いをつけられた銃口から離れていく。なぜだかシルバーは固まったまま動けなくなったみたいだ。

チャンスだ！

パックは走り出した。

振り返ると、シルバーは銃座に銃口を構えたまま、ぴくりとも動かない。

「お嬢……さま……」

ぎりぎりと軋るような声に、ミリイはぎょっと、そちらを見る。

と、ごつごつとした身体つきのロボットの顔が上げられ、その両目に暗く赤い光が灯っている。

「シルバー！」

ロボットの両腕が重々しく上げられた。

「お嬢さま……教えて下さい…… フリント教授の研究……？ 伝説の星？の星図は、どこに隠したのか……」

肩に痛み似た感覚を覚え、ミリイは老人に振り返る。老人はひた、とミリイを見上げ、必死の形相で迫っている。

「ミリイ……教えるのだ……！ さあ、どこに星図を隠したのか……わしの研究を、どこに隠したのか……教えてくれ！」

ずりつ、とロボットはミリイに近づいた。思うように動けないのか、ぎこちない。

「教えて……下さい……！ 星図の隠し場所を……！」

「ミリイ！」「お嬢さま……！」

ロボットと老人に同時に迫られ、ミリイは両耳を塞ぎ叫んだ。

「やめて！ やめて！ あたし、何も知らない！」

老人の顔が意外な近さにあった。ミリイそっくりの灰緑色の瞳が近々と迫っている。

「いや、お前は知っている……？ 伝説の星？の場所を指し示す星図の隠し場所を……さあ、言うのだ！」

ミリイは、きいきい声を上げていた。

「で、伝説の星……伝説の星の場所……」

「そうだ、ミリイ。伝説の星の場所だ！」

「星図は……星図を隠したのは……！」

ミリイは、ある言葉を言いかけた。

その時。

「ミリィ！」

はっ、とミリィは声の方向を見た。

「へろへろ！」

二本足のロボットが駆け寄ってくる。その背後には、パックが。

「小僧！」

シルバーは怒号していた。

子守唄

ひどい有様だった。

天井は崩れ落ち、床には壁の破片が散乱している。天井の裂け目からは、斜めに日差しが差し込み、空中に舞い上がった埃に何本もの光の筋を作っている。

そこにミリイがいた！

呆然と、顔色は真っ青で、パックを見る目になんの感情も表してはいない。

「おのれ小僧！ もう少しだったのに……」

灰色の、見るからに前世紀のデザインと思えるロボットが怒号していた。声はぎしぎしと耳障りで聞きなれないものだったが、パックはその声音にシルバーの口調を感じ取っていた。

ゆらり……とロボットはパックに近づき、両腕を上げて掴みかかろうとする。

が、その動きは緩慢で、パックは軽くステップするだけで避けることができる。まるで両足に膠が貼りつき、うまく動けないようである。

「お前、誰だ？ シルバーみたいな話し方だけど？」

ミリイの目の焦点が急激に合った。意識がはつきりしてきたみたいだ。

「パック！ そいつは、シルバーよ！ あの人間そっくりの身体に

なる前の、お祖父ちゃんの助手をしていた頃の姿！ 多分、本物のシルバーは近くから、このロボットの身体にリンクして操っているんだわ！ だから、うまく動けないの」

ヘロヘロが、ミリイの肩を掴んでいる老人に気付いた。

「ミリイ、そこにいるのはプリント教授……？ 死んだはずなのに……」

ミリイは自分の肩を掴む老人の手を振り払った。

「違うわ！ やっと判った。これはシルバーの計略。あたしを誘い込んで、星図の有りかを喋らせようとしたんだわ。でも、もう騙されない！ あなた……アンドロイドなの？ それとも、人間？」

老人に話しかけた口調はそれでも優しくかった。老人を見る目に悲哀が宿っている。

老人はミリイを見上げ、ぽかんと口を開いている。どう対処していいか、分からないようだ。

「おのれ……おのれえ……！ 糞！ こんな身体にリンクしていは、何もできん！ リンク解除！」

がくり、と灰色のロボットの動きが止まる。両目が暗く、ただのガラスに戻った。

パックは叫んだ。

「ミリイ、逃げようぜ！」

しかしミリイは躊躇っている。視線が膝をついたままの老人に留まって、ぴくりとも動かない。

なぜか老人は、ミリイを見上げ、微かな笑みを浮かべていた。

「どうしたんだい、ミリイ……こころは、お前の家だよ……なにも心配は要らない……」

まるで場違いなセリフだった。

老人は優しいな笑みを浮かべ、両腕を大きく広げる。

「さあ、お前が好きだった子守唄を歌ってあげようね……デイジー、デイジー……どうか答えておくれ……デイジー……デイ……ジー……」

最後の歌詞はゆっくりとなり、老人は口を開けた姿勢のまま固まってしまう。

ミリイは怯えた表情になった。

ゆらり、と老人は横倒しになる。がしゃん！ と機械が壊れるような音がして、老人の首と広げられた両腕が付け根からもぎ取られる。

ころころと老人の首が転がり、首根つこに機械の部品が剥き出しになった。やはり、ロボットだったのだ。

「きゃああああっ！」

ミリイは絶叫していた。

パックは駆け寄り、ミリイの腕を掴み、無理矢理ぐいぐい引っ張って走り出した。

がく、と引っ張られ、ミリイはやっと走り出す。それでも、ちらちらと老人の姿をしたロボットの残骸に目をやっていた。

スクーター

家を飛び出すと、飛行モーターに乗ったシルバーが接近してくるところだった。

シルバーは猛烈に怒っていた。眉間が迫り、眉根に深い縦皺が刻まれている。ミリイを見つけ、何か叫ぶ。

が、あまりの怒りに何を言っているのか聞き取れない。ミリイは、あちこち見回した。

呟く。

「もしもここが、シルバーがあたしを騙すため、何から何まで忠実に再現されているとしたら……」

何かを思いついたのか、さっと身を翻し家の裏手へと駆けて行く。パックとヘロヘロが追いかけると、家の裏手には納屋があった。

ミリイは両開きの扉を思い切り勢いよく引き開けた。

「あつた！」

ミリイは嬉しそうに叫んだ。そこには小型のスクーターがあった。無論、車輪ではなく、斥力プレートで地面の反発力を利用して走行するタイプだ。地上すれすれを飛行し、パックも洛陽シティでは同じようなタイプのものを愛用していた。

ミリイはスクーターに跨ると、叫んだ。

「乗って！」

パックとヘロヘロはミリイの言葉に弾かれたように、後ろへ乗り込む。

「行くわよ！」

叫ぶと、ミリイはいきなりスクーターのアクセルを一杯に引き絞る。

「わあっ！」

パックは予想外にスクーターの加速が強いのに驚いていた。慌ててミリイの腰に手を回し、強くしがみつく。

「ちょっと！ 変な所に手をやらないで！」

ミリイが悲鳴を上げる。

「え？」と、パックは自分の手がミリイの胸まで回っていることに気付いた。

「ご、御免！」

パックの背後に掴まっているへろへろが「へへへへ！」と笑い声を上げた。

「下心が丸見えだよ、パック！」

ミリイは苛々した声を上げる。

「二人とも、ド下手な漫才は他でやって！ 今は逃げる時よ！」

ミリイのスクーターは麦畑を疾走した。麦の穂が薙ぎ倒され、スクーターは遮二無二スピードを上げる。

ぶっーん……と、シルバーの乗り込む戦闘飛行モバイルが追いつく。あちらは斥力プレートが前後左右に四基も爛々と光っている。スクーターの斥力プレートは前後二枚。出力は、あちらのほうが上である。

シルバーは飛行モバイルを幅寄せさせてきた。ぐうん、と戦闘飛行モバイルの巨体が接近してくる。

ぶつかる寸前、ミリイはスクーターを急停止させ、シルバーを躲した。

行き過ぎたシルバーはモバイルを急旋回させ、今度は正面からスクーターの横腹を目がけ、突っ込んでくる。ミリイはスクーターを

急発進させ、ぎりぎりで逃れる。

「あいつ、何をやらかすつもりだ！」

パックは呆れて叫んだ。

へろへろが答える。

「頭に血が昇っているんだ！ このままじゃ、殺されるよ！」

ミリイが振り向き、叫ぶ。

「へろへろ、【呑竜】の場所を教えて！」

「えっ？」

「このスクーターのナビ・システムに、あんたがやってきた通路の道筋を転送させなさい。逆に辿れば【呑竜】の格納庫に行けるわ！」

「わ、判った……」

へろへろは頭のホイップ・アンテナを撓らせ、ミリイのスクーターのナビ・システムに向けた。ミリイの握っているハンドルのモニターに通路の地図が表示される。

ミリイはスクーターを森へ向けた。

森には戦車と、それに付き従う戦闘部隊が進軍を続けていた。

近づくスクーターに向け、戦車の砲塔がぐるりと旋回して狙いをつける。

ずばっ！　ずばっ！

砲口に白煙が立ち上り、次々と砲弾が発射される。

どかああんっ！

スクーターの周りに着弾し、土塊が跳ね上がった。爆風でスクーターは大きく揺さぶられる。

パックは、ちらりと背後を振り返った。

戦闘飛行モータービルの乗り込んだシルバーは、モータービルの自動運転にして立ち上がり、銃座に取り付いた。銃把を握り、決死の形相で引き金を引く。

だだだだだっ！

銃口から銃弾が送り込まれる。大口径の銃弾は、スクーターの周りに弾幕を走らせた。

と、モータービルの正面に向けて、戦車が砲弾を発射させた！

モータービルの前方の地面が爆発する！

がくん、とシルバーのモータービルはつんのめり、地面に逆立ちになって裏返った。

ぼおんつ、と驚くほど大きな音を立て、モータービルは燃え上がる。燃え上がる車体がぐらぐらと揺れ、シルバーが両腕を頭の上に差し上げ、なんと車体を持ち上げていた。

ぎらぎらとした怒りの視線でシルバーは遠ざかるスクーターを見つめている。

ぶんつ、とシルバーはモータービルの投げ棄て、歩き出した。銀色のボディには、傷一つさえも見当たらない。

パックは呆れた。

「あいつ、不死身だ！」

「でも、何でシルバーがやられるんだ？ この軍隊は、シルバーの軍隊なんだろう？」

ミリイが叫び返した。

「多分、自動で動いているのよっ！ シルバーが銃撃したんで、自分たちを攻撃したと判断したんだわ！」

パックは行軍している歩兵部隊を見た。

ごつごつした戦闘服を身に纏い、背中に大きなバック・パックを担いでいる。その顔は人間のパロディのようで、マネキンのように無表情だ。

あきらかにロボットだ。それも、かなり簡略化されたタイプで、自分で判断する能力は与えられていそうにもない。

ロボット歩兵たちはスクーターが側を通り過ぎても無関心だった。戦車もまた、時折は砲弾を送り込むが、パックたちを特に狙っていないという様子はなかった。

そうか、これは戦争というお芝居を続けているだけなんだ！ パックは密かに頷く。

スクーターは森の中へと突っ込んで行った。

心配

宇宙戦艦【鉄槌】の通路をミリイのスクーターは疾走している。ハンドルの真ん中のモニターには、ヘロヘロが記憶していた通路が地図となって表示されていた。

通路はスクーターが走り抜けられるくらいの幅はあった。が、通路を行き交う乗組員らしき人々は、スクーターが通りすぎるのを呆気にとられた表情で見送っていた。狭い所では彼らは壁にぴったりと身体をつけ、スクーターを避けたり、あるいは自分から通路の枝道へ飛び込んだりした。

その中をミリイの操縦するスクーターは【呑竜】が停泊している格納庫目指し、まっしぐらに進んでいく。

パックには心配があった。

「ミリイ、格納庫に着いたとして【呑竜】を掴まえた【鉄槌】の牽引ビームは、どう対処するんだ？」

ミリイはヘロヘロに質問する。

「ヘロヘロ、【鉄槌】は今、超空間に入っているの？」

ヘロヘロが「うん」と返事すると、ミリイは笑顔になった。

「だったら大丈夫よ。牽引ビームは超空間では使えないわ。超空間フィールドが乱れるから。牽引ビームの重力波収束ビームは、超空間フィールドと同時に働かせることはできないの」

「へえ……！」

初めて聞く話だ。

ヘロヘロが割り込んだ。

「そろそろ格納庫だよっ！」

「判ってる！」

ミリィはスクーターの速度を上げた。

消火液

艦橋にぼろぼろの着衣の破片を飛び散らかせ、シルバーが怒りの形相物凄く、大股に入ってくる。モービルの爆発でシルバーの着衣には、まだちりちりと煙が上がっている。それに気付いた部下たちが駆け寄り、手に手に消火器を持って白い消火液を噴出させた。

頭からどつぷりと消火液を浴びたシルバーは、白い泡の中から咆哮とともに飛び出してきた。

「あいつらの現在位置を教えろっ！」

額から泡を垂らし、衣服の残骸を耑り取ってシルバーは艦長席に座り込む。

慌てた様子で部下たちはモニターに艦内の通路図を表示させた。簡略化した地図に、ミリイのスクーターの位置が輝点となって表示された。

その表示を見てとったシルバーは、にやりと笑いを浮かべた。

「格納庫に向かっているな……。ふむ、【呑竜】に乗り込もうというのか！ それなら、まだ打つ手はある！」

ぐい、と部下に顔を向け、怒鳴る。

「格納庫を真空にしろっ！ それと、格納庫に繋がるエア・ロックへ部下を向かわせる。真空になっては、あいつらも格納庫へ入れまい。立ち往生している所を掴まえてやる！」

真空適応

「真空になっている！ 格納庫には空気がないっ！」

エア・ロックの表示を見てとり、パックは叫んでいた。

パックの言葉にへロへロは「ええっ！」と悲鳴を上げ、隣のミリイを見上げた。

「ど、どうするミリイ…… 格納庫が真空じゃ、エア・ロックは開けないよ！」

ミリイは素早くエア・ロックを見回した。

通常ならエア・ロックには宇宙服があるが、なぜか、ここには一つもない。

ミリイは何か考えている様子だ。

やがて決心がついたのか、きつと顔を上げへロへロに命じた。

「へロへロ、エア・ロックを開けなさい！」

「えっ？ で、でも向こうは真空だよ。空気がないんだよ！」

「判ってる。でも、どうしても【呑竜】には辿り着かないと……」

ミリイは青ざめていた。パックを見つめ、口を開く。

「パック、あんた宇宙パイロットの資格を持っているってことね？ なら？ 真空適応？ のことは知っているでしょう？」

パックはミリイの？ 真空適応？ という言葉とともに、記憶移植された知識が急速に脳裏に浮かぶのを感じた。必死になって移植された知識を「思い出」した。

引き出されてきた知識に、パックは呆然となった。

ミリイに尋ねる。

「ミリイ、本気であれをやるつもりか？」

ミリイは頷いた。

「あたしは断固やるつもりよ。でも、あんたは、ここにいていいのよ。考えても御覧なさい。シルバーが狙っているのは、あたし。それと【呑竜】。でも、あんたは偶然、巻き込まれたんだし、捕まっても大丈夫。少々手荒なことをされるかもしれないけど、あんたの命までシルバーは奪うつもりはないでしょう」

パックは肩を竦め「へっ！」と笑った。

「そりゃ、そうだけどね、おれ、こうなったら最後まで付き合っよ。なんだか、面白そうじゃないか！」

ミリイとパックの二人は目を合わせた。

「それじゃ、行くわよ！　へロへロ、エア・ロックを開けて！」

ミリイはパックに向け注意した。

「言うまでもないけど、絶対に息を吸い込んじゃ駄目よ」

「判ってる」

パックは頷いた。

へロへロはエア・ロックの開閉スイッチを押した。

エア・ロック

一瞬にして、エア・ロックの空気が格納庫に向けて放出される。そこは真空だった。

格納庫の中央に【呑竜】が停泊している。距離、約百メートル。パックとミリィは歩き出す。

よく誤解されるが、真空に投げ出されても人間は即座に死ぬ訳ではない。そりゃ、いずれは命を失う結果になるが、それは酸素の欠乏によるものであり、それまでには一分くらいの余裕は見込まれる。

真空にさらされた人体は爆発する、などというのは嘘っ八である。人間の身体には骨、筋肉、皮膚が何層にも重なり、人体それ自体が優秀な宇宙服でもあるのだ。

二人は大きく口を開けていた。

この場合、口を閉じ、息を詰めることは、絶対に避けなければならない。もし、そんなことをしたら、肺が内圧で膨らみ、肋骨を骨折してしまう。口を開けているから肺は真空にさらされ、空っぽになっている。

目は閉じている。

時々、瞬間的に瞼を上げ、目指す【呑竜】の位置を確認する。目を開けっぱなしにしていると、真空にさらされ、乾燥する。

じりじりとパックとミリィは【呑竜】に近づいていく。側を歩くへ口へ口は、もともとロボットなので、真空は平気である。

へろへろは先行して【呑竜】のエア・ロックを開け、待ち受ける。二人はエア・ロックに飛び込んだ。へろへろが急いで【呑竜】のエア・ロックを閉め、空気を満たす。

ぜえぜえと、ミリイとパックは喘いでいた。

パックはミリイを見て、笑いを浮かべた。

「やったな！」

「ええ」とミリイは頷いた。ミリイもまた、笑いを浮かべていた。が、すぐ真剣な表情になる。

「脱出よ！」

エア・ロックから操舵室へ向かう。

まさか！

モニターの【呑竜】が床から浮き上がり、格納庫の外へと飛び出していく。

それを見つめ、シルバーは悔しさに唸り声を上げた。

「糞、あいつら、まんまと……。まさか真空中に生身で立ち向かうとは思わなかった……」

操作卓でコンピューター・グラフィックで再現された【呑竜】を分析していた部下に尋ねる。

「どうだ、メモリー・クリスタルの在処は、突き止めたか？」

部下はシルバーを見上げ無言で頭を振った。表情に疑いが表れている。

「これを見てください」

指し示したモニターの【呑竜】は、文字通りばらばらになっている。ありとあらゆる部品が分解され、モニターの画面一杯に散乱している。

「螺子一本にいたるまで分解し、走査したのですが、それらしい部品は見当たりません。本当にあるのでしょうか？」

だん、とシルバーは椅子の肘を叩いた。

「あるはずだ！ ミリイは祖父のプリント教授から？伝説の星？の所在を示す星図を受け取っている！ 必ず、ミリイは【呑竜】に隠している！ もっと探せ！」

シルバーの命令に、部下は渋々とモニターに向かう。

シルバーは、ぎゅっと拳を握りしめた。

「あるに決まっている。絶対、ミリイは星図を隠している……。しかし、どこだ？ 洛陽シティに隠したのか？ だが、自分は停滞フィールドに逃げ込んで在処が不明になる、などという危険を冒すだろうか？ 誰もが探さず、疑いを持たれない場所。そもそも、そんな場所が、あるのか？」

シルバーの両目が大きく見開かれた。

「まさか！ そんなことが！ 星図をあそこに隠したというのか？ さっと航法士に向かい、叫ぶ。

「【呑竜】の位置は？」

「現在、本艦より急速に離脱中。あと数秒で超空間フィールドの外へ出て、通常空間に移ります。こちらでも通常空間に戻りますか？」
シルバーは頷いた。

「超空間から通常空間に戻る。戻ったらすぐに【呑竜】の航跡を探査せよ！ 【呑竜】の超空間フィールドが展開したら、それを即座に観測するんだ！」

シルバーは星図の隠し場所について、確信があった。

その隠し場所とは……。

決意

超空間に【呑竜】は投げ出される。

目をぎゅっと閉じ、網膜に映る斑模様のような奇妙な眺めだ。じっと見つめていると、魂を飛ばされそうな気分になる。

モニターにシルバーの宇宙戦艦【鉄槌】の姿が映し出されている。【鉄槌】は急速に遠ざかり、超空間フィールドから離れるにつれ、通常の宇宙空間の眺めが戻ってくる。【鉄槌】の艦影は、通常空間の眺めが戻るとともに消えていく。

通常空間に転移すると、ミリィは素早く、へろへろに命令する。

「現在位置を教えて！」

へろへろは素早く船の走査装置を働かせた。

宇宙空間で現在位置を知るのは、極めて厄介な作業である。特に今のように、超空間からなんの当てもなく通常空間に転移すると、まさしく行き当たりばったりに戻るので、現在位置を知ることが急務となる。

位置を知るためには、幾つかの標識を使う。

その中で最も一般的に使用されているのが中性子星 すなわちパルサーである。パルサーの位置と電波の周波数は記録され、船の外部アンテナを使って感知する。電波のドップラー偏移により距離と、方向が決定され、船の現在位置が割り出されるのだ。

「現在位置、銀河の平面第七象限、座標は……」
へろへろが割り出された数値を読み上げ、モニターの銀河星図に、

点滅する輝点として表示させた。

それによると、銀河系の辺縁星域あたりに出現したようである。
モニターを見つめたへろへろは、憂い顔になった。

「ミリイ……あんまりエネルギーの残量がないよ。超空間ジャンプはあと一回しか余裕が無い！　どこかの星を探して、燃料を補給したほうがいい」

ミリイは唇を噛みしめた。

「判ってる……」

へろへろの隣で計器を見つめていたパックは叫んだ。

「おい！　シルバーの【鉄槌】が戻ってくるぞ！　超空間フィールドの残像が……」

パックの言葉に、ミリイとへろへろはぎくりとなった。

へろへろはミリイを見つめた。

「ど、どうする、ミリイ？」

「至急、超空間ジャンプをするわ！　へろへろ、残っている燃料で到着できる適当な星を見つけて！」

「わ、判った」

あたふたとへろへろは船の記録を調べ始めた。パックもへろへろと一緒に、記録を参照し始める。

ふと顔を上げると、ミリイが奇妙な表情でパックを見つめている。

「？」

ミリイは、ふと顔を逸らす。そこには重大な決意が……？

追跡

通常空間に出現した宇宙戦艦【鉄槌】は、すぐさま外部走査装置を全開にし、あたりの空間を探った。

「【呑竜】発見！ 一天文単位と離れてはいません！」

部下の報告に、シルバーは頷いた。

火事に見舞われ、頭から消火液を被ったシルバーは、部下に命じて自分の身体をこしこしと磨き砂と鑢で磨かせている。

手持ちのグラインダーがぎゅるぎゅるぎゅると小気味いい音を立て、シルバーの肌にくっついた油や汚れを削り取っていく。

ほどなくシルバーの肌は、ぴかぴかの鏡のような輝きを取り戻した。

すっかりさっぱりした気分になって、シルバーは新しい制服を身に着けた。

「無反動スラスターの航跡は？」

「見てとれます。現在、光速の九十パーセントを超えています。もうすぐ、九十九パーセントに到達！ 今、到達しました！」

別の部下が報告する。

「【呑竜】の超空間フィールドが展開！ ジャンプをするつもりです！」

シルバーは緊張した。

「行き先は推測できるか？」

「はい、近場の星へ向かうようです……方向は……」

すると別の部下が声を上げる。

「違います！ こちらの計器では【呑竜】は再び洛陽へと向かっております！」

「馬鹿な！ こちらでは銀河を飛び越え、マゼラン雲へ向かうと出ているぞ！」

「間違いだ！ 間違いだ！ どっちも間違いだ！ こっちの計器では、ジャンプなんかしないと出ているぞ！」

艦橋の部下たちは口々に違うことを言い合い、たちまち喧騒が巻き起こる。

苛々とシルバーは足踏みをした。

「ええい！ いったいどうなっているんだ！」

シルバーの大声に艦橋はしーんと静まり返る。

「なぜお前ら、違うことを言うのだ！ いったい【呑竜】はどこへ向かっているのだ？」

すると、一人の部下がおずおずと口を開いた。

「あ、あのう……シルバー艦長、お聞きしたいのですが【呑竜】とはなんです？」

ぎくりとシルバーは、その部下を見つめた。

「なんだと？ もう一遍、言って見ろ！」

名指しされた部下は、おどおどと視線をあちこち動かす。

「はあ、いったい皆さんが何を仰っているのか？ 【呑竜】というのは、宇宙船の名前ですか？」

真相に思い当たり、シルバーは呻いた。

「シュレーディングー航法！ ミリイの奴、不確定性原理の海へ逃げ込むつもりだっ！」

シュレーディンガー航法

物理学者のシュレーディンガー（一八八七―一九六二）は、ある思考実験を提唱した。

実験には一匹の猫と、アイソトープ、アルファ線検出器、および検出器に接続された青酸ガス発生装置を用意する。

それらを外部から中の様子が観測されない頑丈な箱に封じ込める。

アイソトープが崩壊してアルファ線を放出すると、検出器が作動、青酸ガスを放出する。当然、中に閉じ込められた猫は死ぬ。

しかし、アルファ線が放出されないと、猫は生き残る。この確率は、五十パーセントとする。

箱に閉じ込めて一時間、放置する。

その間、青酸ガスが放出されると猫は死ぬ。だが、外部からその様子は観測できない。生き残っていても同様である。

内部の結果が判るのは、箱の蓋を開けた瞬間である。

つまり箱の内部に閉じ込められた時点では、猫は生きている状態と、死んでいる状態、どちらの状態でもありえる、という奇妙な現象が起きる。この思考実験は「シュレーディンガーの猫」として知られている。

こんなことが、ありえるのだろうか？

これには二つの解釈が存在する。コペンハーゲン派とエヴェレット解釈である。前者は波動関数の収束という考え方で、後者は多世

界解釈という言葉で表されている。

波動関数収束解釈では、箱の中の猫は蓋が開かれるまでは生きている状態と、死んでいる状態が同時に存在し、箱が開けられて観測者が内部を観測した瞬間、どちらかの状態に収束する、とするものである。

多世界解釈では猫が死んだ世界と、生き残った世界、二つの世界が平行に存在し、箱が開く瞬間、観測者はそのどちらかの世界を選択する、というものである。つまり平行宇宙^{パラレル・ワールド}である。

シュレーディンガー航法は、超空間に突入した宇宙船を多世界に希釈？するのだ。観測者は宇宙船が多数の可能性に分裂したように見えてしまい、宇宙船が向かう行き先を特定できなくなる。

さらに、観測者によつては、その宇宙船の实在そのものが不確定となり、記憶から脱け出る現象が起こる。

シルバーの【鉄槌】には多数の観測者が同時に【呑竜】の超空間ジャンプを観測している。従つて【呑竜】の向かう可能性も、多数の観測者によつて、てんでばらばらの報告が上がってくるのだ。

脱出を目指すミリイは、シュレーディンガー航法によつてシルバーの追跡を躲すつもりなのだ。

しかし、この航法には重大な危険が存在する。

先ほど【鉄槌】の観測者の一人が【呑竜】の記憶が抜け落ちた様子を示した。この部下にとつて【呑竜】は、そもそも存在しない。实在の可能性が？発散？に向かったのだ。

ということは【呑竜】の存在そのものが消滅してしまう可能性も存在する。分母が無限大なら、それは限りなくゼロに近づく。

生理年齢

再び超空間の眺め。

パックは奇妙な感覚に襲われていた。

なんだか、自分が自分でない感じ。どこことなく足下が揺らいでいく不安が押し寄せる。

「お、おれ……どうしたのかな？ 何だか妙だぜ……」

ふと自分の手に目をやる。すると、ふらつと視界が揺らぎ、透明になってしまいそんな感覚が迫り、なんと手の平を通して向こうのコンソールが見えている！

「駄目よ！ しっかり確信を持っていないと、実在が消えてしまうわ！」

ミリイの声に、パックは「はっ」と我に帰る。ミリイはパックの目をまともに見つめ、言い聞かせるように言葉を押し出す。

「よく聞いて！ 今、この【呑竜】は、シュレーディングー航法に入っているの。シルバーの追跡を躲すには、この方法しかないからこの航法は、あたし一人では行えない。あなたが同乗している今こそ、使える航法なの」

ミリイの声がどこか遠くから聞こえてくる感じに、パックは集中力を失いかける。

ミリイは叱咤した。

「しっかりして！ あんたがあたしの実在を確信してくれないと、あたし自身の存在が薄れてしまう。あたしも、あなたの実在を確信

するから、あなたの実在がすっかりしたものになるの？ 判る？」
パックは朦朧とした意識の中、必死になって思考を繋ぎとめようとした。

「そ、それじゃ……どうして、ヘロヘロは？」

「ヘロヘロは、ロボットだから。ロボットの思考は人間と違い、意識ではないの。人間の意識こそが 필요한のよ。さあ、あたしは、あなたの実在を信じている！ でも、それだけじゃ、まだ十分じゃない。あなたの実在を確たるものにするには、あたしがあなたをよく知っていることが必要なのよ。だからお互い、自分のことを話し合う必要があるわ！」

「自分のこと？」

「そう、自分のこと……あたしはミリイ。生理年齢二十二才！ 生まれは第三銀河象限のソリティア星系……」

急に目の前のミリイの顔がくつきりとパックの視界に入ってきた。その様子を見て、ミリイは頷いた。

「そうよ、あなたがあたしのことを知れば知るほど、あたしの実在は確かなものになる。だから、あなたのこと、教えて！ あたしがあなたのことを知れば知るほど、お互いしっかりと存在できるのよ」

パックは、ゆっくりと首を縦に振る。

「おれはパック。生まれは洛陽シティ平民区……生理年齢は……」
パックは、ちよつと躊躇って付け加えた。

「二十三才……」

すかさずミリイが言い返す。

「嘘を言わないで！ あなた、どう見たって、あたしより年下じゃない！ 正直に言ってくれないと、あたしがあなたを確信できない」

なるのよ!」

生理年齢とは文字通り、本人が今まで生きてきた年月のことである。

惑星ごとに自転、公転周期がまちまちで、しかも宇宙船を使用して亜光速になると、相対理論効果で個人ごとに経過年月が違いが出る。

従って、単純に二十才といっても、それがどの惑星上での二十年かどうか、判断できない。そのため自分の年齢を確かめ合うときは生理年齢を宣告するのが普通である。

ことにミリイのように停滞フィールドで一世紀過ごした経験があると、単純に加算してミリイの年齢は百二十二才になるのだ。

そういった齟齬を防ぐための生理年齢であった。

パックはミリイの逆襲に頬が熱くなるのを感じていた。

「判ったよ……。生理年齢十八才。これで満足かい？ ミリイ姐さん!」

ミリイは、にっこりと笑った。

「よくできました! それじゃ超空間を出るまで少し時間があるから、あんたのこと聞かせて。どうして宇宙パイロットになりたい、なんて考えたの?」

「そんなこと、言わなきゃならないのか?」

「そうよ、正直に言ってね」

「判ったよ……」

パックは話し出した。

話しているうち、徐々に自分の存在が確かなものになっていく感覚が満ちてくる。

記憶移植

「もともと超空間ワープを可能にする超空間ジェネレーターは原型の発明だつて知っているかい？」

ミリイは「当然じゃないの」と頷いた。なにしろ超空間ジェネレーターは原型の人間しか操作できないのだ。操作できない物を、原型以外の？ 種族？ が発明する訳がない。

「それなのに、有名な恒星間航路の宇宙船に原型の機長は一人もいない。いや、原型のパイロットさえ、一人もいないんだ！ ？ 種族？ たちは、原型の人間が操縦席に入るのを嫌がる。ジェネレーターを始動させるときは嫌々、招き入れるけどね、おれは、それが我慢できなかった」

パックは記憶移植で宇宙パイロットの資格を取得した時のことを思い出した。

記憶移植の担当官は、気難しい顔つきをしたバリン人の技術者だった。どつしりとした身体つきで、無闇と勿体ぶった老人で、寿命は三百年を越えていそうだった。

バリン人は寿命を延ばすため遺伝子を改造し、外見はマダガスカル・ゾウガメのように分厚い皮膚に、どろりと濁った目をしていた。「お前さん、原型だね？ それなのに、どうしてパイロットの資格を欲しがる？ 宇宙船に乗りたかつたら、宇宙港へ行つて、適当な船に乗り込んで船長に同乗させてくれるように頼めばいいのに」

原型は宇宙航路において、特別な地位を占めている。ジェネレーターを始動させるためには、原型の手がどうしても必要なのだ。

そのため、原型はあらゆる宇宙船においてフリー・パスだった。宇宙へ出かけたくなつたら、原型は空きがありそうな宇宙船に出かけ、同乗を申し込む。

席に空きがあれば、即座に受理される。乗船料金は必要ない。そ

の気になれば、パックは洛陽宇宙港から、銀河系のどこへでも気楽に出かけられる身分であった。

バリン人の忠告に、パックは首を振った。

「おれは、自分の手で宇宙船を操縦したいんだ！ 料金は払っているはずだ。さつさと、おれの頭にパイロットの知識を入れる！」

「お好きなように……」

バリン人の技術者は肩を竦め、パックに記憶移植を施してくれた。

記憶が確かにパックの頭脳に移植されたか簡単な検査があつて、晴れてパックは、パイロットの資格を取得した。その足でパックは、宇宙パイロット募集に応募したのだった。

「ところが……どの宇宙船の船長も、おれが原型だと知ると、断ってきた。宇宙パイロットに原型の人間を雇った前例はない、ってね。パイロットは？ 種族？ のみが担う役目だとさ……！」

その時の悔しさを思い出し、パックは拳を握りしめた。

もつとも、宇宙パイロットになれるのは？ 種族？ のどれでも、というわけではない。たとえば芸術家として高名なミューズ人の宇宙パイロットはいないし、極端に低い重力の環境で暮らしているラップ人のパイロットもない。ラップ人の骨格は、わずかの加速にも耐え切れないほどか細い。ラップ人が宇宙を旅するときは、特別性の低重力環境を再現した船室が用意される。

ミリイのように個人で宇宙船を所有している原型だけが、僅かな例外であった。

パックの話がミューズ人のビーチャに結婚を申し込んだエピソードに移ると、いきなりミリイは爆笑した。

「あんだ、そんなにプロポーズしたの？ それで断られた。当たり前前よお！ もつ、本当に信じられない……」

つくづく呆れた、というようにミリイは首を振り、くつくつと笑いを続けている。

かっとなって、パツクは叫んだ。

「おれのこととは、もういいだろう？　すっかりおれは自分のことを話したんだ。今度は君の番だ。どうしてシルバーは、君を追いかけているんだ？」

ミリイは静かな表情になった。

目を据え、話し出す。

「いいわ、話してあげる。なぜシルバーがあたしを……いや、【呑竜】を追いかけるか」

弾頭

【鉄槌】の格納庫から一隻の宇宙巡洋艦クルーザーがするすると発進した。

宇宙船は鋭く尖った船首を持つ、見るからに性能の高そうな巡洋艦である。巡洋艦には【弾頭ウォー・ヘッド】という艦名がついている。

乗り込んでいるのはシルバーと、もう一人は原型の部下である。部下といっても、あの晩餐会で踊っていた一人で、ジェネレーターを始動させるため必要だからシルバーが乗り込ませているだけである。本来、数百人の要員を必要とする巡洋艦であるが、シルバーは一人で操船するため、ほとんどの部分を自動に任せていた。

原型は十代後半の少女で、シルバーの隣の副操縦席で退屈そうに欠伸を堪えている。

「ねえ、シルバーさん。まだ超空間ジャンプをしないの？ あたしの役目は、ボタンを押すだけでしょ。さっさと終わらせて、船室へ戻りたいわ……」

シルバーは不機嫌に唸った。

「まだだ！ 【呑竜】の航跡を調べ、あいつらがどの星系へジャンプしたか決定してからになる。しばらく黙ってる！」

「はあい……！」

少女は詰まらなそうに生返事をする。

シルバーはコンソールのスイッチを忙しく操作し、【呑竜】のジャンプ先を突き止めようと必死だった。

自分でやるのは久しぶりで勝手が違い、焦っていた。

【鉄槌】の艦橋で部下に命じて【呑竜】の行き先を突き止めることをシルバーは諦めていた。

シュレーディングー航法を続けている【呑竜】のジャンプ先を予測するのは、部下たちには一切できなくなっている。シルバーのように執念に突き動かされていないため、強い確信を持って機器を操作できないからだ。

必要なのは、揺ぎない確信であり、シルバーには、それがあつた。しかし【鉄槌】の艦橋にいるかぎり、部下たちのあやふやな態度にシルバーの確信が影響される。

それで、この【弾頭】に乗り込み、自ら搜索の任に乗り込んだのである。観測者が一人きりなら、シュレーディングー航法の影響を最小限に抑えられる。

重力波検出器が【呑竜】の超空間フィールドの重力場の影響を感じずる。シルバーは手早く計算を終え、算出結果に満足の笑みを浮かべた。

確率分布は【呑竜】が十光年ほど離れた星系にジャンプしたことを示していた。

随分と近い。

おそらく【呑竜】は燃料が残り少なくなっているのだ。それで、燃料を補給するために大慌てでジャンプしたのだろう。

シルバーは少女に命じた。

「ジャンプの用意だ！ 超空間ジェネレーターのスイッチを入れる！」

「合点承知の介でござい！」

妙な返答をして、少女はスイッチを入れた。

シルバーの乗り込んだ【弾頭】は、超空間に消えた。

ミリイの話

「さっきも言ったように、あたしはソリティア星系の第二惑星で、お祖父ちゃんのフrint教授と暮らしていたの」

ミリイが話し出した。パックはミリイが話を続けるうちに、徐々にミリイの存在がくつきりと明確化してきたように感じていた。それと、今まであやふやだった【呑竜】の船内の様子も、確かな実在感とともに蘇ってくる。

パックは真剣に耳を傾けた。

「お祖父ちゃんはそので、あたしと、助手のシルバーというロボツトと一緒に研究を続けていたわ。その研究とは、惑星の地球化なの」
ミリイの言葉にパックの眉がぴくりと持ち上がった。初めて聞く言葉だが、地球^{テラ}とは何だろう……？　しかしパックはミリイの話を耳を傾けるのに夢中で、つい聞きそびれてしまう。しかしミリイはパックの心中を察したかのように問い返す。

「そう、人類の生まれた惑星は地球といって、原型の人間が暮らすには地球そっくりの環境が必要なの。パック、もしかして？　地球？　という言葉聞いた覚え、ないの？」

パックは頷いた。

「初めてだ。地球で……その、人類が生まれたと言ったな？　じゃあ？　種族？　は？」

「それじゃ、なぜ、あたしたちが？　原型？　と呼ばれているの？　原型から遺伝子を遺伝子エッチング・マシンで改造したから？　種族？　が生まれたのよ。あたしたち、原型がいなければ？　種族？　もない

理屈じゃないの」

ぱしん、とパツクは自分の額を平手で打った。そうだ、当たり前のことじゃないか！

「ソリティア第二惑星は、地球にそっくりの惑星だったわ。住民は農業で生計を立てていて、主な輸出品は農産物だったの。高級品で、大部分は首都惑星の洛陽に輸出していたのよ。お祖父ちゃんはもともと洛陽の、帝国科学院に所属していた科学者だったんだけど、引退してソリティア第二惑星で独自の研究生活に入った……。けど……」

ミリイの表情が憂いに沈む。

「お祖父ちゃんは、どんな環境にも適応できる超？種族？の研究も進めていたの。その実験台に、助手のシルバーが選ばれ、その人格を超？種族？のために用意された、新たな身体に移植したとき、怖ろしいことが起きた……」

ミリイの話は回想に入った。その回想を物語風に著述すると、次のようになる。

ロボット

実験室の中央に置かれた台の上に、銀色の身体が横たわっている。がつしりとした巨体は全身が銀色で、まるで彫像のようにも見えた。その隣に、ロボットのシルバーが同じような台に横たわっていた。ミリイは、祖父のフrint教授の実験を見守っていた。ミリイの背後にへろへろが、やや心配そうな表情で控えている。

フrint教授は興奮していた。

忙しく手にした計測器を使ってシルバーの身体を検査すると、上機嫌に頷く。

「さて、シルバー。お前の人工脳にある人格だが、それは走査されて隣の身体に移植される。その瞬間、お前は新たな身体に生まれ変わり、替わりに、元の身体の中の人工脳は消去されてしまう。これは走査ビームによる“やむをえない措置”だが、お前はすでに新たな人体に蘇生しているから、まあ、気にすることはない！　ここまでの話は判ったな？」

横たわったままのシルバーは、重々しく頷いた。皮膚は灰色のプラスチックでできていて、多少の表情を与えられているが、人間のような感情を表すのは得意ではない。

しかし、ロボットのシルバーは期待に興奮しているようだった。

「判っております、フrint教授！　わたしは、いよいよ、人間と同じ感覚を持つことになるんですね。わたしは様々な感覚を与えられておりますが、それは、あくまで人間のイミテーションです。このような機会を与えられ、心から感謝いたします」

「うむうむ」と教授は何度も頷いた。

手の平を擦り合わせると、ひらりひらりと飛び回るように実験室の装置を操作する。

ちよいちよい、とへろへろがミリイの手を引っ張り、注意を喚起する。

「ね、ミリイ。シルバーは人間になるのかい？」

ミリイは首を振った。

正直なところ、判らない。

祖父の話では、今こうして目の前に横たわっている銀色の身体は、人間と同じ感覚を持つ実験体で、これが成功すれば遺伝子エッチング・マシンにデータを転送して、いずれは同じ身体を持つ超？種族？が続々と生まれる予定だという。

この超？種族？は、今まで原型はおろか様々な環境に適応した？種族？でさえも殖民できなかった苛酷な環境の星に殖民できるようになり、銀河系の総ての惑星に知的生命が溢れるようになる。

へろへろは、疑わしそうに呟いた。

「人間の身体って、そんなにいいもんかねえ？」

ミリイは微笑した。

「さあ、あたしは人間だから、今更そんなこと聞かれたって、判らないわ。あんたは、どうなの？」

へろへろは首を振った。

「僕は厭だな……僕はこの身体が気に入っているからね」

そんなことを話し合っているうち、実験が開始された。

見るからに禍々しい形の操作装置がロボットのシルバーの上から押し掛かり、先端が頭部を、かちかちと音を立て走査して行く。

教授はじつと、実験工程を見守っていく。時々、計器にちらりと目をやるほかは、ほとんど身動き一つしない。

息詰まるような時間が経過する。

やがて教授は「ほっ」と息を吐き出した。ミリイもまた、全身が緊張しきっていたことに気付く。

教授は銀色に輝く身体に話しかけた。

「どうじゃ、気分は？」

ぴくぴくと銀色の身体の持ち主が瞬きをした。ぴくり、と腕が持ち上がる。

その腕を、しげしげと眺める。

教授に目をやった。

「わたしは……新しい身体に生まれ変わったのですか？」

教授は大きく頷いた。

「そうだ！ お前の見ている腕は、今まで隣に横たわっていた身体のものだ。見ろ！ 隣に、今までのお前のボディがある！」

銀色に輝く顔が隣のロボットの身体に向き、その目が大きく見開かれた。

「本当だ！ わたしは生まれ変わった！」

激変

教授は大声を上げた。

「シルバー！ さあ、立ってみろ！」

銀色の巨体がおずおずと身動きした。足が上がり、台から降りると、床に降り立つ。

バランスがとれないのか、しばしの間、ふらふらとしていたが、やがてしっかりと力を込め、立ち上がった。

ミリイは息を呑んだ。

銀色の巨人の表情が変化する。それまでの彫像のような無表情から、いきなり驚きの感情を浮かべたのだ。

「わたしは……生きている！ これが、生きているということか！ 知らなかった……」

教授は、ほくほくとした笑顔を見せた。

「うむ！ お前の身体は、ほとんど金属だが、神経組織に関しては、人間のものと同じだ。今まで感じなかった感覚は、どうだね？」

巨人はじろりと教授を見つめた。

ミリイは「はっ」となった。

その目付き！ なにか、とても危険な感じがする……。

教授もまた同じ感情を抱いたようだ。さっと一歩、後じさる。

「どうしたシルバー……。気分が悪いのか？」

「ふっ」とシルバーと呼びかけられた銀色の巨人は笑いを浮かべる。

人格が激変したかのようなうだ。

「気分？　気分は上々だ。これまでにない、いい気分だよ、フリント教授」

どすの利いた、低く轟くような声音。

教授の顔が蒼白になった。

ゆつくりとシルバーは、部屋の出口へと向かう。じろりとミリーの顔を見る。

ミリーはシルバーの目に、冷やりとした鋭い光を認めた。

教授は追いつがった。

「待て！　どこへ行く？」

シルバーは教授を振り返った。

「あんたには、礼を言う。この身体に生まれ変わらせてくれて、おれは今まで知らなかった世界を感じることができた。おれはこれから、もっとこの世界を楽しんでやる！」

シルバーは出口へ向け、悠然と歩き出す。ミリーと教授は呆然とシルバーを見送るだけだった。

シルバーが出て行くと、ミリーは教授に話しかけた。

「お祖父ちゃん、いったいシルバーは、どうしちゃったの？」

「判らん！」

渋面を作り、教授は頭を振った。ごしごしと両手の手の平で顔を擦る。

「あのような態度に出るとは、想像もしなかった！　これから奴は、何をしてくすのか……」

メモリー・クリスタル

砲声が遠くから響き、ぱらぱらと天井から細かな埃が落ちてくる中、ミリイは必死に瀕死のフrint教授を介抱していた。へろへろは家の中を探し回り、ようやく救急セットを見つけてきて、ミリイに手渡した。

救急セットの診断キットをベッドに横になっている教授の腕にあてがう。診断キットは教授の静脈から血液を採取し、血糖値、インシュリン、アドレナリン、血小板などの分析をして、救急セットから応急の点滴セットを呼び出し、教授の静脈にチューブを差し込んだ。

様々な薬液が混合された溶液が体内に送り込まれ、教授の状態を安定させる。診断キットの表示は、即座に病院に搬送し、専門医に診断させるよう忠告をしていた。

しかし今は、病院どころではない。それどころか、教授を移動させることができるかどうか。

シルバーは軍を掌握し、戦争を引き起こしていた。ミリイの住んでいる場所も巻き添えになり、教授の家は直撃を受けたのだった。通信網は寸断され、避難民が続々と移動を開始していた。戦闘により、行政サービスは完全に麻痺していた。

べつとりと血糊がこびり付いた顔を上げ、フrint教授は薄目を開けた。

「お祖父ちゃん！」

「ミリイ……か！」

教授の目の焦点が合い、唐突に意識がはつきりしたようだった。ずしずし……と震動が近づいてくる。戦車が走行しているのだ。時折、ずしんという砲声が響き、どこかで砲弾が落下したのか、

炸裂音が何度も聞こえてくる。

ベッドに寝かされた教授は、きよろきよろと目だけ動かした。

「もうすぐ軍が、ここを通過する……ミリイ、お前はお逃げ。わたしは、もう動けない……」

ミリイは驚いて叫んだ。

「駄目よ！ 何を言ってるの？」

震える手を挙げた教授は、がっしりとミリイの肩を掴んだ。

「ミリイ……？ 伝説の星？ というのを知っているかね？」

ミリイは首を振った。

「知らないわ、それが大事なことなの？」

教授は頷いた。その両目はひた、とミリイに向けられている。

「そうだ！ 伝説の星とは、人類の故郷、地球のことだ！ 地球は人類の故郷だったが、今ではその位置は判らなくなり、伝説の霧の中に消えかかっている……。わたしは、その星の位置を突きとめた！」

ミリイは教授の顔を見つめ囁いた。

「どうしてそんなこと、今になって言うの？ 地球がどうして、そんなに重要ななの？」

「ごくり、と教授は唾を飲み込む。喉仏がひくりと動き、苦痛に一瞬その背中が弓なりに反り返る。」

ミリイは必死になって教授の背中を擦った。

「お祖父ちゃん、痛いのか？」

「はあはあと荒い息をつき、教授は再び話し出す。」

「わたしは間違っていた！ 超？ 種族？ など、研究するのではなかった……。シルバーの奴は、あの身体になって性格が激変した！ あいつは不死身だ！ あの身体と、もとのロボットの知性が結びついた今、どこまでも突き進むだろう……。わたしは、あいつにも秘密にしている研究がある……。それをわたしは地球に隠したのだ……。！」

不意に診断キットが、けたたましい警告音を響かせた。モニターに、教授の命が危険に瀕していることが表示されている。

教授はポケットから一枚のメモリー・クリスタルを取り出した。薄い、指先ほどの透明な板。それが夕日を受け、煌いた。

「これを、お前に渡す！ この中に？ 伝説の星？ 地球の位置が記されている……。地球には、われわれ原型のために、ある秘密を隠した！ それを、お前に託そう」

ミリイは教授からメモリーを受け取った。教授の手の平はべつとりと汗で濡れている。

気がつく、教授の全身は燃えるように熱い

「宇宙港へ行け！ そこに、わたしの宇宙艇【呑竜】を預けてある。それに乗り込み、地球へ向かえ！ いいな、シルバーには気付かれではならぬ！ あれは、われわれ原型のための……」

ごろごろと喉がなり、教授の身体から急速に生命の輝きが消え去っていく。皮膚がチアノーゼにより、どす黒く変色し、教授は目を閉じた。

ぱたり、と教授の手がミリイの肩から落ちて垂れ下がった。

「お祖父ちゃん……」

ぼつりとミリイが呟き、診断キットのモニターに目をやる。総ての表示が教授の生命活動の停止を告げていた。

ドアが開く音に、ミリイは顔を上げた。

消火液

夕日が逆光になって、一人の人物がシルエットとなって立ちはだかっている。

「教授は……死んだのか？」

太く、轟くような声。ミリイは大きく目を見開いた。

「あなたは……シルバー！」

ゆらり、と人影が動き、足が一步を無遠慮に踏み出し、室内に入ってくる。

銀色の顔、軍の制服を身につけ、胸には数々の勲章や階級章が光っている。

シルバーであった。

まるで、その沈鬱な場の様子を気にすることもなく、シルバーは無神経に歩いてくると、横たわる教授の顔を覗きこんだ。

「どうやら、死んでいるらしいな。気の毒なことだ」

だが、まるつきり哀悼の口調ではない。どちらかというと、面白がっているような調子だ。

ミリイは徐々に怒りが高まってくるのを感じていた。

「何しに来たの？ あんたが引き起こした戦争で、お祖父ちゃんは死んだわ！」

「おれが？ 戦争を？」

シルバーは肩を竦めた。

「おれが引き起こした訳ではないよ。ただ、あちこちの政治家を、ちよいと突つついてやっただけの話だ。戦争を決定したのは、奴らだ！ おれは軍の代表として、その命令に従っただけさ」
まるで悪びれることもなく、しゃあしゃあと言つてのける。

シルバーの視線がミリイの手にあるメモリー・クリスタルに止まった。

「そいつは……教授のメモリー・クリスタルだな！」

ミリイは、はっとなつてメモリー・クリスタルを握りしめた。

「あんたに何の関係があるの！」

シルバーは手を伸ばしてきた。その手を躲し、ミリイは立ち上がつて部屋の隅へと逃げた。

「よこせ！ そいつがおれの思っているものなら、それを使うのは、おれの権利でもある！」

「あんたの権利？ あんたに何の権利があるって言うのよ！」

シルバーは、ぐいつと身につけている制服の胸をはだけた。銀色のボディが剥き出しになる。

「おれをこんな身体にしたのは、フrint教授だ！ 教授の研究には、おれを本物の人間にしてくれる秘密が記されているはずだ！」

ミリイはあっけにとられた。

「本物の人間？ 何を言っているの！ あんたは、お祖父ちゃんにその身体にしてもらつて、あれほど喜んでいたじゃないの！」

シルバーは吠えた。

「違う！ おれの今の身体は、教授の研究していた超？ 種族？ のためだ！ あれから、おれは人間たちと暮らし、本物の血と肉とでき

ている人間たちがおれには手が届かない感覚を持っていることに気付いた。おれは……おれは……人間になりたい……！」

ぎらぎらとした目で、シルバーはミリイに詰め寄った。

「フリント教授は話していた。原型こそが、この銀河系で重要な役割を果たすと……。ミリイ、おれは原型の人間になりたい！ 教授の研究に、その答えがあるんだ。おれなら教授の研究を役立たせることができる！ この銀河系で？ 種族？ に馬鹿にされ、蔑みの対象となっている原型たちに、力を貸してやれるんだ！ さあ、お前の手にあるメモリーを、こっちへよこせ！」

そろそろとシルバーの背後からへろへろが近づいてきている。

へろへろは太い電源コードを手にしていた。その先端は千切れ、内部の電線が剥き出しになっている。コードの先には、教授が研究のため利用している装置のための変圧器に繋がっている。

はっ、とシルバーは気配を察知して振り返った。

へろへろは一気に飛び上がり、コードを振り回す。シルバーが片手を上げ、剥き出しの腕に、へろへろの振り翳したコードの先端が触れた！

「ぐわああああっ！」

シルバーの獣のような咆哮が室内に響き渡る。大電圧に身体を貫かれ、がくがくがくと壊れた人形のように、全身が痙攣した！

びしっ！ とコードの先の変圧器がサージ電流に耐え切れず、白煙を吹き出して燃え上がる。

即座に家の中に備え付けられた消火装置が働き、猛然と幾つもの噴出口から真つ白な泡が迸った。たちまちシルバーは白い泡に全身が包まれていく。

へろへろがミリイに駆け寄った。

「ミリイ！ 逃げようっ！」

ミリイは我に帰った。

さつと、へろへろと一緒に家の中から外へ飛び出す！

納屋に駆け込み、中からスクーターを引き出すと、全速力で走り出した。

目指すは【呑竜】が停泊している宇宙港である。

ちらりと振り返ると、シルバーが家から飛び出し、何か喚いていた。

全身から消火液の白い泡が垂れていた。

通常空間

ミリイが話し終え、パックは溜息をつき、頭を振った。

何もかも、驚くしかない。

「それで……フrint教授の秘密の研究って、なんだろう？ 地球という星に、それが隠されているんだろうか？」

パックの問いかけに、ミリイは「判らない」と言いたそうに首を振る。

「原型が重要な役割を果たす……フrint教授は、確かにそう言ったんだね」

顔に血が昇って、頬が火照るのをパックは感じていた。徐々に興奮が全身を包む。

「すげえ！ もしそうなら、おれたち原型は？ 種族？ に馬鹿にされなくなるんだ！ ミリイ！」

思わずパックは両手を伸ばし、ミリイの手を握りしめた。

「その地球へ……伝説の星へ行こう！ そして、教授の秘密の研究を見つけよう！」

ミリイは、目を睜った。

「パック。本気なの？」

パックは大きく頷く。

「本気だとも！ そんなすごい秘密を見つけれたら、おれは……おれは……」

自分の気持ちを的確に表すうまい言い回しを見つけれず、パックはしかたなく両手を振り回した。

拳を握りしめ、宣告するように叫んだ。

「おれは絶対、地球を見つけてやる！」

ミリイは首を振った。

「ちょっと考えさせて……」

パックは驚いた。

「どうしてだい？ 君だって、知りたいんじゃないのか？ 教授の秘密の研究」

「そうだけど……でも、シルバーのことがあるし……それが本当にあたしたち原型のためになるか、判らない。あたしもお祖父ちゃんの研究については、よく知らないの」

ミリイは目を逸らせ、船窓の超空間を見つめる。

パックはガツカリとなった。

「そんな……」

直後、船内に警告音が響いた。船が超空間から通常空間へ転移することを告げている。

船窓の眺めが変化し、宇宙空間になった。

新たな眺めに、パックは目を見開く。

「これは……凄い……！」

感嘆の声を上げる。

それは二重太陽の眺めだった。というより、かつての太陽のなれの果ての姿である。

主星は縮退物質でできた矮星で、その周りに伴星として中性子星が巡っている。矮星の残り少ないガスが中性子星へ流れ、プラズマとなって輝いている。

中性子星へ落ち込むプラズマは亜光速まで加速され、あらゆるスペクトルで輝き、周囲に撒き散らされた星間物質は中性子星から発せられる電磁波で刺激され、発光していた。

その発光した星雲状物質を背景に【呑竜】が目指す場所があった。

それは、宇宙に浮かぶ森であった。

宙森

近づいてくるのはごく普通の宇宙ステーションに見えた。

巨大な円環^{トラス}に、中心のハブから伸びる四本のスポーク。おそらく太陽光を受け、発電するのである。巨大な太陽電池が、ハブから伸びたスポークから翼を広げている。ハブの真ん中からは、さらに円柱が伸び、廃熱システムと思われる真つ黒い板が生えている。

が、それにしても形が変だ。どこことなく、でこぼこしている。まるで粘土細工でできているように見えた。

「妙な形だなあ……」

パックは感想を述べた。

^{スペース・フォレスト}

「宙森よ！ あれは、生きている宇宙ステーションなの」

ミリイが宇宙ステーションを眺めながら口を開いた。パックはちよつと首をかしげた。

「初めて聞く。なんだ、そりゃ？」

「あの太陽電池パネルを見て御覧なさい。普通のと違って、色が緑色でしょ？」

「ああ」とパックは頷く。

太陽電池らしきパネルは、確かに緑色がかっている。何枚ものパネルが僅かに重なり合って、一枚のパネルを構成しているように見えた。

「あの太陽電池パネルは、樹木の葉っぱにあたるものなの。葉緑素の仕組みに手を加えて、光合成による化学エネルギーで電力を作り出す役割を果たすよう、遺伝子を改造しているのよ。あれは全体で、一つの植物なのよ」

「へええ！」とパックは歓声を上げた。

が、疑問がわく。

「どうして植物なんだ？ 宇宙ステーションを植物にして、なんの得がある？」

「そのほうが経済的なんですって……」

ミリイは、あやふやに答える。さすがに、そこまで突っ込まれると、詳しいことは知らないようだ。

「つまり、生きている植物なら、壁が壊れたりしたって自然に塞がるし、空気の浄化も人間の排泄物を使って、機械に頼らないでできるでしょ？」

パックは一応「そういうものか……」と納得する。

へろへろがパックに双眼鏡を手渡した。

「パック、これで見てご覧よ！ ミリイの言ったことが判るから」礼を言っパックはへろへろから双眼鏡を受け取り、接眼レンズを目に押し当てた。

この距離では肉眼だけでは判らなかった細部が、双眼鏡の視野の中で、はっきりと見えてくる。

太陽電池パネルとスポークの接合部は、まるで葉っぱが枝から生えているようになっていて、円環とスポークの繋ぎ目も、なだらかに溶け合った形になっている。

ステーションの外側は僅かに凸凹していて、言われてみれば、確かに植物の肌のように見えた。真ん中のハブ部分は、球根のような形をしている。まるで巨大な蕨である。髭根らしき、ちよぼちよぼとした突起が蕨の表面から、あちこちに伸びていた。

スポークには不思議な形の付属物がある。

植物だという先入主から、パックは豆の莢を連想した。その莢が真ん中からぱっくり二つに割れ、中から豆そっくりの楕円形の形をした宇宙艇が飛び出してくる。

「あれ、豆かと思ったら、宇宙艇だ……」

「間違いなく豆でもあるのよ。あれは宙森の莢で、中で宇宙艇が育っているの。ちょうど熟したので、外へ飛び出したんでしょう」

双眼鏡を覗き込み、パックは呟く。

「こつちへ来るみたいだ……」

もう、双眼鏡無しでも細部まで見分けられる。

やはり全体は豌豆^{えんどう}豆そっくりで、船首部分が透明になって船窓の役をしている。宇宙艇の操舵室らしく、何人かの乗組員と船長が見分けられる。

てつきり乗組員も植物かと思ったら、こちらは毎度おなじみ、昆虫そっくりのボーラン人であった。

船長らしき男が部下に合図して【呑竜】の通信装置が唐突に息づいた。【呑竜】のモニターが明るくなり、育ちすぎたバッタのようなボーラン人の船長が、こちらを見つめている。

パックはボーラン人については、首都の洛陽であまり良い思い出がないので、不愉快な顔を見て「うへっ」と首を竦めた。

「こちら、宙森港湾局。そちらの船籍と船名を告げよ！」

ボーラン人の船長の口が動き、独特の軋るような声が響き、ミリイが答える。

「こちら【呑竜】。船籍は、ソリティア星系。わたしは、ミリイと言います。入港を許可願います。目的は燃料補給です」

ボーラン人の船長の両目が心なしに煌いたように見えた。船長は頷いた。

「了解した。燃料補給ならば、こちらのビーコンに沿って格納甲板

に進んでもらいたい。五番格納庫が空いているから、停泊したら甲板長の指示に従うように。料金は、通常支払い手続きでよろしいな？」

ミリイは頷き、接続は切れた。宙森の宇宙艇は離れていく。

宙森からのビーコンが【呑竜】を案内する。

格納庫は宙森のハブにあった。蕪そつくりのハブに、いくつもの格納甲板が口を開き、そこからは無数の宇宙艇や、貨物運搬船、一人乗りのボートなどが離発着を繰り返している。

宇宙艇の大部分は【呑竜】と同じような普通の宇宙船だったが、さつき見た豆そつくりの宇宙艇も、かなり見かけられた。

格納庫は木目が浮き出た巨大な倉庫のような場所だった。床も、壁も、すべて木材でできている。照明や、様々な機器のための電源が剥き出しの配線（被覆は蔓だ！）で繋がれ、ごたごたとダクトや手すりのついた階段が雑然とした景観を見せていた。

階段やキャット・ウォークは、ほとんど木材でできていた。金属部分はほとんど見えない。木材で製作できる場所は極力それですませるつもりらしい。

【呑竜】が着陸すると、さつそく宙森側の甲板員がやってきた。甲板員は四本腕のゴロス人であった。【呑竜】の換気システムが働き、格納庫の空気が船内に入ってくる。パックはその空気に、樹木の仄かな香りを嗅ぎ取っていた。

連絡がついていたのか、甲板員は燃料チューブの太い蔓を抱えて近づく。

どんどんと船腹を叩いて燃料補給の合図をしたので、ミリイはコンソールのスイッチを入れて、船腹の燃料補給口を開いた。甲板員はぐいっとチューブの先端を補給口にあてがった。

燃料補給の間、手持ちぶたさでパックは格納庫の外を眺めていた。

宙森が公転している、矮星と中性子星の連星系が形作る星間物質の雲が、雄大な景観を見せている。

矮星から千切れた星間物質は中性子星で加速され、再び宇宙空間に投げ出され、中性子星からの電磁波で輝いている。

全体はブルー・セレストの色合いで、縁がコーラル・ピンクに輝き、コバルト・ブルーの背光が全体を覆っていた。見れば見るほど、奇観である。

おや？ とパックは眉を寄せ、目を細めた。

一隻の宇宙船が超空間から出現し、こちらへ近づいてくる。ほっそりとした、性能の高そうな宇宙巡洋艦だ。パックは、その軍艦のデザインに見覚えがあるような気がした。

原型

宇宙空間に浮かぶ宙森をモニターで確認して、シルバーはゆっくりと操縦席からラウンジへ移動した。備え付けのコーヒー・メーカーからカップに一杯、熱いのを注ぎ入れ、ソファに座ってコーヒーを啜る。

かちやりと、カップをテーブルに置く。

味は判らない。このコーヒーは？伝説の星？地球から持ち出されたブルー・マウンテンの原種を栽培して伝えられた貴重なもので、シルバーの知る限りもっとも美味らしいが、一度も旨さを感じた記憶はなかった。

ラウンジには様々な嗜好品が並んでいる。

ワイン、紅茶、スコッチ、葉巻、その他ありとあらゆる伝手を使って集めた珍味の数々。贅沢な生活に慣れたセレブでも、目の玉が飛び出るような値段をつけられた品々でも、味音痴のシルバーにとっては、ただの見栄を張るための代物に過ぎなかった。

糞！これが本物の人間なら、これらの品々を口にして至福の時間を味わえるのだろうが、シルバーにとっては砂を噛むのと同じであった。シルバーの身体は、味覚については鈍感そのものであった。

その他の感覚は鋭敏そのもので、反射神経は原型はおるか、ほんどの？種族？のそれを凌駕する。その気になれば、視覚を調整して遠赤外線から超紫外線領域までカバーするし、顕微鏡にも望遠にも切り替わる。さらに聴覚は十万ヘルツの超音波まで聞き取ることができた。

だが、それは、ロボットの身体でいたころも同じ感覚だった。違

いは、それが本物の感覚かどうか、ということだ。

シルバーはロボットの身体でいたころの感覚を思い出せなかった。ロボットでいたころの記憶は、茫漠とした霧の中にいたようで、あれが自分であったことなど、今では信じられない。

もう一度、シルバーはカップを口許へ持つていった。ゆっくりと啜る。

ラウンジのドアが開き、原型の少女が顔を出した。

その姿を見てシルバーは「ぶっ！」と口に含んだコーヒーを吐き出した。

「なんだ、その格好は！」

「わあ！ びっくりしたあ！ いきなり怒鳴らないでよう……」

ラウンジに入ってきた原型の少女は、髪のに大きな猫耳、身につけた服は、エプロンに、ふわっと膨らんだミニ・スカート、お尻からはぴよぴよこと動く猫の尻尾、といういでたちだった。

少女は、ぴよん、と跳ねるような動きでシルバーの前へ飛び出ると、両手を頬の近くに上げ「にゃんにゃん！」と猫の真似をする。

「どう、可愛いでしょ？ 猫娘のメイドさんよ！」

「はーっ」と溜息をつき、シルバーは頭を抱えた。

原型のほとんどは享樂的で、何も考えていない御氣樂で極樂な性格の持ち主が多い。

なぜこうなるかというと、あらゆる職業から締め出されているからである。人間が集まり、都市を作り生活するうえで様々な職業が生まれる。

それらの職業には？ 種族？ が確乎としたギルドを形作り、原型の人間の参入を拒んでいる。原型は超空間ジェネレーターの起動だけに必要なものであって、その他の仕事には就けない。

その代わり、原型の人間には銀河系で遊民としての位置が与えられている。何もしなくても、最低限の生活は保障されているのだ。そのため、原型の人々は毎日をのんびんだらりと遊んで暮らすか、あるいは酒に溺れるか、またこの少女のように頓珍漢な行動をとって人を驚かせるかである。

たまに　ほとんど例外に近いのだが　フリント教授のように
学究の生活を始める者もいたが、数は少ない。

シルバーは考える。この原型の特色こそが？種族？には存在しない感覚の証拠なのではないか。？種族？のような特殊な能力を持たないがゆえに、かれら原型は他の？種族？と違って、楽しみに貪婪なのだ。

だからこそ、シルバーは原型の人間に生まれ変わりたいのだ。原型の連中の感覚を味わえたら、今の退屈極まる不死身の身体など、誰かにくれてやる！

目の前の少女は小腰を屈め、シルバーの顔を覗きこんだ。

「ねえ、シルバーさん。何そんな難しい顔してるのよう？　あたし、早くあの宇宙ステーションへ行きたいな……。船が一杯、あるから、着いたら早速、船長さんたちに声を掛けて、乗せてくれるかどうか、試してみるつもり」

シルバーは顔を上げた。

「どこへ行くつもりなんだね？」

「洛陽よ！　あたし、一遍、首都に行つて見たいなあ、と思つてたの」

「ふむ。首都行きの船があればいいがね」

原型の人間は、こうして行き当たりばつたりに宇宙を旅していく。

この原型の少女も、シルバーが様々な惑星を襲撃する際、どこかの星系で拾ったはずだが、いったいどの星系から乗り込んできたのか、まるで憶えていない。

それどころか、この娘の名前も知らない。

シルバーは肩を竦めた。

まあいい。この娘とは、ここでお別れだろうが、宙森に到着したら、そこで出会う原型の人間を見つければ良いだけの話だ。

願わくば、そいつが眼前の能転気少女のように突飛な性格でなければいいのだが。

キューブ

パックは【呑竜】のエア・ロックから格納甲板に飛び出し、喚いた。

「なんでだよ！ 何で、燃料を抜き取るんだ？」

四本腕のゴロス人甲板員たちは、なぜか【呑竜】への燃料供給の作業を中止し、それどころか、せっかく補給した燃料を逆に抜き取る作業を始めたのである。

主任らしきゴロス人が、四本腕の肩を同時に竦めて見せた。

「なぜって……代金を払ってもらえないことが判ったからだよ。金を払えなきゃ、燃料は渡せないな」

「えっ？」とパックは絶句した。

背後からミリイとヘロヘロがエア・ロックから姿を見せた。

パックはミリイに駆け寄った。

「料金未納だつて言いやがる！ どういうことだい？」

ミリイは首を振った。ミリイにも判らないらしい。

不審顔になって、ゴロス人たちに近寄り声を掛けた。

「どういうこと？ どうして料金が払えないの？」

「さあなあ……」と主任は首を振る。

と、そこへ近寄ってくるボーラン人を見つけ、声を掛けた。

「甲板長！ この娘の船の燃料代金のこつてすが……」

ボーラン人の甲板長は頷き、早足で近づいた。両足の膝は人間と逆についていて、足先を蹴り出すような独特の動きを見せる。キチン質の爪先が床に当たってカチャカチャと音を立てた。

「君がこの船の責任者かね？」

ミリイに顔を向け、話し出す。

「そうです」

「ふむ、君の船の？キューブ？の情報は、当方にとって禁じられた情報が含まれているのが判ったので、受領拒否された。よって情報料金は支払えず、燃料代金未納という扱いになる。悪く思わんでくれ」

「受領拒否ですってえ！」

ミリイは顔を真っ赤にさせ、叫んだ。

あまりの大声に、ボーラン人の甲板長はびっくりと身を震わせた。

神経質そうにぴくぴくと、額の触覚をひくつかせる。

「大声を出さんでくれないか」

「説明して！　なぜ、あたしの？キューブ？の情報が受け取れないの？」

ミリイは必死に怒りを抑えているようだが、両手はありもしない光線銃を探しているように腰の辺りをまさぐっている。

「？いにしへ言葉？が含まれていたのだよ。つまり、古語だな。君の？キューブ？には、そういった現在では使われることを禁じられている？いにしへ言葉？があった。よって情報は受領拒否された、という訳だ」

総ての恒星間宇宙船には？キューブ？と呼ばれている透明な立方体が装備されている。

この立方体は記憶装置で、ほぼ無限といっていい情報を保存できる。宇宙船が立ち寄る宇宙港には？キューブ？の情報を受け取る受信装置が装備されていて、宇宙船が到着すると？キューブ？の中に含まれている情報を受信し、その内容に対し情報料金が支払われる仕組みだ。

出発のとき、宇宙船には宇宙港から最新の情報が書き込まれ、次に立ち寄る宇宙港まで運ばれる。こういうシステムによって、銀河系のありとあらゆる星系に様々な情報が伝えられていくのだ。

なぜ、このような仕組みが作られたかというと、光の速度を超える超空間ジャンプも、通信は光の速度を超えることができないからである。情報は恒星間宇宙船をもって運ぶのが、最も早いのだ。宇宙船が銀河系を飛び回る限り、あらゆる情報はゆっくりとだが、確実に全銀河系に浸透していく。

情報の受領拒否など、本来は絶対ありえないことだ。あらゆる情報は公平に受信されなければならない！　これが宇宙船を迎える総ての宇宙港施設の不問律でもある。

「詳しく説明なさい！　？いにしへ言葉？とは何なの」

ミリイは憤然となつてボーラン人に詰め寄る。

ボーラン人は躊躇っているように、全身を細かく震わせている。ミリイのように、猛然と噛み付く相手には、うまく対処できない性格なのだ。

「判った、説明しよう。しかし、ここでは拙い。【大校母】グレート・マザー様に会わせる！」

パックとミリイは顔を見合わせた。またしても、判らない言葉が出てきた。

「【大校母】？　何、それ」

ボーラン人は何かを仰ぎ見るように天を仰ぎ、両手を持ち上げた。「われらの母上！　この宙森の総てを統括なさる、偉大なる母だ！」

パックはその場にいたゴロス人を見た。ゴロス人はボーラン人が口にした【大校母】という言葉に、敏感に反応している。

さつとゴロス人の顔色が変わり、恐怖に似た感情があらわになる。

「いったい、どんな相手なんだ？」

入港手続き

「変ね……」

操縦室の副操縦席から宙森の格納庫を見渡し、原型の少女がぼつりと呟いた。

隣の主操縦席でシルバーは少女を見た。少女は真剣な表情で窓の外を見つめている。

「何が変なのだ？」

「原型の人間が、一人もいないわ」

少女の言葉にシルバーは身を乗り出し、窓に顔を近づけた。

「そうだな……ここにいるのは？ 種族？ の連中ばかりだ。原型は一人もいない」

なぜだろう、とシルバーは内心で首を捻っていた。宇宙船が立ち寄るありとあらゆる宇宙港には、かならず原型の人間の姿を見ることがができる。例外はない。

宙森の宇宙港管制官の指示で停泊エリアにシルバーは【弾頭】を着陸させ、入港手続きを待っている。

モニターにボーラン人の管理官が映る。最近では、こういった役人仕事は何でもかんでもボーラン人ばかりだ。四角四面で、規則以外のことは一ミリだって、はみ出そうとしない性格が向いているのだろう。

ボーラン人はキチキチと聞こえる声で話し出した。

「そちらの船籍、および船名を確認した。船主はシルバー。それに、同乗する原型の人間がいるな。名前は？」

シルバーは思わず少女を見た。少女は傷つけられた表情になる。

「シルバーさん、あたしの名前を知らないの？ 知らないで乗せたの？」

「すまん……」

シルバーは口許をへ字に曲げた。なんてこった！ こんなところで、原型の少女と言い合う羽目になるとは……！

「いい、シルバーさん。あたしはアル二って言うのよ。さあ、あのポーラン人に、あたしの名前を教えてあげなさいよ」

唯々諾々とシルバーは従った。ともかくここは、入港許可を貰うことが先決である。

手続きが済み、シルバーはアル二と名乗った少女と一緒に格納庫に降り立った。

アル二は気分を害している表情だ。降り立つと、さよならも言わず、さつさとゲートに向かって歩き去った。

見送ったシルバーは肩を竦め、それきり少女のことは念頭から消え去った。瞬間、思考は切り替わる。

ともかく無事、入港手続きは済んだ。

次にすべきことは決まっている。【呑竜】を探すのだ！

何としてでも？伝説の星？の星図を手に入れる。ミリィが隠している場所は、もう見当がついている。

にやりと、シルバーは笑いを浮かべた。

アル二

猫耳を頭につけ、作り物の尻尾をふらふらさせて、アル二は宙森のメイン・ゲートから内部に続くシャフトへ歩み寄った。

まず、この宙森という宇宙ステーションの様子を頭に入れるため、ほつつき歩くつもりだ。それに腹ごしらえもしたいし……。

シルバーの宇宙艇【弾頭】にいれば食事も出されたろうが、アル二は腹を立てていた。

シルバーったら、あたしの名前も知らないで、ただ超空間ジェネレーターのスイッチを押させるために連れてきたんだわ……。

そう思うと癪に障って、ますます腹が煮え返ってくる。

こんなときは、思い切り贅沢するに限る。レストランでも探して、普段は食べられないような料理を楽しもうかしら……。それくらいの金は持ち合わせている。

メイン・ゲートを通り過ぎ、シャフトから円環部分へ続くシャトルに乗り込む。シャトルもまた、他の部分と同じように木製であった。つるりと滑らかな楕円型で、ほとんど白に近い色をしていて、目を懲らせないと木目があることが確認できない。

内部に入り込むと、ぐるりと壁に沿うように木のベンチが向かい合う形に取り付けられている。

シャトルにはアル二の他に、数人の乗客が乗り合わせた。皆、例外なく？種族？である。太ったの、細いの、背が高いの、低いの。まあ、よくもこれだけバラエティに富んだ人種が乗り合わせたものだ、感心するくらいだ。

アル二が乗り込むと？種族？の乗客は意味ありげな視線を投げか

けてくる。

なにかしら？ アル二の鼻はぴくぴくと動いた。

さつきから気になっている事実。

ここには？ 種族？ しかない。アル二のような原型の人間は一人も見かけなかった。

これは異常な状況である、という感覚はあった。だが、なぜそうなのか、という理由は、さっぱり見当もつかない。

「お嬢さん、この宙森は、初めてですか？」

隣に座ったゴルドン人の若者が話しかけてきた。ひよろりとした身体つきで、色は漂泊したように真つ白である。目の虹彩も白く、髪の毛もプラチナの糸のように白い。

ゴルドン人の故郷の太陽は、ほとんど消えかけたように弱々しい光しか惑星へ投げかけない。そのため、少ない光量を皮膚の奥深くまで浸透させる目的で、ゴルドン人は色素を無くす方向へ進化してきた。普通の太陽の下では酷い火ぶくれを起こすため、ゴルドン人の旅行者は皮膚に特別なフィルムを施しておく。

アル二の隣に座った若者も、皮膚がてらてらと光沢を放っている。

若者の笑顔は優しげで、アル二はあるかないかの警戒心を解いていた。

につこりと笑い返し、答えた。

「ええ、初めてなんです！ あなたは？」

ゴルドン人の若者は唇をすぼめ、ついで飛び切りの笑顔を見せた。「おお！ 失礼、僕はゴルドン人のベータと言います。この宙森に来て、もう五年になりますよ。いいところですよ！ あなたも、きつと気に入ります」

ベータと名乗ったゴルドン人の言葉に同意するように、その場に

いた？種族？の全員が、にっこりと笑顔を見せ、頷く。

そこでアル二は、疑問を投げかけてみた。

「あのう……ここには原型の人たちって、いないんですか？ ゲートを通っても、一人も見かけないんですけど」

ベータの口が、にゅっ、と横に広がり、さらに笑顔が大きくなった。

「まさか！ ここには沢山、原型の人間がいますよ！ あなたも必ずや、ここが気に入って、宙森の一員になりたいと心から願うようになります。まあ、この暮らしを楽しんでください……」

ベータの言葉に他の乗客も「そうそう」と言いたそうに首を縦に振る。同意の動きが、あまりにも揃っていて、アル二はなんだか気味が悪く思えてきた。

その場に居合わせた全員の笑顔に、逆にアル二の胸にじわじわと不安が膨らんできた。

トラブルの予感であった。

シャトル

格納庫甲板から、ゆっくりとゲートへ向かって歩き出し、シルバ―は案内図を見上げた。

宙森の全体図が、簡略化したホログラフィーで浮かび上がっている。

今いる蕪の根っこのようなハブから円環部へ続く四本のスポーク、その内部にはシャトルが走り、シャトルから降りると円環部分の床に降り立つことになる。

円環部分には人工重力は働いておらず、遠心力が重力の代わりとなっているため、シャトルは途中くると回転することとなる。だが、シャトルの床には人工重力が働いているので、乗客は何も感じることはない。

円環は、大まかに四つの区画に分かれている。四本のスポークを中心に、市街を構成する商業区、食糧や様々な製品を送り出す生産区、宙森に住む住民のための居住区、それに？大海？である。円環部分の面積の内の四分の一が？大海？によって占められている。

目的の【呑竜】は、どの格納庫へ降り立ったのか？ 宙森のメモリー・バンクにハッキングすることもできたが、今はそんな面倒臭い手続きは無視する。

なにしろシルバーはこの宙森を支配する【大校母】と知り合いなのだ。知り合いどころか、同業者でもある。

つまり【大校母】の正体は宇宙海賊なのだ。この宙森は海賊の基地でもあった。よりもよって、ミリイは海賊の巣へ飛び込んだことになる。

だが……。

正直、シルバーは【大校母】と交渉することに気の重さを感じていた。

なにしろ【大校母】は、途轍もなく奇妙な主義主張を持っている。しかも、その主張の内容が、またえらく厄介なもので。

まあ、いい！　ともかく、会いにいこう……。交渉の結果、宙森のデータを開示してもらえれば御の字、もし駄目でも、まだ打つ手は残っている。

シルバーはアルニが潜ったゲートに近づいた。ゲートの向こうはシャトルの乗り場になっている。

辺りを見渡したが、原型の少女、アルニの姿は見当たらなかった。すでにシャトルに乗って円環部分へと向かったのだろう。アルニが向かったのは多分、商業区に違いない。

シルバーはシャトル乗り場をさっさと通り過ぎ、秘密の通路入口へと向かう。ここはシルバーのような、宇宙海賊仲間しか知らない入口であった。

周囲を見回し、他人目がないことを確認して、シルバーは入口を通過した。

こちらは、がらんとして人気が存在しない。

通路の途中に検問所があり、警備員が立っていた。

がっちりとした身体つきのバルト人である。身長は百五十センチにも足らず、シルバーの腹の付近にようやく頭が来るほど小柄だ。

しかし、バルト人の故郷の重力加速度は一・五Gと強く、強い重力に対抗するために強い筋肉と、頑丈な骨格を持っている。眼前のバルト人なら、相手がたとえシルバーであっても、良い勝負をするのではないか。

バルト人は近づいていくシルバーを、じろりと睨んだ。むつつりとした顔つきで見上げると、片手を挙げて停止を命じる。

「待て！　ここから先は、許可の無いものは通行禁止だ！　引き返してもらおう」

シルバーは目に力を込め、バルト人を睨み返した。

「おれを知らないのか？　このシルバーさまを？」

バルト人の口が、ぽかんと呆けたように開く。

「シ、シルバー……？　あつ！」

シルバーは顎を引いた。

「判ったようだな。おれは【大校母】に会う必要がある。ここを通してもらうぞ」

さつとバルト人はシルバーに向け、敬礼した。

「失礼致しました！　どうかお通り下さい！」

「うむ」と鷹揚に頷き、シルバーはバルト人の横を通り過ぎた。

この時、シルバーはバルト人に対し、強いメッセージを送信している。海賊同士でなければ受信も送信もできない、特殊な暗号化されたメッセージ。それがバルト人の脳に直結した装置に受信され、シルバーの身分を明らかにしたのだ。

バルト人の視界には、シルバーの頭上に「海賊同盟」のぶつちがいの大腿骨に髑髏の紋章エンブレムが輝いて見えたはずであった。しかも、その下に海賊の船長であることを示す符号が息づき、バルト人を恐れ入らせたのであった。

通路の先に、一人乗りのシャトルが、シルバーを待っていた。乗り込むにはちよつと狭いが、我慢して座席に座り込む。座席の前には、たった一つ、ボタンがある。

ぐい、と押すとシャトルは滑るように動き出した。

円環

ミリイもまた宙森の内部に、原型の人間が見当たらない事実気に付いていた。

パック、ミリイ、ヘロヘロたちは、ボーラン人の案内でシャトルに乗り込み、円環部分へと運ばれていく。

「どういうことかしら。ここには原型の人間がまるつきり、見当たらないわ」

ミリイの呟きに、パックは初めて気付いたとばかりに眉を上げた。隣で座るヘロヘロと顔を見合わせる。

パックはミリイに話しかけた。

「どうして、それが気になるんだ？」

「さあ」とミリイは、首をちよつと傾ける。

が、急いで首を振って、自分の言葉を否定した。

「なんでもないのかもしれないわ。たまたま、あたしたちの近くに、原型の人たちが見当たらないだけなのかも……」

案内役のボーラン人は、そんな遣り取りにまるで無関心で、まっすぐ背中を伸ばし、座席に不動の姿勢を守ったまま座っている。

シャトル内部の表示が、円環部分へと近づいていく状況を示している。

不意に引っくり返る感覚があつて、パックを戸惑わせた。一瞬のこと、パックは自分の気のせいかと思った。

だが、ミリイを見ると、やっぱり気がついたようで、微かに頷いて見せた。

「円環部分には人工重力場が働いていないのよ。遠心力を使ってい

るから。今は、シャトルが姿勢を変えて、あっちの遠心力に合わせたんだわ。円環部分ではコリオリの力が効いているから、それでちょっと感じが変わったのね」

ボーラン人が頷いた。

「その通りだ。円環部分では遠心力があるから、わざわざ人工重力場を発生させるのはエネルギーの無駄というものだ。さあ、これから【大校母】さまに面会するぞ！」

シャトルの出口から外へ出ると、宙森の内部の景観が目の前に広がる。

なんとなくパックは、宙森内部は木々に覆われた、シルバーの【鉄槌】内部で見た自然に溢れているのでないかと想像していた。

ところが、それは半分は当たっていたものの、半分は大きく間違っていた。目の前に広がるのは、海だった。

円環の外周が、ここでは？下？になり、内側が？上？になる。その外周全部が、総て海となって広がっているのである。天井一面は白く発光している。

空気には潮風が含まれている。

パックは背後を振り返った。

巨大な塔が円環の天井を突き刺し、地面にまで達している。これがシャトルのためのスポーク部分なのだろう。パックたちはスポークの周りにある円形のテラスに立っている。テラスからすぐ下が海面になっていて、覗き込むと波が白く泡立っている。

ボーラン人が指さした。

「迎えだ」

水平線は外周に沿って盛り上がっている。ちょうど円の内側を見上げる形になる。目測で、一キロほどの沖合いに、唐突に白い蒸気

が上がった。

黒い塊りが海面から持ち上がる。

紡錘形で、滑らかな表面をしている。それは一旦、海面から斜めに持ち上がると、ざばーっと大きな白波を蹴立て、こちらへ近づいてきた。その動きは生き物を思わせた。

「鯨じゃないか……！」

パックは大声を上げた。

鯨はパックたちが立っているテラス目指して真っ直ぐに近づいてくる。鼻先がずんぐりしていて、パックの乏しい動物知識では、鯨は抹香鯨という種類だった。

鯨はテラスに横付けになって、海面すれすれから全体からすれば驚くほど小さな目で、パックたちを見上げた。

へロへロは疑わしそうに声を上げる。

「これが迎え、なのかい？」

「そうだ」

ボーラン人は無表情に答えた。

テラスに横付けになっている鯨の腹から背中へかけ、不意に段々ができた。階段のようである。

ボーラン人は、何の迷いもなく、その階段を上がって背中へ達した。背中からパックたちを見下ろし、声を掛ける。

「どうした？ 上がって来い！」

パックたちは思わず顔を見合わせた。

意を決したようにミリイが先に立った。

階段を踏みしめ、背中へ上がっていく。鯨は大人しく、微動だになかった。

パックもまた、ミリイの後に続いた。へロへロはおっかなびっくり、という様子でパックのすぐ後から上った。

背中 of 盛り上がった部分は背骨にあたる。

その盛り上がりが動き出し、変化した。変化した後には、人間が座れる座席ができていた。座席には肘掛けまでついている。

当然のようにボーラン人は先頭の座席に腰を下ろす。ミリイ、パツク、ヘロヘロの順でそれに倣った。

全員が座席に腰を落ち着けたのを確認して、ボーラン人は声を上げた。

「では、唯今より【大校母】さまに面会するため、出発する！」

その言葉が終わるなり、出し抜けに鯨が動き出した。

パツクは思わず「わっ」と叫んでいた。椅子の肘掛け部分が動き出し、パツクの腰を抱きしめるように包み込んだのである。

前のミリイもまた、椅子に抱きしめられている。

後ろを見ると、ヘロヘロのまん丸な顔が両側から迫る肘掛けにがつちり掴まれ、身動きもとれないようだった。ヘロヘロは恐怖の表情を浮かべ、頭の天辺から生えているホイップ・アンテナの先が何度も忙しく瞬いていた。

ボーラン人が振り向き、冷静な口調で話しかけてきた。

「心配ない。少し揺れるから、安全ベルトで締め付けるだけだ」

ボーラン人には似つかわしくない冗談を口にした。

「ご乗客の皆様、これより【大校母】さまへの面会の旅を始めます。それでは良い旅《ボン・ヴォヤージュ》を！」

ショッピング・モール

アルニは必死になって駆けていた。追跡者を振り切るため、後ろを何度も振り返り、人ごみを掻き分け、路地を抜け、階段を駆け下り、駆け上がった。

ベータと名乗ったゴルドン人の若者は、シャトルから降りると、なぜかしつこく「どこへ行くのか？ 何か当てはあるのか？ よかつたら自分が町を案内しよう」と何度も誘った。

だが、その熱意があまりに押し付けがましく、またベータの目付きがアルニにとって、怖くなりそうなほど真剣だったので、断ったのである。

シャトルの乗降口から降りると、そこは商業区の真ん中で、スポークを中心に様々な店が並んでいる。宙森の人口はどのくらいか知らないが、アルニはここに大部分の人口が集まっているのではないかと、と思われた。

ゴルドン人のベータの案内の申し出を断り、アルニは目の前のショッピング・モールを歩き出した。

最初は目に入るもの総てが珍しく、また客寄せのホログラフィ・コマーションも目を引いて、しばらくの間は、あれこれと店先で品定めをしているだけだった。そこに何の怪しむ点も無かったのである。

しかし、モールを歩いていると、やはりここにも原型の人間が一人も見当たらないのに気付いた。

アルニはシルバーの【鉄槌】に乗り込む前は、ある程度まで様々な星系を巡り歩き、それなりの見聞を広めてきた。

その経験から考えても、今まで原型が一人も見当たらない、とい

う状況は無かった。どんな辺境の星にも、原型の人間は必ず見受けられる。

町を歩く？ 種族？ の人々がアルニに向ける視線も気になった。

どういふのだろう……。じつとアルニの一挙手一投足を見守る？ 種族？ の視線は、粘つくく、さりげなくだが視界から外れるまで、しつこく追いかけてくる。まるで品定めしているような感覚であった。商店の店主の視線も、そうであった。

徐々に、アルニは恐怖を感じつつあった。

やがて

視界の外れに白いものを捕捉したとき、アルニは総毛立った。ベータであった！ ゴルドン人のベータが、路地の片隅で、じつと物陰に隠れ、アルニを見つめていたのである。

ベータの周りには、同じ頃の年頃と思える数人の？ 種族？ の男女が、ベータと同じように、アルニを見つめていた。

慌ててアルニは視線を外し、その時たまたま目の前にあった店先の商品を覗き込む振りをして、窓ガラスに映る彼らを注視した。

ふらりと、ベータがアルニのいるところへ歩き出す。周りの男女も、さっと散開して、アルニの背後を取り囲むような動きをとるのが判った。

その瞬間、アルニは走り出していた。

ばたばたつ、と背後で慌てたような足音が交錯する。

振り返ると背後を取り囲むようにしていた？ 種族？ の男女とベータが、アルニの反応に瞬時に反応し、急いで大股で追いかけ始めた

のである。

アルニは、全速力で走り出す。

ショッピング・モールは複雑な構造になっている。幾重にも階層が重なり、その間を階段、エスカレーター、空中通路が繋いでいた。そこを無数の？種族？の人々が、思い思いの方向へ歩き去り、あるいは立ち止まり、アルニの行く手を塞いだ。

逃走を続けるアルニは、ぞっとなっていた。

まるで宙森総ての住人がここに　アルニのいるここに集まってきたのではないか。偶然を装い、目的はまるで別のことなのに、実はアルニの逃走を邪魔するために、彼らだけに感じる何かの合図に突き動かされ、この場所に集合しつつある　。

馬鹿な想像だと思っではいたが、その妄想は、しつこくアルニの脳裏に浮かんでは消えた。

「どいて！　どいてよお……！」

半べそになりながら、アルニは夢中になって眼前に立ちふさがる？種族？の人々を掻き分け、すり抜けて走っていく。

わざとではないのであるうが　いや、やはり、わざとであろうか　人々は、まるでアルニの行く手を塞ぐために現れたかに思えた。

やっと人ごみから離れ、アルニは狭い路地に入り込んでいた。

商店の裏側にあたる路地である。上を見上げると、両側から無愛想な壁面が聳え、壁面にとこどころ空いた窓が、アルニを見下ろしている。

ばたばた……と、足音が迫る。

はっ、とアル二は前方を見た。
行き止まりだ！ 逃げられない！

アル二は壁に背をびったりと押し付け、じりじりと移動した。
がたん！ 唐突に背中^の壁がへこみ、アル二を呑みこんだ。

「きゃあっ！」というアル二の絶叫は、たちまち背後から回る手の
平に塞がれた。

耳もとで囁き声^がする。

「静かに！ 奴らに聞かれるとまずい。逃げたくはないのか？」

隠し通路

ばたん、と微かな音を立て、目の前の壁が塞がり、アルニは真つ暗な中に閉じ込められていた。

ばたばたばた……と、足音が通過していく。
それが、戸惑ったような足音に変わった。

「いないぞ！ 確かにあの原型の女、こっちに逃げ込んだはずなのに？」

「本当にこつちだったのか？ 見間違いではないのか？」

「見たんだ！ あの原型の女は、確かにこつちに曲がった。畜生……！ どこへ消えちまったんだろう……」

最後の声は、ベータのものだった。

やがて諦めたのか、足音は、元来た方向に戻っていく。

アルニは暗闇の中、凝然となっていた。ときどきという自分の鼓動だけが、唯一の聞こえる音であった。

ふつ、と口許を覆う手がどけられる。

振り返ると、微かな明かりの中で、こちらを見つめる顔と突き合わせていた。

中年の、原型の男が、真剣な表情でアルニを見つめている。どことなく、疲れたような表情だ。男は、ほつと溜息をついた。

「危なかったな。奴らに捕まるところだったぞ！ どうして、あんなところをふらふら歩いていたんだ？」

ぼろり、とアルニの目から涙が零れる。

ひつく、ひつくとアルニはしゃくりあげ、途切れ途切れに声を詰まらせた。どつと安心感が押し寄せてくる。

「わ……分かんないの……！ 分かんないのよお……！ 何なの、

あいつら……どうしてあたしを追いかけるの……？」

男の顔が困ったような表情になった。目に戸惑いが表れている。

「君は、宙森に来たばかりなのかね？」

アル二が頷くと「それで判った」と、男も頷き返した。

「こつちへ来なさい。我々の隠れ家へ案内する」

男は背を向け、歩き出す。アル二は立ち止まったままだ。男は振り返って不審気な表情を浮かべた。

「どうした？」

アル二は頭を振った。

「厭！ あたし、シルバーの宇宙艇へ帰るわ！ シャトルに乗って

……」

男は渋面を浮かべた。

「困った娘だ。あいつらが最初に見張るのは、シャトルの搭乗口だということくらい、分かりそうなものだが……」

アル二は、がつくり肩を落とした。

「そうなの？ でも、どうして、あたしを追いつけ回すの？ あたしが何をしたのよ！」

徐々に怒りがアル二の声を大きくさせていった。男は慌てて手を振った。

「静かに！ 連中が全部いなくなったという保証は、ないんだ！」

「はっ」とアル二は自分の手で口を押さえた。

男はもう一度、繰り返した。

「さあ、我々の隠れ家へ行こう。向こうへ行けば、君の安全は確保

する。それとも、やっぱり、シャトル乗り場へ行くつもりかね？」

諦めてアルニは首を振った。

「うっん、行くの、やめにする……隠れ家って、そこは原型の人たちの？」

「そうだ」と男は肯定し、歩き出す。

今度はアルニは逆らわず、後に従った。

アルニが引つ張り込まれたのは、建物の裏側の隠し通路のようなところだった。以前は設計の都合で出つ張りがあつたところに、壁を作り、細い通路にしているのだらう。見るからに安普請で、細い隙間から外光が漏れ、照明がなくとも充分に明るい。

通路の行き止まりに突き当たると、男は膝を付き、蹲った。ごそごそと足下で何かやっていたかと思うと、ぱかりと床が持ち上がり、穴が開いた。

背後から覗き込むと、一人がやっと潜り込める穴に、手がかりの梯子がついている。

男は立ち上がり、穴を指し示した。

「君から潜りなさい。おれは君が入った後、穴を元通りにしなければならぬから、後から入る」

言われたとおりにアルニが潜り込み、後から男が入ってくる。

「閉めるぞ」と声がして、男は穴の蓋を元通りに閉めた。

たちまち、辺りは真の暗闇になり、恐怖が込み上げる。

アルニは手がかりの梯子をしっかりと掴みながら、穴の底へと降りていった。

やがて、足先が底に着いた。

男が降りてくる気配があつて、アルニは後ろに下がった。とんと落下する音がして、男が何かポケットを探っている。

ぱ！ と、出し抜けに、強い明かりがアル二の目を眩ませる。男がライトの光を点けたのだった。

底には横穴が空いている。

男は今度は先にたち、ライトを手に持って歩き出した。

アル二はその後を従っていていき、声を掛けた。

「ねえ、そろそろ教えてくれても良いでしょう？ どうして原型のあたしを、あいつらが追い掛け回すのか」

男は前を見たまま答えた。口調に怒りが込められていた。

「やつら 宙森の？ 種族？ の連中は おれたち原型に対し、怖ろしいことを仕出かしたんだ！」

男の口調に、アル二の胸に冷やりとした感触が沸いてきた。聞きたくないような、しかし、聞かずにいられないような。

「何をしたの？」

男は立ち止まり、振り返る。手に持ったライトの光が男の顔を怖ろしげに隈取った。

「脳の摘出だよ！」

アル二は呆然と立ち竦んだ。

【大校母】

ばしゃつと水を跳ね、イルカが海面からスキップするように何度もジャンプを繰り返しては「けけけけっ！」と聞こえる声で何かを鳴き交わしている。

パックたちが乗っている抹香鯨の周りを、数十頭のイルカたちが追いかけるように泳いでいる。その口許には、永遠の微笑が貼りつき、時々パックたちをからかうように大きく水面からジャンプして、ばしゃんと水を跳ね散らかす。

しかし、パックたちをからかつてばかりいるようではなさそうだ。イルカたちがジャンプし、水面に体を打ちつけると、その音に驚くのか、そのたびにトビウオが水面からぴっぴつと銀色の鱗を煌かせて飛び上がる。それを待ち受けたイルカたちが、空中で口に咥え、キャッチするのだ。

パックたちは進行方向を見つめた。そちらはステーションの回転方向で、水面が盛り上がり、やがて頭上に立ち上がるのが見える。

視線の方向は空気に霞んでいるが、それでもステーションの円環部分の曲率は目に見える。そこが目的地なのか、海の真ん中にぼつりと島が浮かんでいるのが見える。

でも、左右は普通の景色に見える。遙か彼方にステーションの壁が見える以外は、真っ直ぐで視線を遮るものは何も存在しない。

「すげえ、広いなあ。こんな馬鹿でかい海、必要なのか？」

パックの声を聞きつけ、ボーラン人がくると振り向く。首だけぐるりと振り向き、上半身は動かない独特の動きだ。

「この海は？ 大海？ と名付けられている。この海があるから、宙森の内部の空気は正常な酸素濃度を保っていられるのだ。この海の表

面には、一センチ平方あたり、十万匹の植物プランクトンが棲息している。その植物プランクトンが二酸化炭素を吸収して、光合成で酸素を発生させているのだ。それに？大海？そのものの水が宙森の重量バランスを保ってもある。実に大切な場所なのだよ」

ポーラン人の口調は誇らしげなものだった。

そうこうしているうちに、島が近づく。

パックの鼻は空中に異臭を嗅ぎ取っていた。

粘っこい刺激臭。腐敗臭だ！

ミリイがパックを振り向き、顔を顰めた。

「何、この匂い……！」

パックも頷いた。

「ああ、おれも嗅いでいる。何だか、ものが腐ったような匂いだな」
ふと振り返ると、ヘロヘロはきよとした顔をしていた。

「お前は平気なのか？」

ヘロヘロは「うん」と頷いた。

「僕は、ロボットだからね。第一、僕には鼻がないよ！」
成る程なあ、とパックは妙な所に感心した。

島が近づき、中心になにかが聳えている。泥を捏ね上げて盛り上げたような形をしている。

全体に塔の形をしていて、所々に穴が開いていた。塔は何本も天を指し、それらが集まって、一つの建造物を造り上げていた。

鯨は島の栈橋のような所に横付けした。

ようやくパックたちの身体を締め付けていた肘掛けが開き、全員を解放する。再び横腹に階段ができて、ポーラン人を先頭に一同は島に上陸した。

匂いは、ますますひどくなる。パックとミリイは、込み上げる吐き気に必死に耐えていた。

「これを使うといい」

ボーラン人がパックたちに簡単なマスクを手渡した。

「我々は平気だが、我々以外の連中にとっては、この匂いが我慢できないようだな」

受け取ったパックはマスクを顔に掛けた。鼻と口を覆うマスクは、掛けると嘘のように酷い匂いがすつきりと消え去った。

塔に近づくと、数人のボーラン人が歩哨に立っている。腰には銃を差したホルスターがあり、手には明らかに火薬で弾丸を発射する形式の武器を持っている。

光線銃が普及している今でも、コルダイト火薬を使用した銃器は現役である。その破壊力と、信頼性に勝るものは無い。

歩哨に立っているのは、パックを案内してきたのと違い、全身が真っ黒で、逆三角形の顔をした、蟻のような印象を与える？種族？だった。もしかしたら、ボーラン人の中でも？種族？が違うのかもしれない。

パックを案内したほうが歩哨に近づき、なにやら「ギチギチギチ」と聞こえる早口で話し掛ける。歩哨は頷き、さっと入口脇に散開してパックたちを通した。

中に入ると、壁はやっぱり泥を塗り固めたような感じで、むっとするほど気温が高い。たちまちパックとミリイは全身に汗をかいてしまった。

明かりは所々しか点っておらず、薄暗い。通路の壁はカーブを描き、床も平らではなく、波打つように凸凹している。蟻のような姿をしたボーラン人は盛んに触覚を触れ合い、彼らしか判らない言語で話し合っている。

奥へ、奥へとパックたちは連れられて進んでいった。通路は何度も曲がりくねり、思いがけない所で段差があったり、急に狭まった

りして歩き辛い。一度など、ほとんど這うようにして進まなければならぬ通路もあった。

「まるで蟻塚だわ……」

ミリイが顔を顰め、呟いた。パックは同意した。

「まったく。ボーラン人は蟻の生態を真似て遺伝子を変更したと聞いているけど、こりゃ、やりすぎだよ！」

ぶつぶつ言いながら、それでもパックたちは諦めず、バツタのようなボーラン人の後に続いていった。

不意に、ボーラン人が立ち止まった。

「ここだ！　ここが【大校母】さまのお住まいになる寢所だ！」

パックとミリイは顔を見合わせた。

案内された場所は、ほとんど何も見えないくらい暗い。今まで歩いてきた通路の先からこぼれる仄かな明かりで、ようやくおたがいのシルエットが判るくらいだ。

暗闇の中で案内人のボーラン人が言い足した。

「もう、マスクを取ってもいい。ここの空気は浄化されている。お前たちにとって不快な臭気は、一掃されている」

おそろおそろ、パックはマスクを筆記取り、空気の匂いを嗅いでみた。

本当だ！　ボーラン人の言うとおり、ここの空気は澄み切っている。隣でミリイも、マスクを脱ぐ気配がした。

「暗いなあ……何も見えないぞ！」

パックは、わざと大声を上げた。

すると、暗闇の奥からしっとりとした、色っぽい女の声が聞こえてくる。

「今、明かりを点けます。そなたたちは、明るいほうがよろしいの
でしょう?」

女の言葉が終わると、唐突に天井が明るく輝いた!

見上げると、半球状のドームになっていて、発光パネルがほんの
りと緑色に色づいた明かりを投げ掛けている。

「わっ!」と、パックとミリィは同時に驚きの声を上げていた。

目の前に【大校母】が出現していた!

？いにしへ言葉？

「そなたたちの宇宙艇にある？キューブ？は、この宙森で禁じられている？いにしへ言葉？を含んだ情報をこちらに送信したので、受け取りは拒否されました。残念ですが、情報料金は支払えませぬ」

【大校母】は、大きな二つの両目をひた、とパックとミリィに当てゆったりとした口調で話し掛けてきた。

【大校母】の声は、ぞくぞくするほど魅力的で、暗闇の中で耳にしているとパックには洛陽でのミュージズ人、ビーチヤの面影が脳裏に浮かんでくるのだった。

しかし【大校母】の姿といたら……！

ミリィの「蟻塚みたい」という感想は、真相を言い当てていた。まさしくボーラン人の住まいは、蟻塚そのものだったのである。

目の前に巨大な肉塊が横たわっている。

生白く、所々静脈が透けて見える巨大な肉の塊りが、薄暗い照明の下で蠕動を繰り返している。その肉塊の先に【大校母】の本体がくつついている。

意外なことに肉塊にくつついている【大校母】の本体は、原型の女性とほぼ変わらない姿をしている。真っ白な鯨の胴体に、ウエストから上の部分だけ、原型の女性をくつつけたら、今まさに眼前に見ている【大校母】の姿に近い。

本体部分の【大校母】は、やや太り気味の肢体で、たつぷりとした肉付きをしていたが、それでも腰から先の巨大な肉塊に比べれば、何ほどでもない。

【大校母】は、全裸であった。巨大な乳房が、でれん、と大きな脂肪の固まりとなっている。

長い黒髪が背中から腰まで覆い、やや下膨れの顔は整った目鼻立ちをしている。顔だけ見れば、まあ、そこそこ美人といえるが、全体を見ると、グロテスクそのものだった。

部屋の大部分を占める肉塊は【大校母】が会話を続けているうちも、何度も蠕動をくり返し、そのたびに肉塊の先からボーラン人の子供が吐き出される。すると側に控えていたボーラン人がさつと子供を受け取り、闇に消えていく。育児室へ向かっているのだろう、とパックは思った。

ミリイは【大校母】の姿に圧倒されていたようだったが、それでも立ち直り、ぐいとばかりに睨みつけ、口を開いた。

「？いにしへ言葉？とは、何よ！　？キューブ？の情報が受け取り拒否されたなんて、聞いたことないわ！」

【大校母】はゆっくりと瞬きをした。睫は長く、まるで瞬きをする、と、ぱたぱたと風を打つ音がしそうなくらいだ。

「この宙森は、特別な場所なのです。この宙森に住まう人々のために、妾は常に安全を考えなければなりません。？いにしへ言葉？はこの宙森に対し、危険な考えを広めます。ですから、受け取りは拒否されねばなりません」

ミリイは地団太を踏んだ。

「だーかーらーっ！　？いにしへ言葉？とは何か聞いているのっ！」
そつとボーラン人の案内役が、ミリイの肘を押さえ、首を振る。
静かにするよう、要求しているのだ。

だがミリイは、その手を邪険に振り払い、きつとばかりに【大校母】を睨みつける。

ぼつり、と【大校母】が呟いた。

「地球……」

「はっ」とパックとミリイは【大校母】を見つめた。

「人類……母なる星……文明……国家……これらは禁じられた言葉なのです。我らボーラン人、いいえ宙森に住む総ての人々は、これらの言葉から切り離され、独自の進化を遂げねばなりません。人類は、大いなる過ちを犯しました。その過ちを、この宙森で繰り返してはなりません。決して！」

パックは怒りが込み上げた。

「何を言っただい！ お前らだって、この宙森にいる？ 種族？ だって、みんなおれたち原型から遺伝子を変更してできたものだろう？ つまり、おれたちみんな、地球人ってわけじゃないか！」

【大校母】は、ゆっくりと首を振った。

「その事実は否定は致しません。ですが、我ら宙森の人々は、その事実から自由になりたいと願っているのです。妾の時代には無理でも、次の【大校母】が生まれるころは、完全に？ いにしへ言葉？ がこの宙森からは消え去っていることでしょう。それ故、かつて人類が犯した過ちは、ここでは二度と繰り返すことはないのです」

ミリイが押し殺した声を上げた。

「その過ちとは、何よ？」

「環境破壊です！ かつて地球で、人類はおのれの欲望のため、自然を破壊し、そのため地球は、人類の居住するところではなくなりました。超空間ジェネレーターが開発されなければ、今頃は人類は滅亡していたところです」

高々と【大校母】は言い放つ。

「この宙森では、総ての資源が完璧に再使用され、水の一滴、空気

の一分子たりとも、無駄にはしません。我らはこの宙森に、理想郷を見出しているのです！」

【大校母】の高邁な口調に、パツクは何か隠された意図を感じていた。なんだか無理矢理、理想論をぶっているような感じである。

「それで、この宙森には原型の人間がいないのか？ あんたはおれたち、原型の人間を拒否するのか？ でも、どうして原型の人間がいなくて、超空間ジェネレーターが動かせるんだ。恒星間宇宙船を、あんたらは必要としているんじゃないのか？」

【大校母】はその時、初めて表情らしいものを浮かべた。今まで無表情を保っていた顔に、凄愴といつていい笑顔が浮かんだのである。「もちろん、我らは恒星間宇宙船を必要としていますよ。恒星間宇宙船がなければ、この宙森に必要な原材料を運ぶことはできませんからね……。でも、そのために原型の人間の手を煩わせる必要は一切ないのです。我らは超空間ジェネレーターの秘密を解明しました！ もはや原型なしでも、超空間ジェネレーターは動かせます！」

ミリイは、目を丸くした。

「そんなこと、信じられないわ。超空間ジェネレーターは原型の人間が起動しなくてはならないのは常識よ！」

【大校母】は頷いた。

「そう……。今までは、そう考えられていました。でも必要なのは、原型の人間そのものではないのです。あなたがたの脳の内部に、その秘密が隠されているのを、我ら宙森の科学者は、遂に解明したのです」

ミリイは呆然と呟いた。

「それって……まさか！」

にーっ、と【大校母】は邪悪な笑みを浮かべる。びっくりする

ほど綺麗な歯並びが、薄暗い照明の中きらりと光った。

「そうです。必要なのは、原型の人間の脳そのものなのです！ ちようど良い。ここに、原型の人間が二人もいますね。あなたがたの脳を頂戴しましょう。心配は要りませぬ。痛みはなく、たとえ脳だけになり、身体を失っても、あなたがたの意識はちゃんと保つていられますから。あなたがたの脳は溶液に保存され、大事に保護されます。そして、宙森の大いなる一員となって、毎日が喜びのうちに過ごせるのです！」

気がつくと、パックとミリイをポーラン人の兵士が取り囲んでいた。手にするのは神経衝撃銃らしい。じりじりと兵士たちは囲みの輪を縮めてきている。

兵士たちの指が引き金に掛けられた時、その場を支配する大声が響いた。

低く、轟くような大音声。

「そいつらは、おれが頂く。お前さんの勝手にさせる訳にはいかないな！」

ずい、と姿を表したのはシルバーの銀色の巨体だった！

隠し場所

「その二人は、おれが頂く！ 脳味噌を抉り出すって話は、待って貰おう」

シルバーは【大校母】に向かって平然と、ずけりと話しかけた。【大校母】は微かに眉を寄せただけで、表情には何も表れていない。

「なぜです、シルバー。わざわざここまで来て、妾の邪魔をすることは、礼儀知らずにも程があります！」

「おいおい」とパックが一步さつと前へ出た。

シルバーと【大校母】を等分に見て、口を開く。

「あんたら、知り合いか？」

「そうとも！」とシルバーは頷く。じろりと【大校母】を見て、言い足した。

「この【大校母】さまは、おれ様と同じく、宇宙海賊仲間さ！ おれなんざ、こいつに比べたら、駆け出しもいいところ 何しろ、五百年間、この宙森で海賊稼業を続けていたんだからなあ！」

シルバーの暴露に、ミリイとパックは呆然として顔を見合わせた。シルバーは再び【大校母】に向かい、昂然と口を開く。

「なあ、こいつらの脳味噌を抉り出す前に、おれに預けちゃくれなにか」

【大校母】は首をかしげて尋ねる。

「あなたが、どうして、それ程この原型の二人に執着するのか、さっぱり判りませんね。訳を聞かしてください」

シルバーは、にたりと笑顔を見せた。

「そっちの小僧は要らねえ！ 脳味噌を抉り出すなり何でもしてくれ。おれが用があるのは、そっちの娘だ。そいつはミリイと言って、かのフrint教授の孫だ！」

「フrint教授の孫娘！」

【大校母】の両目が驚きに見開かれ、らんと光った。ずるりと巨大な肉塊を引き摺るようにミリイに向き直り、しげしげと眺める。あまりの熱っぽい視線に、ミリイは微かに青ざめ、後じさった。

「どうだい！ 面白れえ、話だろう？」

シルバーは得意そうに顎を上げた。【大校母】は頷いた。

「フrint教授は、かつて銀河系を調査し、人類の居住に適する幾多の惑星を発見したそうです。しかし、教授の死後、その位置は判らなくなっていますか……」

【大校母】の言葉に、シルバーは割り込んだ。

「ところが、その娘が、教授の死の直前に、メモリー・クリスタルを受け取っているところを、おれはこの目で、しかと見ている！ お前さんの言う人類の居住に適した惑星の座標も、その中に納められているはずだ！ それだけじゃないぞ。？失われた星？つまり地球の座標も、その中にはある。おれは、それが欲しいんだ」

「地球の座標？」

【大校母】は不審気に呟いた。シルバーを見て尋ねる。

「地球など、どうして大事なのです？ あれは汚染され、住めなくなつて、人類は逃げ出したのですよ」

「と確かに言われちゃいるがね、本当にそうかは、判らねえ！ とにかく、おれは地球へ行きたい。そこで、取り引きだ。おれは、ミリイが持っていたメモリー・クリスタルの隠し場所を知っている。

あんたがおれに協力するって譲歩するなら、居住可能な惑星のデータを渡してもいい」

二人の遣り取りに、ついにミリイは怒りを爆発させた。

「まったく、もう！ さっきから何を勝手なことばかり喋っているのよ！ あたしは絶対に、お祖父ちゃんのデータを渡すつもりはありませんからねっ！」

「ちつつちつつちつ……」

首を振り、シルバーは舌打ちをした。

「これは、お前さんがどうこうできるレベルの話じゃない。お前さんが素直にデータを渡してくれば、脳味噌を抉り出すって話を止めるにできる、って筋だ。ミリイ、もうあんたの手を離れているんだよ」

ミリイに対する、いつもの丁寧な口調は、シルバーからは完全に掻き消されていた。ミリイは唇を噛み、シルバーに叫んだ。

「あんたが、あたしのメモリー・クリスタルの隠し場所を知っているはずは絶対ないわ！ それなら、どこに隠したか、言っでご覧！」

「お安い御用だ」

シルバーは悠然と目を細めた。

「そこに、メモリー・クリスタルを隠してあるんだ！」

シルバーが猛然と指さしたのは、へろへろだった！

神経衝撃銃

指さされたへ口へ口は「へっ？」と、きょとんとしている。

「僕？」

片方の足を挙げ、指で自分を指す。シルバーは大きく頷いた。

「他に隠したとは考えられない！ おれは、ミリイの【呑竜】を二ユートリノ・スキャンで、風潰しに調査した。その結果【呑竜】のどこにも、それらしきものは発見できなかった。となれば、他の場所に隠したと考えられる。では、どこに？ 【呑竜】が隠れていた首都惑星ということも有り得るが、隠し場所が長い時間のうち失われる危険があった。となれば、もっとも信頼できるのは、そのポンコツ・ロボットのなかだ！ そのクズ・ロボットは、ミリイが生まれた頃から一緒だ。ミリイに対するへ口へ口の忠誠心は篤い。安心してきる隠し場所は、そいつなんだ！」

ミリイは真つ青になっていた。その表情を見て、シルバーは勝利の笑みを浮かべた。

「やはり、凶星だな？」

【大校母】が疑問を投げかける。

「それなら、すぐさま、そのロボットを分解して、メモリー・クリスタルを取り出せばいいではありませんか」

シルバーは首を振る。

「いいや、ただ隠されているのではないだろう。この娘のことだ。多分、情報を取り出す特別な方法を講じているはずに違いはない。ただ単に、ばらばらに分解するだけでは、データは失われる危険がある」

へろへろは慌てていた。

「ちょ、ちよつと待ってくれよ！ どうして僕に、そんなデータがあるってことになるんだい？ 僕、ミリイからそんなデータ受け取った覚えは全然ないよ！」

そつとパックは、ミリイに囁きかける。

「ミリイ……シルバーの御託、どういうことだい？ あいつ、本当のこと、言っているのか？」

青ざめた顔を、ミリイはパックに向けた。こつくりと、一つ頷く。パックは、ぽかん、と口を開けた。

「本当なのか！ 本当に、へろへろに教授の情報を？」

にたにたと不気味な笑いを浮かべながら、シルバーはへろへろに詰め寄った。

「遂に見つけた！ フリント教授の秘密を、お前が持っている……」
シルバーの勢いに圧倒され、へろへろは、たじたじとなった。

「よ、よしてくれ！ 僕、そんな覚えは一切ないんだ……」

くるりとミリイに振り返った。

「ミリイ！ あいつに言つてやれよ！ 僕、そんな大事な秘密、隠していないよね？」

ミリイは無言である。その顔を見上げ、へろへろは絶望的に呟く。

「そんな……」

ぐつとシルバーは、ミリイに押し掛かるように迫った。

「ミリイ、諦めろ！ さあ、このポンコツのガラクタから、さつさと教授のデータを吐き出させる！ おれは、どんな手段を使っても、暴いてやるぞ。いいか、おれは、どんな手段でも取ってやる。これは、本気だ！」

ぎらぎらと、欲望に燃える目でシルバーはミリイを睨みつけた。ぐいと手を伸ばし、ミリイの胸倉を掴み、片腕一本で空中に吊り上げた。パックは堪らず飛び出し、シルバーの身体に武者ぶりついた。

「やめる！ シルバー！」

「煩いつ！ 小僧、引っ込んでいろ！」

ぶんつ、とシルバーは片腕を振り上げた。パックは「わあっ」と叫んで空中に放り投げられる。空中を投げられたパックは、神経衝撃銃を構えたままの、蟻そっくりの兵士たちの間に飛び込んだ。

「ギチギチギチッ！」と、騒がしい鳴き声を上げ、ボーラン人の兵士はうつろたえた。

シルバーはそれに構わず、片腕で吊り上げたままのミリイに顔を押し当てるようにして吠え立てる。

「さあ！ データを教えろっ！」

「シルバーっ！」

パックの叫び声に、ミリイは目を丸くして叫んだ。

「パック！」

シルバーは振り返る。

パックがボーラン人の神経衝撃銃を奪い取り、構えていた。

混乱

「ほう」と、シルバーは皮肉な笑みを浮かべる。

「それで、どうするつもりだ？」

「ミリイから手を離せ」

怒りを全身に顕し、パックは銃口をシルバーに向けている。

「厭だと言ったら？ お前に撃てるかな？」

「撃てるさっ！」

言うが早く、パックは引き金に指を掛けていた。引き金を絞る。

途端に銃口から青白い、神経衝撃ビームが迸り、シルバーの胸板にぶち当たって砕け散った！

シルバーは微動だにせず、逆にせせら笑った。意外な展開に、パックは呆然となり、だらりと手にした銃口が下を向く。

「そんな……」

神経衝撃銃は、人間の神経組織を直に刺激する武器である。身体には傷一つつけることなく、猛烈な痛みを与える。このビームが掠ただけでも、人間は絶叫し、転げまわる苦痛に耐え切れることはできない。そのビームをまともに受け止めたに関わらず、シルバーは笑っている！

「馬鹿者めが！ おれの神経組織は人間と違うのだ。そんな玩具が、おれに効くわけがない！」

シルバーの嘲笑に、パックは唇を噛みしめた。目が忙しく部屋の中をさ迷う。

「そうか……それなら！」

さっとパックは一方の標的に銃口を向け、もう一度、引き金を引

いた。

「ぎゃあああああっ！」

と絶叫が上がる。

ビームの先には【大校母】がいた！

絶叫し、苦痛に悶え、【大校母】は巨体をどすんどすんと地響かせ、部屋の中を転げまわる。

シルバーは、ぽかんとになっていた。

その手が緩んだようだ。ミリイはシルバーの把握から逃れ、身を擦って地面に転がる。

さっとパックが近づき、手を伸ばして、ミリイを引き起こした。へろへろに向かって叫ぶ。

「今だ！ 逃げるぞっ！」

「うんっ」と、ミリイとへろへろは強く頷いた。

パックとミリイは手を握り合い、猛然とダッシュする。それを見たシルバーは追いかけようと走り出したが、その目の前に転げ回った【大校母】の肉塊が立ちはだかった。

苦痛に転げ回る【大校母】の肉塊が持ち上がる。

シルバーは「はっ」と慌てて口を開き、逃げようとする。だが、時すでに遅かった！

どすん、と【大校母】の肉塊が、シルバーの頭の上から押し掛かってきた！

「ぐわあっ！」

シルバーは押し潰された。

「やった！」

それを見たパックは、思わずガッツ・ポーズをとる。ミリィは早口で叱り付ける。

「逃げるって言ったのは、あんたでしょ！ さあ、早く！」

「わ、判った……」

混乱を後に、パックたちは逃走を続ける。

組織

「ここから先は、足下が悪い。気をつけ……」

男が言いかけた傍から、アルニは爪先を何かに引っ掛け、ずつてんどうと派手な転び方をする。

「痛い……！」と情けない声を上げ、腰を打ったのか、しきりに尻のあたりを気にしている。

「そんな靴を履いているからだ」

ちら、と男はアルニの靴を見て、そっぽを向いた。転んだ拍子にアルニのスカートが捲れ上がり、太股の付け根まで露わになっている。

アルニの履いている靴は、分厚い靴底の、まったく実用的とはいえない、ロング・ブーツである。男の批判に、アルニは唇を尖らせ噛みついた。

「いったい、いつまで歩かせるつもり？ この地下通路、どこまで続いているのよ？」

「もうすぐ着く」

男は手に持ったライトを振って答える。ライトの光芒が、通路の先を照らしている。

通路は途中から質感を変えていた。最初、潜り込んだところは、まだコンクリートの、平板な壁と床でできていたが、そのうちうねうねと曲がりくねった、自然の洞窟のような感じに変わっている。

しかし自然の洞窟とはいえ、岩ではなく、木の幹の内側に開いた洞うろのような材質になっている。

不意に男は、ライトのスイッチを切った。

たちまち押し寄せる暗闇に、アル二の心臓は冷たい恐怖に驚づかみにされる。「やめて！」と言いかけたが、通路の先がほんのり明るくなっているのに気付いた。男は、さつさと先へ歩いていった。ちよこちよことした小走りで、アル二は男の後へ続いていった。

ぬ！ と、男の行く手に一人の大男が姿を現す。通路の天井が大男には低すぎるのか、背を屈め、ぎろりと目を光らせる。

男と目が合い、大男は頷いて見せた。

「そいつか！ 監視システムに引つ掛かった娘というのは？」

大男の問いかけに、アル二を案内してきた男は頷き、答える。

「ああ、危なく町の？ キャッチャー？ に捕まるところだった。六番街の、隠し通路で彼女を」

男は、改めてアル二の名前を聞いていなかったことに気付いた様子だった。問いかけるような目付きで、じろじろ見る。

アル二は気分を害していた。どいつもこいつも、なーんであたしの名前を聞くという基本的な礼儀を、わきまえていないんだろう！

「アル二よ！」と答えると、男は淡々と続ける。

「そういう名前だそうだ。ともかく、危ないところで、おれがこのアル二を引つ張ってくることができた」

「そうか」と大男も平板な声で応える。アル二の演じた冒険も、この二人にとって、何ほどの意味も意義もない日常の一コマであるらしい。

アル二は軽く足踏みをして、苛々を表現する。

「それで？ あんたらは、なんて名前？ あたしをこれから、どうするつもり？」

畳み込むように尋ねると、大男のほうは「ぐずつ」と聞こえる笑い声を上げる。

「どうもこうもねえ……。おれはバングだ。こっちは仲間のルーサン。まあ、おれたちの名前なんぞは、どうでもいい。それよりあんた　アルニさんか……。どうやら、あんたは新規の原型らしいから、われわれの組織に登録して貰おう。おれたちはこの宙森で、すべての原型を宙森の？種族？から守る義務を負っている。つまり、おれたちの保護を得る代わりに、あんたが何をおれたちにしてくれるのか、考えないとな」

大男のバングの見透かすような視線に、アルニは戸惑った。あたしが何をできるか、ですって？

唐突にある想像が湧いて、アルニの頬に血が昇るのを感じる。

まさか、そんな……？

いきなり案内したほうの、ルーサンと呼ばれた男が、アルニの背中を「どん」と強く叩く。

「馬鹿！　何、変なこと考えているんだ！　おれたちは、そんな連中じゃないぞ！」

「な、な、な、何よ、そんなことって？」

アルニは、つい口走ってしまふ。妙な空気が流れる。

「おほん！」とバングは、わざとらしく咳払いをすると、手招きする。

「ともかく、登録手続きといこうや！」

通路を曲がると、そこは広々とした部屋になっていた。

優に五、六階分の深さに掘りぬかれ、吹き抜け状の通路が取り巻いている。部屋は集会場になっている様子で、何人もの原型の人々

が思い思いに座ったり、佇んでいたりして、和んだ雰囲気漂っている。

アルニは二人に案内され、壁に沿った回り階段を降りていく。アルニが降りていくと、その場にいた全員が見上げた。

老若男女、様々な年齢の人々が集っているが、共通しているのは隠しきれない疲労感と、押し殺した恐怖である。身なりは、どれもこれも襤褸寸前の着衣だ。一応、洗濯はしているようだが、元の色が判らなくなるほど草臥れ、あちこち継ぎが当たっている。

アルニの表情を読んだのか、ルーサンが話しかけた。

「この地下に、おれたち原型が隠れ住むようになって、既に十年になる……。もともと、宙森には数千人の原型がいたのだが、現在では、ここにいる百人たらずが、宙森の【大校母】も魔手から逃れてきた総てだ」

アルニの声は、つい囁き声になる。

「その……脳を摘出って、どういうこと？　なんで、原型の脳を抉り出す必要があるの？　本当に、そんな酷いことを、ここの子種族？　の人がしたの？」

ちら、とルーサンとバングが視線を合わせた。バングが重々しく答える。

「それについて、おれたちの首領であるサークから直に聞いたほうが早い。今からサークに会わせるから、従いてきな！」

バングは妙な目つきになり、意味ありげに囁く。ほんの少し、悪戯っぽい表情が浮かんでいるような……。

「サークに会っても、驚くなよ……と言っても無理だろうがな」
ルーサンも頷いた。

「まあな、無理なことは判ってるがな……」
「な、何よ……！」

二人の視線に、アルニは何だか厭な予感を覚えた。何がどうあっても、驚くまいとアルニは固く決意をする。

サーク

「きゃああああっ！」

首領のサークに面会したアルニは、思い切り悲鳴を上げていた。顎関節が外れんばかりに大口を開け、全身を硬直させて、力一杯の悲鳴を上げてしまう。

長々と悲鳴を上げたアルニは、くた！ と膝から力が抜け、その場にへたり込んでしまった。

やつぱり、驚いた！

これが驚かないでいられようか！ いや、絶対に無理！

サークを前に、アルニは、ぽかんと馬鹿のように口を開けていた。頭の中が真っ白になり、気絶寸前といってよかった。

その先に、サークがいた。宙森の原型の人々の指導者にして首領である、サークその人である。

「驚かせてしまったようだね」

サークは静かな声音でアルニに話しかける。声は部屋の中の小さなスピーカーから流れてくる。ごぼごぼという泡の音が、サークの身体を保護するタンクから聞こえていた。

サークの身体は透明なタンクに保護液に浸され、漂っていた。サークの全身に、生命を維持するためのチューブが差し込まれ、一刻も休むことのない監視装置が、生命を永らえさせている。

脳、脊髄、更には剥き出しの眼球、それがサークの総てである。本来の骨格、内臓、筋肉、皮膚などは、そこには存在しない。

脳から伸びた脊髄神経と、目に見えないほど細かな末梢神経が、

保護液の中にぶかぶかと浮いている。脳には何本もの導線が繋がれ、サークの意味を伝えるため、部屋にはスピーカーが備わっている。生きている脳のみ。それがサークの正体なのだった。

「あ、あ、あ、あんた……生きているのっ？ そんな状態で！」

アルニは、やっと声を上げることができた。

サークの身体を保護するタンクには、小さなディスプレイが付属している。そのディスプレイに、一人の男が映し出されている。

年齢は五十前か、四十半ばで、半白の剛い髪の毛と、日焼けした逞しい印象の男であった。そのディスプレイ内の男が頷く。男の口が動き、スピーカーから声が流れてきた。

「その通り、君の目の前のタンクで浮かんでいるのが、わたしの総てだ。このディスプレイに、脳に直結した仮想現実を作り出し、こうして見せ掛けの身体を映し出しているが、本来のわたしは、このタンクに生かされているだけなのだよ。このわたしは宙森の【大校母】の指図により、脳とそれに繋がる神経組織を摘出され、本来の自分の身体は廃棄されてしまった。あわや【大校母】の進める？ 楽園計画？ の一部品になるところを、仲間に救われ、こうして生きながらえている」

驚きの後には怒りが湧いてくる。

アルニの両目から、つ　と一筋の涙がこぼれ出た。

「どうして、こんな、酷いことをするの？」

「超空間ジェネレーターのためだ！ ジェネレーターを起動させるためには原型が必要だが【大校母】は原型の人々が勝手気儘に過ごすことを許さず、脳だけを摘出して、宇宙船の一部品としてしか存続を認めない。怖ろしいことに、摘出された脳の前頭葉部分を口ボ

トミー切除して、個人の意思というものさえ奪っているという話だ。完全に、我々原型を人間として認めないつもりらしい」

アル二の脳裏に、サークのようにぶかぶかとタンクに浮かび、宇宙船の超空間ジェネレーターに繋がれる原型の脳の姿が浮かんできた。

自分も、そうなる運命だったのだ！

「でも、宙森の？ 種族？ は、どうしてそんな酷いことに協力するの？ あたしを捕まえようとした連中は、別々の？ 種族？ だったけど」背後に立ってアル二とサークの遣り取りを見守っていたルーサンが答える。

「皆、【大校母】に操られているんだ。ボーラン人は全員そうだが、この宙森の【大校母】はボーラン人だけでなく、他の？ 種族？ の人間すら、自分の思い通りに動かせる能力を持つ」

「どうして」

その時、それまで席を外していたバングが息せき切って、その場に走りこんできた。両目が大きく見開かれ、表情には驚きが浮かんでいる。

「大変だ！ 町の様子が妙なことになっている！ 【大校母】の身に、なにか異変があったらしい！」

「何っ！」と、ルーサンが応じ、バングの後を追って、その場から離れる。アル二はどうしていいか分からず、立ち竦んだ。

「二人の後に従って行きなさい。わたしも、何があったのか知りた
い」

サークがスピーカーで話しかける。意味が判らず、アル二は首を傾げる。ディスプレイの中のサークは、にっこりと微笑んだ。

「大丈夫、わたしはここにいても、バングの報告は受け取れる。理由は、すぐ判るよ」

希望

バングが向かった先は、モニター・ルームだった。集会所の幾つかあるドアの一つにバングとルーサンが飛び込み、アルニも後に続いた。

部屋一杯に無数のディスプレイが並んでいる。大きい、小さい、形も様々で、古色蒼然とした平面ディスプレイすら混じっている。ディスプレイに映っているのは、宙森の商業区、住宅区の風景である。

微かな物音が頭上から聞こえ、アルニが顔を上げると、先に小さなディスプレイが接続された金属製のアームが下がってきている。ディスプレイにはサークの姿が映し出されていた。

「何が起きたのかね？」

ディスプレイの中のサークが話しかけてくる。アルニは理解した。つまりサークは、どこにいても、このような外部情報装置を介してこの地下組織で起きている総ての状況を把握しているのだらう。

アルニの表情を見て、サークは頷いた。

「その通りだ。わたしの本体は動けないが、こうして全員と話すことができる」

さつとバングがサークのディスプレイを仰ぎ、報告した。

「町に出ている？ 種族？ たちの様子が変です！ 何か、うるたえているような様子です」

映像が大写しになる。

カメラはやや小高い場所から狙っている様子で、町の広場のような所に、無数の？ 種族？ の男女が集まり、何か口々に騒ぎあっている。

る。皆、目的を失い、呆然となっているように見えた。おしなべて恐怖の表情を浮かべている。

ディスプレイ内のサークは眉を顰めた。

「まさしく【大校母】に、何か起きたに違いない!」

アルニはサークを見上げた。

「どうして、そんなことが言えるの?」

サークは丁寧に説明する。

「この宙森に住む? 種族? は【大校母】のコントロールを受けている。【大校母】は宙森の大气に自分のフェロモンを放出し、人間の耳に聞こえない超低周波による音声で指示を下している。わたしは、その事実を突き止め、なんとか対抗しようとして、原型を組織したのだ。どうやら【大校母】のフェロモンは、原型に対しては効果がないようだ。今は【大校母】の身に何か異変が起きて、フェロモンの放出が止まっているのかもしれない。だから? 種族? の連中は自分の行動に確信が持てず、ああやって無目的な行動をとっているのだろう」

サークがそこまで話したとき、モニターに見入っている一人が何かに驚いたように「あっ」と声を上げた。

サークは鋭く、叫びの方向へディスプレイを向けた。

「どうした?」

「? 大海? に連れ去られた二人組の原型が戻ってきます! 我々の感知できなかったシャトルに乗り込んでいるようで、今、スポークを格納庫へ向かっています!」

「救助できるか?」

サークの問いかけに、バングが叫んだ。

「おれが出向こう! すぐ救出部隊を組織して、そいつらを救助する! そいつらの映像が出せるか?」

要員は、しばらく目の前の装置を操作していた。

「シャトルの監視システムに割り込んで、あちらのカメラを生かします。今、割り込みに成功！ そっちのモニターに映します！」
モニターの画面が切り替わり、シャトルの内部だろうか、二人の若い男女と、一体の妙な形のロボットが狭い座席で犇めき合っている姿が映し出された。

アルニは少女の顔を見て「あら？」と呟いた。バングは不審そうな表情でアルニを見つめた。

「どうした？ 知っている相手か？」

アルニは頷いた。

「あたしがシルバーの【鉄槌】に乗り込んでいるとき、晩餐会があった、その時シルバーに招待された原型の女の子がいたわ。確か、ミリイって名前だった。あそこにいるのは、そのミリイよ！ あの娘、自分の宇宙艇を持っているんだって……」

「なんだって？ それじゃ、あの娘、宇宙船の操縦ができるのか？」

なぜか、サークは興奮しているようだった。バングを見て命令する。

「バング！ 何としてもあの原型の二人を救出するんだ！ 理由は判っているな？」

バングは大きく頷いた。

「判ってまさあ！ あいつらは、おれたちの希望の宇宙船ってわけですね？」

バングは大股に部屋を出て行く。アルニが好奇心に駆られて従いていくと、広間に立って大声で叫んだ。

「今から仲間の原型を助けに行くぞ！ 手の空いている奴は、一緒

に來い！」

バングの叫びに数人の原型が立ち上がった。この中では比較的氣力、体力とも充実しているようで、ほかの原型には見られない元氣があつた。

興奮して、勢い込んで場を出て行く彼らを見て、アルニは「どうしたんだらう？」と首を傾げる。

通信装置

時間は、少し戻る。

混乱の中、パックとミリイとヘロヘロの三人は【大校母】の巢の内部を盲滅法、遮二無二、右往左往と走り回っていた。

ともかく外へ出ようとしたのだが、なにしろ連れられた通路が迷路そのもので、二人はすぐ方向感覚を失ってしまった。ヘロヘロの記憶を利用して後戻りすればいい、という考えが浮かんだときは、すでに元の場所から遠く離れた所まで来ていた。

「臭え！ たまんないな……」

パックは鼻を押さえ目を細める。スカンクの奇襲を受けたような強烈な匂いで、目を開けているのも辛い。ミリイは頷き、手渡されたマスクを被った。

それに気付き、パックもマスクを被る。たちまち、匂いが消え、二人はほっと溜息をつく。

「なんで、こんなに匂うんだ」

「もしここが蟻塚そのものとしたら、蟻は溜め込んだ食物を醗酵させるって聞いたことがあるわ。ここでも同じように、食糧を醗酵させているのかもしれないわね」

ミリイは憶測を述べたが、あくまでうる覚えに過ぎない。本当にそうかは判らない。それでもパックは、ミリイの説明に納得した。

通路には時折、ボーラン人が通りすぎる。それらの姿を見るたび、パックとミリイは緊張したが、今では無視することを覚えた。

なぜなら、通路を歩くボーラン人も、パックとミリイに対し、ま
るっきりの無関心だったからである。

どうやら特別の命令が発せられない限り、ボーラン人はおのれの
使命だけに集中していて、巣穴に原型の人間が歩いていようと、他
の何かがいようと、お構いなしの様子だ。

その内に二人は、シャトルの乗り場らしい場所に行き当たった。

その場所だけは他の巣穴と違い、滑らかな壁と床でできていて、
照明も明るい。壁に空けられた穴から溝ができていて、その先に一
人乗りのシャトルが停止していた。

二人はシャトルを見て顔を見合わせた。

「どうする？」というパックの問いかけに、ミリイは頷く。

「乗り込みましょう。少なくとも、この巣穴からは出られるかもし
れないわ！」

実はこのシャトル、シルバーが【大校母】に面会するために利用
したものだったが、二人は無論それを知らない。

二人は一人乗りのシャトルに無理矢理どうにか身体を押し込んだ。
さらにへ口へ口が乗り込むので、厭がおうにも二人の身体は密着す
る。

ミリイもパックも、どちらかというとき小柄な体格なのだが、それ
でも一人乗りのシャトルは狭い。パックは目の前にあるボタンに気
付いた。これが発進ボタンなのだろう。腕を伸ばし、ボタンを押す。
途端にシャトルは動き出す。加速で、二人の身体はますます密着
する。

「ここから格納庫へ直行するのだろうか？」

パックの問いかけに、ミリイは首を振った。

「判らないわ。【呑竜】の繋留している格納庫に着けるかどうか……それに、どうせ【呑竜】には燃料がゼロだから……」

「そうだ！ 燃料がゼロになっていたんだ！」

パックは自分の頭をぼかりと叩いた。燃料がなければ、宇宙艇に辿り着いたとしても、どこへも行けない。

その時へロへロが声を上げた。

「通信装置に、何か入っているみたいだ」

「えっ」と、パックとミリイは声を上げる。目の前のコンソールに通信装置があり、その画面が輝き出した。

ディスプレイに一人の原型の男が姿を表した。半白の髪の毛に、日焼けした逞しい印象を与える中年の男である。

「わたしは、サーク。この宙森で、原型の人間の地下組織の総帥を務めている。君たちの苦境を知り、こうして接触することにした。君たちは、危険に曝されている！ どうやら【大校母】に何か起きたようだな？ よかったら、教えてくれないか。そちらで何が起きた？」

パックは答えた。

「おれは、パック。こっちはミリイ。で、このロボットは、へロへ口ってんだ。確かに【大校母】は、大変な状況になっているよ」

パックは【大校母】に神経衝撃銃のビームを当てたことを早口で説明した。パックの説明にサークは、にやりと笑い返した。

「それで分かった！ 宙森の総ての？ 種族？ たちに混乱が起きている。君たちは【大校母】が原型に何をしているか、知っているかね？」

ミリイが頷く。

「ええ、脳を摘出するって話でしょ。今でも信じられないわ」

サークは頷き返した。

「事実だ！　今まで何人もの原型が【大校母】に捕えられ、脳を摘出されて、個人の意思を奪われ、宇宙船の部品として利用されている。我々は原型の人々が発する特別な波動を感知するシステムを造り上げ、こうして外部からやってくる原型を探し出して救出することになっている。君たちのことも検出されたのだが？　大海？　に連れ去られたので、どうしようもなかった。どうやら君たちはハブへ向かっているようだから、こちらで救出部隊を組織することができる。シャトルが停止した先に我々の差し向けた部隊が待っているから、安心してもらいたい」

パックとミリイは顔を見合わせた。

「どうする？　あんなこと言ってるけど」

パックの言葉にミリイは眉を寄せた。画面を見つめ、ミリイは口を開く。

「あたしたちは、宇宙艇の燃料がなくて困っているの。救助は結構だけど、いつまでもあたしたち、この宙森に留まっているつもりはないわ！」

ミリイの答えにサークは微笑した。

「そちらがそのつもりなら、わたしは嬉しいよ。我々も君と同じ考えだ」

ミリイはぽかんと口を開ける。サークは真剣な表情になった。

「我々、宙森の原型は、この場所を脱出することが希望なんだ！　それには、君たちの協力が必要だ！」

サークの言葉に二人は目を丸くした。

警備員

「ちょっと変なとこ、触らないでよっ！　くすぐりたいじゃないの……」

「無理を言うな。おれだって、触りたくって触ってる訳じゃない。そっちこそ、もう少し身体を離してくれよ。暑苦しくてたまんねえぜ！」

「もう……二人とも、こんな狭いところで喧嘩しないで欲しいなあ……。あーあ、こんなことなら来るんじゃないかった！」

一人乗りのシャトルに、パック、ミリィ、ヘロヘロの三人が無理矢理ぎゅうぎゅう詰め込まれているので、どうしても二人の身体は密着する。ちよつとでも余裕を持たせようと身動きすると、手足があらぬところに潜り込む。

自分でも、どうしようもなく、二人はじつと唯々シャトルが目的地へ停止するのを願っているのみであった。

ディスプレイのサークは、同情するような、それでいて面白がっているような表情を浮かべていた。

「もうすぐの辛抱だ。あと二、三分でシャトルは到着する。こちらの探査で、そのシャトルの行き先は、秘密の通路に繋がっているよ。うだ。多分、【大校母】の手先が待っているだろうから、油断するな！」

パックは、ほっと安心した。

「本当か！　有り難え！」

身動きした拍子に、ずりっとミリィの身体が動き、どうしものか、

パックとミリーの頬がぴったり密着してしまう。

ミリーは真つ赤になった。ミリーの頬の火照りが直に感じられ、パックもまた頬に血が昇るのを感じていた。

「パック……あのね、あたし……こうしたくて、こういう姿勢になっている訳じゃないからね！ 誤解しないでね！」

ミリーは消え入りそうな声で囁く。

「分かつてる……」

パックも、ぶっきらぼうに答えるのが精一杯だ。

それから暫く、無言のときが流れた。

そのうち、シャトルの動きが徐々に減速するのを感じ始めた。目の前の計器の表示で速度を示す数値が下がっていき、遂にゼロになって、シャトルは停止した。

かぱつ、とシャトルのドアが開き、すかさずパックとミリーは、転がり落ちるように外へ飛び出す。

はあああつ！ と二人とも思い切り深呼吸を繰り返した。シャトル内にはちゃんと換気装置があったが、その狭さに二人は、息の詰まる思いをしていた。

「お前たち、誰の許可を貰ってシャトルに乗り込んできた？」

不意に怒声が響き渡り、パックは顔を上げた。視線の先に、ずんぐりとしたバルト人の警備員が立っている。全身、これ筋肉の塊りといった身体つきで、その目は油断なくパックたちを見つめていた。なるほど、こいつが【大校母】の手先って奴だな。

パックは立ち上がり、手にした武器を構えた。神経衝撃銃である。巢穴から、パックは忘れずに持って来たのだ。

バルト人はパックの手にした神経衝撃銃を見て、たじたと

た。顔色がさつと蒼白になる。神経衝撃銃の威力を存分に承知している表情である。

「へっ！」とパックは笑いかけてやる。ゆっくりと銃口を上げ、引き金に指が掛かっていることを示す。

「こいつにやられたら、死ぬことはないけど、どうなるか分かっているよな？」

「ぐ……！」と、バルト人は言葉もなく頷いた。ありありと恐怖の色が浮かんでいる。

？種族？に対して優位に立てたことに、パックは狂喜していた。一瞬、引き金を絞って目の前のバルト人を苦痛に悶えさせてやるのか、という危険な考えが脳裏をよぎる。

どやどやとバルト人の背後から数人の足音が聞こえてきた。

新手か！ とパックは緊張したが、現れたのは見るからに見すばらしい檻褌を纏った、数人の原型の男たちだった。先頭は原型にしては巨体を誇る大男だ。

大男は神経衝撃銃を構えるパックを見て、はっとなった。

「あんた、パックか？ で、そっちにいるのが、ミリイっていうお嬢ちゃんだな？」

ミリイは明らかに気分を害したようだった。

「お嬢ちゃんなんて、言わないで！ あたし、こう見えても二十三才なのよ！」

大男は唇をすぼめる。

「すまねえ！ つい……。ところで、おれたちはサークから、あんたらを保護するよう命令を受けている。一緒におれたちのところへ来て貰いてえ！」

サークという言葉に、バルト人は反応した。

「サーク！ その名前は知っているぞ。【大校母】さまの指名手配を受けている反逆者だな！」

「なにが反逆者だ！ 【大校母】がおれたち原型に何をしたか、知らんわけがないくせに……！」

大男は怒りの声を上げる。バルト人はパツクの構える銃口を見て黙り込んだ。

大男はパツクたちを見て顎をしゃくる。

「長居は無用だ！ とにかく、おれたちの組織に加わってくれ！ おれたちには、あんたらが必要なんだ！」

ミリイは頷く。

「そうね！ 長居は無用ってのは、賛成だわ。行きましょう」

パツクの腕を掴み、歩き出す。パツクはミリイに引っ張られる格好になった。それでも油断なく、バルト人に銃口を構えつつ、大男たちとともにその場を去っていく。

バルト人は、じっとその場を動かずにいた。

【弾頭】

「例の三人は、シャトル乗り場から逃走しました！ ご命令通り、こちらはわたし一人で警備に立ち、あいつらを通しましたが、これでよろしかったのでしょうか？」

映話装置の画面には、バルト人のやや憤懣した顔が映し出されている。むっつりとしたバルト人の顔つきが、さらなる押し殺した怒りに仮面のような表情を与えていた。

「それで結構だ！ あいつらは、こっちの思う通りの行動をとっている。総ては、こちらの想定範囲内だ。そのまま待機せよ！」

映話装置に向かい、シルバーは上機嫌に答える。画面のバルト人は無表情のまま、敬礼をして接続を切った。

「シルバー、妾には判りません。なぜ、あやつらを捕まえないのですか？ あの二人が秘密のシャトルを利用したことが判っているなら、すぐに向こうに警備員を増やして逮捕できるのに……」

シルバーの背後から【大校母】の疑いの声が上がる。シルバーは振り返った。

豪華な天蓋付きのベッドに【大校母】の巨体が、どつてりと横たわっている。パツクの神経衝撃銃による苦痛から、ようやく回復したが、それでもショックは酷かったと見えて【大校母】の周りには、ほっそりとした身体つきの数人のボーラン人が介護にあたっている。肌の汗を拭ったり、額に冷たいタオルを載せたり、甲斐甲斐しく世話を続けていた。

そんな【大校母】を見て、シルバーは、にやりと笑って見せた。

「おれの予想が正しければ、奴らは？伝説の星？地球へ向かう行動をとるはずだ！ 今度という今度は、絶対に逃さない自信がある。まあ、見てくれ。準備は万全、仕上げをご贔じろ……だ！」

【大校母】は不審気な表情になった。

「なぜ、そのように？地球？に固執なさるのです？ 妾はフリント教授の発見した惑星の星図があればいいのに……。それに、今度は逃さないと仰つても、以前ミリイという原型の小娘、シュレーディンガー航法というものを使って、あなたの【鉄槌】の追及を躲したそうではありませぬか。また、その航法を使ったら、どうなさいます？」

シルバーは笑い声を立てた。轟くような、あるいは地の底から響くような低い笑い声。

「心配ない！ 今度はミリイの奴、シュレーディンガー航法を使えない訳があるのさ！ 第一、【呑竜】は燃料がゼロだ！ あいつら、別の宇宙船を利用するしかない」

【大校母】は首を捻った。

「その宇宙船とは？」

シルバーは頷いた。

「おれの宇宙巡洋艦【弾頭】だ！」

協力

原型の指導者、サークとの面会に、パックとミリイは衝撃を受けていた。さすがに気絶はしなかったが、こみ上げる悲鳴を堪えるのに必死であった。

ところが、ロボットのヘロヘロは、ロボットのくせに早々と気絶し、白目を剥いて引っくり返っている。「僕は気絶している！」と主張するつもりなのか、頭のホイップ・アンテナの先端からホログラフィーで、くるくる回転する星のマークが五個、古代オリンピック・マークのような輪を描いていた。

「信じられない……わ！」

唇を真つ青にさせながら、それでもミリイは気丈さを見せた。

「でも、どうしてその姿を曝すの？ 仮想現実なら、その姿を見せずに、人に対応できるでしょう？」

画面のサークは生真面目な顔つきのまま、無言で頷いた。その無言に、パックは「そうか！」と合点する。

「あんた、その姿を見せれば【大校母】がやっている酷い行為の証明になると思っっているんだな！ そりゃそうだ！ あんたの姿を見れば、どんな馬鹿でも【大校母】には捕まりたくないと思うしな」

サークは再び頷き、口を開いた。

「そうだ！ わたしだって、自分がこういう目に遭うまでは信じられなかった。噂では聞いていたが、まさかという気持ちもあった。その油断が、わたしを【大校母】の手に落とさせ、こんな姿にさせた原因でもある。わたしは二度と、他の原型をこのような無残な姿には断固させたくない！」

サークの言葉によって、その場にいたパックとミリイ、それに、迎えに来たバング、ルーサン、なぜかその場に立っているアル二の間を、肅然たる静寂が支配する。

と、何かを思い出したように、ルーサンがサークに向かって口を開く。

「サーク、それより、例の計画のことを……」

画面のサークは「おおっ！」と叫び、苦笑いをした。

「失礼……！ つい、この姿になったときのことを思い出して、われを忘れてしまった。わたしのこの姿を見れば分かるだろうが、我々原型は、ここ宙森に未練は一欠けらも持ち合わせていない！一刻も早くここから脱出することで、全員の意味が統一されている。しかし、今までは、その手段が皆無だった……」

パックは首を捻った。

「どうして……？ だって、宇宙船がやってくれば、その船長に頼んで……。ああっ、そうか！ うっかり、そんな真似をすれば【大校母】の手に捕まっちゃう！」

サークは苦い顔を見せた。

「そうだ。我々は格納庫に姿を見せることすらできない。君らが燃料補給の際、甲板員に妙な言いがかりをつけられたのは、【大校母】の差し金だろう。だが、今は【大校母】の統制が緩んでいるチャンスだ！今のうちに格納庫の宇宙船を乗っ取り、脱出しようというのだ。それには、君らの強力な協力が必要だ」

パックとミリイは顔を見合わせる。

「おれたちの協力？ おれたちが、何をできるっていうんだい？」

ルーサンが、ぼそりと呟いた。

「あんなら、宇宙船の操縦ができるんだろっ?」

？伝説の星？

意外な言葉に、パックは笑い出す。

「そりゃそうさ！ そужゃなくちゃ【呑竜】で、この宙森くんだりになど絶対やって来ないよ」

バングは目を光らせた。

「おれたち、この宙森の原型の唯一人、宇宙船の操縦ができる者はいない」

「えっ」と、パックとミリイは声を上げる。

バングとルーサンは揃って頷いて見せた。

ルーサンが唇を皮肉に歪めた。

「そうなんだ。ここにいる原型の誰も、宇宙船操縦の方法を知らないんだ。判るだろう？ 元々、原型は、宇宙船に乗ろうと思えば、すぐ席が取れる。自分で宇宙船を操縦するなど、考えたこともないんだ」

パックは黙り込んだ。

そうだ、原型は普通なら、自分で宇宙船を操縦しようとは思わない。パックはサークに向き直り、尋ねた。

「そうか、それで、おれたちの協力が必要なんだな。宇宙船のパイロットとして」

画面のサークは破顔一笑した。

「そうだ！ どうか、我々のために、宇宙船のパイロットになってくれ！」

パックは、どん、と自分の胸を叩く。

「任せろ！ 全部を纏めて、面倒を見るぜ！」

ミリイは慌てて声を掛ける。

「パック……！ 【呑竜】の燃料はゼロなのよ！ どうするつもりなのよ」

ミリイの言葉にパックはショボンとなった。

「そうか……」

ミリイはおっかぶせる。

「それに【呑竜】に百名もの人たちを詰め込むことなんて、とうてい無理だわ。【呑竜】は小型宇宙艇でしかないし」

すると、それまで黙っていたアルニが声を上げた。

「それなら大丈夫よ！ シルバーの【弾頭】なら、充分な大きさがあるわ！ あれなら、百名くらい余裕よ！」

ミリイは眉を顰めた。

「あなたは？」

アルニは、ぺろりと舌を出す。

「いつけない！ あたし、アルニ。実はシルバーの【鉄槌】で、あんなを見たことがあるの。ほら、あの晩餐会。あんな、ワインをたらふく飲んで、ぐでんぐでんに酔っ払ったでしょう？」

アルニの暴露に、ミリイは真っ赤になった。

「シルバーがあんたを追っかけて【弾頭】に乗り込んだとき、あたしを連れてきたの。超空間ジェネレーターの起動係としてね。だから、あたしなら【弾頭】の外部ハッチの封鎖を解除できる。まだシルバーが【弾頭】に戻っていないければ、あたしの個人指標を取り消してはいないはずだから、開けるわ！」

バングの唇がにんまりと横に広がった。

「決まったな！ 早速、全員を率いて【弾頭】という宇宙艇のある格納庫へ出向こう！」

ミリイが呟く。

「それで、どこへ行くつもり？」

ミリーの投げかけた疑問に、再び全員が黙り込んだ。
沈黙を切り裂いたのはパックの叫びだった。

「決まってる！ フリント教授の？伝説の星？だ！」

ミリーの目が見開かれる。

「パック……」

パックは勢いづいてミリーに迫る。

「なあ！ 行こうぜ！ ここの原型の人たちにも知って貰いたい。

フリント教授は原型の人たちのために？伝説の星？……つまり、地球を見つけたってことだ！ おれは知りたい。地球の秘密は何か？

そして、おれたち原型がどんな重要な役割を果たすのか？ ミリー、君は知りたくないのか？」

サークが画面の中で「ほっ」と溜息をついた。

「フリント教授か！ その名前は、わたしも耳にしている。もし教授が、そのような重要な秘密を？伝説の星？に託したのなら、わたしも知りたい。いや、知るべきなのではないだろうか？」

蒼白だったミリーの頬に徐々に赤みが戻ってくる。表情に決意が表れる。

「うん」と一つ頷いた。

「判ったわ！ あたしだって、地球のことは知りたい！」

それまで気持ちよく気絶していたへろへろに、きつと向き直る。

「へろへろ！ 起きなさいよっ！」

へろへろは仰向けになったまま、目をぱちくりさせた。ぴよこんと起き上がり、目を擦る。

「ん？ な、何だ？」

ミリーはへろへろに鋭く声を掛けた。

「へろへろ！ 時が来たのよ！ 今こそ、お祖父ちゃんの星図を開

くときが……。あんたの記憶装置に隠した、データを開示させるから、しゃんとしなさいっ！」

ミリィの命令に、へろへろはぴょんと全身を硬直させた。

格納庫

そろり、と物陰から顔を出し、パックとミリイは広々とした格納庫を見渡した。

誰もいない。

いつもなら、格納庫には数え切れないほどの要員や、来客、離着陸する宇宙艇など、ひと時も休まない喧騒が渦を巻いているはずだが、今は森閑として静まりかえっている。

ただ、天井から投げかけられている照明だけが、寒々とした光を灯していた。その格納庫の床に、一隻の宇宙船が停泊している。

楔形の、見るからに高性能な巡洋艦である。巨大なジェネレーターが船体のほぼ、半分を占め、無反動スラスターの砲列が、この宇宙船の性能を現している。

パックは背後から覗き込んでいるアルニに向け、巡洋艦を指差して声を掛けた。

「あれがそつか？」

アルニは無言で頷く。顔色は蒼白で、極度の緊張に目の瞳孔が黒々と開いているのが判る。

パックは思い切って首を突き出した。

「誰もいない。空っぽだ……」

呟く。ミリイがパックに囁いた。

「信じられないわ。お誂え向き過ぎる！」

言外に「畏ではないか？」という含みがある。パックも同感で、頷いた。

「どうする？」

パックは背後に付き従っている宙森の原型の人々を振り返った。皆、檻褸を纏い、今にも宙森の【大校母】の手先が現れるものと、覚悟を決めた恐怖の表情を浮かべていた。

その中に指導者サークの身体を納めた透明なタンクを守る一団があった。

大柄な巨人とっていい体格のバングと、いつも陰気な表情を浮かべているルーサンが、タンクを運ぶための斥力プレート筏を守っている。タンクには生命維持装置が繋がれ、一瞬も休まず、内部のサークの命を見守っていた。

ごくり、とバングが唾を飲み込む。その顔には、ふつふつと脂汗が浮かんでいた。

「ここまで来たんだ！ こうなったら、迷っている暇は一切ねえ……。行こうぜ！」

パックは大きく頷いた。隣のアルニに顔を向け叫んだ。

「行くぞ！」

ぱつと飛び出した。慌ててアルニが従う。

ちよこちよことした小走りで、できる限り足音を忍ばせている。まるで盗人のようだ……とパックは思ったが、今からすることは、その盗人そのものだ、と、妙な箇所で皮肉な可笑しみが湧いてきた。なにしろ、宇宙船泥棒なのだ。

先頭を走るパックとアルニの背後に、ミリイ、ヘロヘロ、それに宙森の原型の全員、およそ百名が、そろそろと列を作った。

巡洋艦【弾頭】のハッチに、アルニが辿り着き、素早くハッチを開くスイッチに手を掛ける。

音もなく【弾頭】のハッチは開いた。

「開いたわ！」

アルニは喜びの声を上げ、真っ先に艦内に飛び込んだ。バングとルーサンがサークの斥力プレート筏を運び込む。その後に宙森の原型の人々が続いた。パツクとミリイはハッチの側で油断なく、あたりを見張っていた。

へろへろは艦内に入ろうかどうしようか、迷っている様子だ。ちらちらとミリイを見上げ、片足をハッチに掛けている。

ようやく半分ほどが乗り込んだ時、格納庫に大声が響き渡った。「やっぱり、こんなことじゃないかと思っていたぜ！ お前ら、その宇宙船を、どうするつもりだ？」

バンク

格納庫の入口付近から、警備員の制服を着た数人のバルト人の一団が姿を表した。

先頭に立つのは、パックとミリイが出会った、秘密の通路の警備員をしていた男だ。男の顔には「してやったり！」という表情が浮かび、残忍な復讐心がてらてらとした赤みを帯びさせている。

「そいつはシルバー船長の持ち物だ！ お前たちに手を触れさせるわけにはいかねえ！」

パックは、さつと神経衝撃銃を構え叫ぶ。

「すつこんでろ！ この銃が見えないのか？」

「おおっと……」とバルト人は踏鞴を踏む。

にやり、と笑顔が浮かんだ。

腰の所に巻いたベルトのバックルに手を掛けた。

と、バルト人の全身を、輝く薄い膜が包む。

「これが判るか？ 察しの通り、空間歪曲バリアーさ！ あの時これを装備していれば、お前の神経衝撃銃など恐れることはなかったよ。さあ、撃つて見ろ！」

他のバルト人たちも、同じように全身がバリアーに包まれた。まだ船内に入っていない原型の中から、恐怖の叫び声が上がる。

パックは引き金に指を掛けた。

銃口から神経衝撃ビームが進り、バルト人のバリアーにぶち当たった！

が、バリアーの表面がぱちぱちいうだけで、バルト人は平気な顔をしている。パックは唇を噛みしめ、手にした銃を投げ捨てた。がちゃん、と大袈裟な音を立て、神経衝撃銃は格納庫の床に転がった。

それを見て、バルト人は高らかな笑い声を上げる。

「それでお終いか？ それじゃ今度は、こっちからだ！」

バルト人もまた、神経衝撃銃を手にしていた！

細い、神経衝撃ビームがまだ船内に入っていない原型の人々に襲い掛かる。ビームが素早く人々の中を薙ぎ、次々に悲鳴が上がった。バルト人の警備員たちは、ビームを次々と繰り出しながら、大股に近づいてきた。

それを見て、ヘロヘロは「ひえっ」と悲鳴を上げながら、船内に駆け込んだ。

悲鳴を聞きつけ、バングがハッチから顔を出す。

一目で状況を見て取り、その顔に怒りが差し上った。ハッチの近くにいるパックとミリィに早口で命令する。

「お前たち、なにボヤボヤしてるんだ？ さっさと中へ入れ。お前たちがいなければ、こいつら逃げることはできねえんだ！」

逡巡するパックとミリィの襟首をむんずと掴み上げ、物凄い臂力で【弾頭】のハッチへ投げ込む。

「バング！」

パックは叫んだ。バングはパックたちが船内に入ったのを確認すると、残りの人々を無理矢理ぐいぐい押し込み、なんとハッチを外から、ばたんと大きな音を立て閉めてしまった。

始動

あとには、バングだけが残される。バングは背中ではッチを押し、外から開かないようにしていた。

パックはハッチの覗き穴から状況を見て取り、どんどんと何度も内側から叩く。

「バング、何やってんだ！ お前こそ、なんで入らない？」

「早く宇宙船を！」

バングはハッチの向こうから叫ぶ。

叫ぶや否や、バングは警備員たちの中に突っ込んだ！

警備員たちは「おっ！」と叫ぶと、銃口の狙いをバング一人につけた。

一斉にビームが放たれる。

バング一人の身体に、ビームが吸い込まれた。

「ぐああああっ！」

バングは声を限りに咆哮した！ 苦痛に全身が痙攣する。

勝利の色がバルト人の顔にのぼる。

だが、バングは苦痛に耐えながら、バルト人に迫り、腕を振り上げ、拳を最初に目に付いた男に叩き込む！

「ぐえっ」という悲鳴をあげ、バルト人の一人が吹っ飛ぶ。残りのバルト人の間にさっと緊張が走った。

バングは再び叫んだ。

「早く！ 何してやがるっ！」

それを見守っていたパックの肩を、ぐいつと掴んだ手があった。ふり返ると、ルーサンの悲痛な顔があった。

「パック、頼む！ 宇宙船を動かしてくれ！」

「だ、だけど……」

パックの抗議にルーサンは首を振った。

「時間がないんだ！」

叫ぶなり、手を伸ばしてパックの肩を掴んだままぐいぐいと操縦席へ引つ張っていく。操縦席にはミリイが座っている。

ルーサンはパックを強引に席に座らせた。操縦席の窓から、バングが孤軍奮闘しているのが見えていた。ビームの集中砲火を浴びながら、バングは当たるを幸い、獅子奮迅の働きで暴れまわっている。たった一度、それも掠っただけで死ぬような苦痛を味わう神経衝撃ビームを、さっきからまともに、それも何本も浴びているのに、バングは信じられないほどの活躍を見せている。

「パック！ さあ、この宇宙船を動かしてくれ！」

ルーサンが叫ぶ。

パックはバングを見た。

とうとうバングは、ぼったりと格納庫の床に大の字に倒れこむ。びくびくと全身が痙攣している。警備員たちは念のためか、気絶したバングの身体にビームを注ぎ込んだ。ビームが当たるたび、バングの意識を失った手足が、がくがくと壊れた操り人形のように跳ねている。

ひと言「糞っ！」と叫ぶと、パックはぐいつ、とエンジンの始動ボタンを捻った。

ひひひひひん……と、悲鳴のようなエンジンの響きが船内に満ちた。その音に、警備員が「はっ」と顔を仰いだ。

もう一度「畜生っ！」と叫び、パックは宇宙艇【弾頭】を浮かび

上がらせる。

「逃がすなっ！」

叫んで警備員は、それまで手にしていた神経衝撃銃から、熱線銃に持ち替えた。腰だめに【弾頭】の船腹を目がけ、熱線銃のビームを当てる。

ばちばちちっ！ と【弾頭】の船体が火花を散らした。攻撃をまるで意に介せずに【弾頭】は格納庫から飛び出していく。

太陽系

【弾頭】の艦内には、沈黙が支配していた。皆、押し黙り、目を落としてバングのことを考えている。

原型の指導者、サークもまた画面では黙り込み、無表情を保っていたが、脳だけの身体を守るタンクの溶液には、ごぼごぼと大量の気泡が湧いて、内心の動揺を表している。

船窓からは、超空間特有の、見る者の魂をもぎ取っていきそうな奇妙な景観が広がっている。目をぎゅつと瞑ったとき、網膜に映し出される斑模様、というのが、最も近い表現だ。

目を凝らしても、斑模様をはつきりと見定めることはできない。かつて、この空間を記録しようと、あらゆる試みが為されたことがあったが、再生してみるとただの真っ暗闇が映し出されているだけだった。どうやら、この眺めは、人間の心の中にしか見えないものらしい。

シルバーから奪った【弾頭】は、巡洋艦クラスの宇宙軍艦である。本来、操艦作業は数百人で行わなければならないのだが、今は大部分の作業を自動システムに任せている。戦闘をするのではないので、それでも平気なのだ。

宙森から脱出した原型の人々は、始めて目にする巡洋艦の内部の眺めに、ぽかんと口を開け、ただただ感嘆していた。

戦艦という名称から、もっと無愛想な機能一点張りの艦内を想像していたようだ。しかし【弾頭】の内部は、戦艦というより、豪華客船のような優美なデザインを採用していた。コンソール、各種ディスプレイ、照明など、ほとんどが曲線を基調としていて、その色

合いも、落ち着いた、アイボリーと臙脂色を主としていた。

コンソールの計器に目を落としていたミリイが顔を上げた。隣に座るパックに声を掛ける。

「もうすぐ超空間が出るわ。そうしたら、目的の太陽系の外側に出現するはずよ」

ミリイの言葉にパックは「うん」と頷いただけだった。

考えは宙森を脱出した最後の場面に戻っていく。どうしても、たった一人、戦って倒れこむバングの姿を脳裏から消し去ることができない。

パックの肩をぽん、と叩いた手があった。

振り向くとルーサンの顔がある。ルーサンは無言で頷いてみせる。ルーサンの目は「しかたのないことだ」と言っている。

パックは息を吸い込み、操舵室を見渡した。原型たちの不安そうな顔が目飛び込んでくる。

パックは立ち上がった。

何事か、と原型たちがパックを見守る。

パックは口を開いた。

「もうすぐ超空間が出る！ そうしたら、地球がある太陽系だ！」
原型たちに無言のざわめきが走った。パックは船窓に顔を向けた。

超空間が開き、そこに太陽が正面に見えていた。

距離があるので、ちっばけな、ほとんど背後の星空に紛れ込んでしまいそうであるが、確かにそこには、他に見誤りようのない、一

つの星が光っている。

「あれが、地球の太陽だ！
パックは叫んだ。」

？樂園計画？

「やれやれ、何とかうまく脱出してくれたな。まさか、あんなところで、原型の人間が大立ち回りを演ずるとは思っていなかったから、慌てたぞ」

含み笑いをしてシルバーは呟いた。

宙森の、中央管理センターである。場所はハブにあり、ここも宙森の他の部分と同じく、樹木がふんだんに使われている。全体の構成は、シルバーの戦艦【鉄槌】と似ている。

【大校母】が、センターの特別に詔えられた玉座に巨体を横たえている。こんなときでも【大校母】の巨体から時々、ボーラン人の赤ん坊が排出される。その度に、下働きらしきボーラン人が受け取り、大急ぎで育児室へ運んでいく。

また一人を産み落とした【大校母】は、ほっと溜息をついた。気だるそうにシルバーに尋ねる。

「シルバー、そなたは自信満々ですが、本当に上手く行くのですか？ あの方らは、超空間に消えてしまいましたぞ」

シルバーはぐい、と顎を上げ、傲然と話しかける。

「心配ない！ 何のためにわざわざ、警備員たちを差し向けたと思うのだ。あれがなければ、奴らは完全に罠だと思って、おれたちの思う通りに動いてくれないのだぞ。もっとも、ミリィはすでに勘付いているだろうがな。しかし百人もの仲間がいるんだ。そうそう、危ない橋を渡る訳にはいかん。あいつらの向かった先は、必ずフロント教授の？伝説の星？地球に決まっている！」

手近のコンソールのディスプレイに、一連の空間座標が表示され

ていた。シルバーは座標を、ぎらつく視線で睨みつける。

「これが？伝説の星？地球の座標か……！」

シルバーの背後から【大校母】が話しかける。

「それがどうして、求める星の座標であると確信できるのです？」

シルバーは、うんざりした声を上げた。

「説明したろう！ おれの【弾頭】には、おれだけしか開くことのできない秘密回線が仕掛けられているのだ。そいつをここから起動させ、向こうの航法システムに入力された座標を送信させた。奴らがおれの【弾頭】をまんまと奪ってくれたから、こちらから密かに操作できた。向こうは総て、おれの手の平で踊っている、という訳さ！」

シルバーの口調は得意げなものに変わる。

「百人の原型の仲間が、ミリィの行動を縛っている！ あんなに人間が大勢いては、シュレーディングー航法も使えまい！ シュレーディングー航法を使う人間は、十人以下でなければ不確定性原理が働いて、宇宙船は確率の海に消えてしまう！」

シルバーの長広舌に【大校母】は肩を竦めた。

「ともかく、その座標の星へ向かいましょう。そなたの言うとおり、本当にそこに？伝説の星？があるのなら、で、それが地球なら、求める秘密を探しましょう。しかし……」

【大校母】の瞳が厳しい光を湛えた。

「その星にフリント教授の秘密が隠されていなければ、妾はそなたを許しませぬぞ！ 妾の？楽園計画？に必要な原型の人間を、わざと逃がしてしまうのですからね！ あれだけ大勢の人数を集めるのに、またどれだけの時間が掛かるか、考えたことがあるのですか？」

シルバーは「ふん」と小馬鹿にしたように鼻を鳴らす。
「その？楽園計画？ってのは何だ？ 初めて聞く話だが」

【大校母】の顔に満足げな笑顔が浮かぶ。

「教えて進ぜましょう。妾は宇宙の秘密を解き明かしたのです！
超空間ジェネレーターの秘密も！ そのために、大量の原型の脳が
必要なのです」

「何いつ？」

シルバーは驚きの声を上げた。

月

「どこにあるんだ、地球は？」

操縦席でパックは不機嫌にミリイに向かって叫んだ。ミリイは副操縦席で青ざめた顔を、目の前の計器に向けている。

コンソールの無数の計器は、現在【弾頭】が停船している宇宙空間のありとあらゆる数値を示していたが、そこに地球を思わせる惑星は、影も形も見当たらなかった。

へロへロに隠したデータによると、主星からこの距離の公転面には、居住可能な惑星が存在しなければならない。しかし今、パックとミリイが見ている空間には、直径三五〇〇キロに僅かに足りない岩石の固まりが浮かんでいるだけだった。

この大きさでは居住可能となる大気を保持する引力は弱く、惑星の表面は、ほぼ完全な真空である。

へロへロのデータによると、地球は直径一三〇〇〇キロと少し、表面重力加速度は、きっかり一G。大気の主成分は七十五パーセントの窒素と、二十数パーセントの酸素でなければならない。

目の前に浮かぶ星を見ているミリイの目が、大きく見開かれた。

「これは……もしかすると！」

ぐるりとパックに向き直ると、興奮した口ぶりで話し出す。

「これは？月？よ！ 地球の周りを回っていた衛星よ！ あれは惑星ではなく、月なんだわ！」

ミリイの意外な言葉に、パックはあんどりと口を開けた。

「まさか！ だって、あの大きさだぜ！ 地球の大きさから考えて

みるよ。データによると地球はあの惑星の四倍ほどの直径になる。つまり、母惑星と衛星の大きさの比は、四対一ってことになる。そんな筈棒な対比の衛星なんて、聞いたことない！」

すると、それまで黙りこくっていたサークがディスプレイの中で口を開いた。

「地球にはひどく大きな衛星があった、という伝説は、わたしも聞いている。地球には色々な伝説が語られているが、巨大な衛星もその一つだ。今、目の前にあるのは、それかもしれない」

パックは頭を振り、呟く。

「それじゃあ、肝心の地球は、どこへ行ったんだ？ なぜ、月しかないんだ？」

へロへロが遠慮がちに、口を挟みこんだ。

「あのねえ……、さつきから、あの 月か あそこから、なにかビーコンのようなものが送信されているんだけど」

へロへロの言葉に、全員が「何だと！」とばかりに視線を集中させた。不意に注目を浴び、それが嬉しいのか、へロへロの口許に「してやったり」の表情が浮かぶ。

パックはミリイを見た。ミリイは強く頷く。

「行きましょう！」

全員が賛成のようだった。

パックは手早くビーコンの発信源を確認すると、コースを算定する。操縦桿を握りしめ、ぐっと前へと倒した。

巡洋艦【弾頭】は、月へと針路を取った。

座標

空間に亀裂が生まれ、巨大な物体が通常空間に出現する。円環部分に四本のスポークを持った宇宙ステーションである。

宙森だった。

内部に数十万人の住民を抱え、それ自体一つの世界と形容している巨大な物体が、なんと自力航行を成し遂げ、超空間ジェネレーターにより、ワープして来たのである。

ハブの部分にある中央管理センターの、航法システムの座席に腰を下ろして、シルバーは前方を見つめている。

そこには3Dモニターが浮かび、新たな宇宙空間の眺めを映し出していた。真つ暗な闇に散らばる星々の正面に、鋭く深紅に輝く一つの太陽が見えている。地球の太陽である。

シルバーは感嘆の声を上げていた。

「宇宙ステーションもろとも、超空間ワープをするとは魂消たものだ！」

シルバーの背後の玉座から【大校母】が冷静な声で応じた。

「そなたの手に入れた座標が、ここです。さあ、シルバー、地球はどこですか？」

シルバーは、つかつかと空間分析班のデスクに近寄り、コンソールの計器を操作していた要員に声をかけた。

「質量探知装置で、この太陽系の惑星を探し出すことはできるな？」計器を操作していた？種族？は昂然と頷く。表情にやや侮蔑感が浮かんでいた。シルバーの念押しに、気分を害したのだろう。その

表情を見て、シルバーは「ここが自分の宇宙戦艦【鉄槌】の艦橋なら」と思った。部下にこのような顔つきなど、金輪際させたことはないのである。

素早い手つきで、要員はディスプレイに太陽系を表示させた。真ん中に太陽である大きな円が浮かび、その周囲に幾つかの惑星が表示されている。シルバーは手に入れたデータを要員に示した。が、要員は眉を顰め、シルバーを見上げる。

「その座標には、居住可能な惑星は存在しません！ あるのは直径三五〇〇キロほどの、大気を持たない岩の固まりです」

「まさかっ！」

シルバーは珍しくうろたえていた。もしシルバーが普通の皮膚を持つ人間だったら、その顔がさつと青ざめていたことだろう。しかし、シルバーは表情を変えず、ただ声を鋭くさせただけだった。

「見間違いではないのか？」

要員は呆れ顔になった。

「いいえ！ 計器は正常、わたしの操作も間違いはありません。あなたの仰った座標に、居住可能な惑星は存在しません！」

皮肉な笑みが浮かぶ。

「つまり、地球なる惑星は、存在しないのです」

「シルバー……」

【大校母】が怒りの声を上げた。

「どうするのです！ そなたの地球はどこにある、と尋ねているのですよ！ さあ、今すぐ答えなさい。さもなければ……」

シルバーは要員の背後からディスプレイをじっと見つめた。次に命令するシルバーの声には、動揺など微塵も感じさせない。

「では、他に居住可能な惑星はないのか？」

「ありません！ この太陽系には、居住可能な大気を持った惑星は存在しません」

要員は間髪を入れずに返答をする。シルバーは、ぎゅっと拳を固める。これだけが、シルバーの焦りを唯一、表していた。

シルバーは平坦な声で命令する。

「おれの【鉄槌】は、どこにいる？ 【鉄槌】が超空間から転移したてなら、まだ空間にその航跡が残されている。それなら探知できるはずだな」

要員は微かに恐怖の表情を浮かべていた。見上げるシルバーの顔つきに、抑えきれない怒りを認めたのだ。慌てて手元の計器を操作して報告する。

「それなら、判ります。さっき報告した、大気ゼロの岩の固まりに向かっています」

「ふむ」とシルバーは小さく頷く。【大校母】を振り返り、答えた。「【弾頭】の航跡を辿る。ともかく、フリント教授の座標は間違っていないはずだ。これには、何か謎がある。それを解き明かすまで、しばらく待つてくれ」

【大校母】は悠然と頷いた。

「待ちましょう。しかし、いつまでも待てませんよ」

「判つてゐるさ！」

シルバーは吐き捨てるように答える。怒りを堪えるのが難しいほどだ。もしここがシルバーの【鉄槌】だったら、今頃憤怒の咆哮を

上げ、当たり前構わず暴れまわっているところだった。

入り口

予想通り、月の表面には生命の欠片も見当たらず、荒涼とした岩の眺望が広がっているだけだった。

淡々とした眺めに、パックはついに欠伸を漏らしていた。

「どこまでも、おんなじ眺めだなあ！ 右を見ても、左を見ても、岩、岩ばかり……。なーんにも変わったところなんか、ありゃない……」

「そうでもないわ」

隣のミリイが前方を見つめ、ぐいとはかりに身を乗り出す。腕を伸ばし、指さす。

「あれを見て御覧なさいよ」

「何だ？」

パックはミリイの指差した方向を見た。

平坦な岩の荒野に、ぽつんと小さく何かが太陽の光を反射している。反射の具合から推測して、金属製のようだ。へろへろが手元のコンソールを操作し、モニターに映し出す。

幾つかの機械の残骸が残されていた。

四角張った台座に、針金細工のような脚がついた原始的な宇宙船の一部分。平原に立てられた一本の旗。それらは真空の中、頼りなげに地面に長い影を落としていた。

「あそこに着陸してみるか……」

パックが操縦桿を握りしめたその時、出し抜けに艦内スピーカーを通して、命令口調の声が聞こえてきた。その声は、男とも女ともつかない中性的なものだった。

「それ以上の接近を禁じる！　ここは人類の遺産であり、未来永劫に亘って保存されるべき、聖なる場所なのである！」

ついで【弾頭】の艦体が、がくんと宇宙空間の一点に固定された。パックは瞬間的に、これが牽引ビームによるものであることを悟っていた。

その場にいた原型の人々の間から、恐怖の叫び声が上がっていた。パックは怒りをこめ、立ち上がった。スピーカーを見上げ、怒鳴る。

「誰だ！　なぜ禁じられた場所だなんて言っただ？　ビーコンを発信していたのは、あんたじゃないのか？」

声がまた返ってくる。今度は先ほどのような高圧的な調子はなく、穏やかと聞いていい声音だった。

「失礼した……。そちらが強引に着陸をしようとしたので、非常手段を採らざるを得なかった。いかにもビーコンを送信しているのはこちらだ。あなたがたは遙々、ここまで来られたのだから教授の客人と考えていいのだろうな？」

ミリイが叫んだ。

「それ、フリント教授のこと？」

「そうだ。ここはフリント教授の秘密を隠した場所である。今、入り口を開ける。そこから進入してもらいたい」

それだけ言うと、声はぶつと一方的に接続を切ってしまった。慌ててミリイが「ちよつと待って、聞きたいことが……」と言いかけたが、返答はない。

立ち上がりかけたのをまた座席に腰を下ろす。

頭を振って「訳が判らない」といった顔つきで、パックを見た。パックもまた同様で、ミリイを見て頷いた。

へろへろが前方の地面を見て叫んだ。

「見ろよ！ あれが入り口じゃないか？」

へろへろの指差した地面がぱっくりと二つに割れ、内部に宇宙船の格納庫らしき場所が顕わになる。

パックは操縦桿を試した。ちゃんと自由に動く。牽引ビームはなくなっている！

「よし、何が何だか知らないが、向こうが来いというなら行ってみようじゃないか！」

【弾頭】は入り口へと向かう。

？管理人？

【弾頭】は岩の表面に開いた格納庫に向け、静かに進入していく。内部はたっぷり容量があり、宇宙巡洋艦であっても、楽々と収容できた。

【弾頭】が完全に格納庫に着地すると、開いた部分が元に戻っていき、天井が閉まった。

パックたちに呼びかけた声がスピーカーから、また聞こえてくる。

「そのまま、外へ出てきてよろしい。格納庫の中には呼吸可能な空気が満たされている。ただし、重力制御はしていないので、弱い重力に注意するように」

パックは首を竦めた。

「出てきてよろしい……だなんて言っているけど、要するに出て来いと命令しているんじゃないのか？」

ミリイは笑って首を振る。

「いいじゃないの。これでお祖父ちゃんの言う、地球の秘密が判るなら」

「まあね」とパックは同意する。どっちみち、好奇心は風船のように膨れ上がり、今にも爆発しそうになっている。

パックを先頭に、ミリイ、ヘロヘロの順で外へ出て行く。声が説明したとおりに、引力は弱い。普通に歩こうとすると、ふわふわ身体が浮いてしまう。とん、とんと爪先で地面を後方に蹴るような歩き方が効率的だと悟る。

「出てきても良さそうだぜ！」

パックが【弾頭】のハッチから、怖々周りを見回している原型の仲間に向かって叫ぶ。原型たちは用心深く、そろそろと外へ出てきた。

「ようこそ、皆さん。こんなに多くの原型の人々を連れてきてくれ、嬉しい限りです」

不意に声が聞こえ、パックたちは、ぎょっと声の方向を見やる。

異様な人物 いや人なのか？ が立っていた。外見は人のように見える。というより、人間のカリカルチャアと形容したほうが正確であろう。

つるりとして、目も鼻も口もない頭部に、これまた、つるりとした胴体、手足。全体は透明で、ガラスの彫刻のように見える。

「今、声を出したのは、まさか？」

彫刻は頭を傾け、頷いた。

「そう、わたくしです。わたくしは、ずっと長い間、地球を訪れる原型の人間を、お待ち申しておりました」

彫刻の透明な身体が、声を発するにつれ、様々な色に染められた。さあーっ、と頭部から足下まで、スペクトルの全色に渡って染め上げられる。

声を発し終わると、再び透明な状態に戻る。

ことり、ことりと足音を立て、ガラスの彫刻は近づいてくる。その動きは滑らかで、ガラスというより、人の形をした液体のようだ。

ミリイが一步、前へ進み出た。

「あなたは、誰なの？」

ガラスの彫刻の腕が上がり、自分を指し示す動作をする。

「わたくしは？管理人？です。地球の管理人と言ったほうが正確でしょう。この百年近く、わたくしは、地球を守ってきました。あなたがた、原型の人々にお渡しするため」

ミリイは、さらに質問を重ねる。

「それでフrint教授との関係は？」

「わたくしは……いえ、我々はフrint教授によって製作されました」

「我々……？」とミリイは目を丸くする。

いつの間にか、パックたちの周りを同じようなガラスの管理人が取り巻いている。その数は数十人を数えられた。

「それじゃ、あなたは……あなたがたは、ロボットなの？」

管理人はほんの少し、逡巡する素振りを見せた。

「はい。フrint教授によって製作され、その命令を受けているという意味において、ロボットと言っていいでしょう。わたくしは最初の被創造物です。わたくしは、フrint教授に製作された後、この月に留まり、仲間を増やしていきました」

管理人は姿を表したガラスの彫刻たちに向け、腕をぐるりと回して示す。ガラスの彫刻たちは一斉に頷き返し、声を上げた。

「我々は、フrint教授の命令を守っております！」

「原型の人々に地球をお渡しするために」

「地球の存在を隠して……」

パックがぐい、とミリイの隣に並び叫んだ。

「そうだ！ 地球だ！ 地球は、どこへ行っちゃったんだ？」

管理人はパックのほうに向き直った。目も鼻もないのっぺらぼうであるが、パックはなぜか、じっと見つめられる視線を感じていた。管理人の答えはパックを、いや、その場にいた全員を仰天させた。

「地球が存在するのは、超空間です！」

夢

宙森の管理センターで、計器の表示を見つめていたシルバーは呟いた。

「【弾頭】は、あの岩の固まりの地下に停船しているようだ……。地下から僅かながら、エネルギーの放射がある。何か、ありそうだな」

背後から【大校母】が、じりじりとした声で詰問する。

「シルバー！ 妾は待てません。これ以上ぐずぐず引き伸ばすなら

……」

「なんだね？」

振り返ったシルバーは嘲笑った。

「この俺を、どうするというのだ？」

言われて【大校母】は、ぐっと詰まる。確かに不死身に近いシルバーに対し、肉体的な恐怖を示すことは不可能である。たとえ真空の宇宙空間に放り出されても、シルバーは平気であろう。

せいぜい太陽のと真ん中に放り込むくらいが、シルバーに与える最大の罰であるが、その前にシルバーのことである。どんな暴れ方をするか予想もできない。そのことはシルバーも【大校母】も承知している。

遂に【大校母】は、哀願するような声になった。

「どうするのです？ 妾をいいように引っ張りまわす、あなたの考えは、さっぱり判りません」

シルバーは、だらりと下げた両腕を広げた。

「だから、待て、と言っている。必ず、何か動きがあるはずだ。それまで少し時間がある。俺は、あんたの？ 楽園計画？ とやらを聞きたいな。原型の脳を使って、あんたは何をしようとしているんだ？」
「ふっ」と【大校母】は溜息をついた。

「しかたありません。それでは教えましょう。これをご覧下さい」
【大校母】の合図で、その場にいた？ 種族？ の一人が、センターの空中にホログラフィー映像を投影させた。それを見て、シルバーは首を捻った。

「なんだ、これは？ 透明なタンクがずらりと並んでいるが……あつ！ これは総て原型の脳か？」

シルバーの言葉どおり、ホログラフィーに映し出されたのは、無数の透明なタンクである。

内部には一つずつ、灰色の脳がぷかぷかと浮かび、タンクには生命維持装置が繋がれ、タンク同士は複雑な配線が接続されている。

【大校母】が説明する。

「これら原型の脳を納めたタンクは、ご覧の通り、データ回線で繋がれ、ネット・ワークを構成しています。このネット・ワークにより、原型たちは仮想空間で共通の夢を見ているのです」

「夢とは、何だ？ 原型たちは眠っているのか？」

【大校母】は、ゆったりと首を振る。

「いいえ、その種の夢ではありません。原型たちに見せている夢は、新たな世界の夢なのです。重力定数、弱い力、強い力などの、妾が設定した宇宙の物理定数に基づいた、宇宙の夢を！」

シルバーは頭を振った。

「判らんな。あんたの言うことは、さっぱり判らん！ もう少し、おれに判るように説明してくれ」

「それには、フェルミ・パラドックスについて説明しなくてはなりません」

フェルミ・パラドックス

天才物理学者エンリコ・フェルミ（一九〇一―五四）は、第二次世界大戦後の五十年代初頭、ロスアラモス研究所の昼食会で、あるひと言を呟いた。

「いったい彼らは、どこにいるんだろうね？」

昼食に同席していたフェルミの同僚は、すぐさま発言の厄介な側面に気付いた。話題の「彼ら」とは地球人以外の知的生命体、すなわち宇宙人の存在である。

この頃、世界中では「空飛ぶ円盤」について話題が沸騰していた。「空飛ぶ円盤」即ち未確認飛行物体《UFO》である。昼食会でそれが話題に上り、フェルミの発言に繋がったのである。

「彼ら」宇宙人は、どこにいるのか？

これには幾つかの前提が必要である。

まず第一に、地球が存在する太陽系は、銀河系でなんら特別な場所でないという「平凡原理」。地球の太陽は主系列のF型太陽で、銀河系ではなんら特殊なものではない。ゆえに、地球と同じような環境を持った惑星も、銀河では無数に存在するだろう。

それに加えて、銀河系を含む宇宙全体が数百億年という年月を経ていること。

従って、この宇宙には、地球と同じような知的生命体が溢れているはずだ。その中では地球人より数万年は文明が進んだ種族もいるだろう。ならばその内の一つの種族が地球を訪問していても不思議ではない。

だが、未だに地球に宇宙人が訪問したという、確乎たる証明はなされていない。さらには地球以外の知的生命体の証拠も、検証可能な形で存在していない。

これが「フェルミ・パラドックス」である。

理由は、いくつか考えられる。

一つ、存在はするが、まだ訪問はなされていない。宇宙の絶対的な広さが、宇宙人の訪問を妨げている。

二つ、訪問しているが、宇宙人は地球人が未熟なままなので、姿を隠している。

三つ、宇宙人の文明があまりにも進みすぎ、地球人には理解できないレベルに達しているため、確認できない。

等々、無数の理由が提出されていた。

最も単純な理由が真実に近いという？オッカムの剃刀？に従うと、最も単純な理由は、この銀河系で知的生命体を発生させたのは地球が唯一つで、現在のところ地球以外に宇宙には文明が存在しない、というのが、それである。

地球は宇宙では、絶対的に孤独なのである。

では、なぜ地球人以外に宇宙で知的生命体は存在しないのか？

？ドレイクの方程式？

「話が抽象的になってきたな。おれは神学論争が嫌いだ。この銀河系に、地球人しか知的生命体が存在しない？　それがどうした！　何が問題なのだ？」

【大校母】は悠揚と落ち着いている。

「そなたは？ドレイクの方程式？なる公式を、ご存知でしょうか？」
シルバーは「知らん！」と短く答えるのみだった。

「それは、このような方程式です」

【大校母】が合図すると、部下が空中に公式を表示させた。それは

$$N = [R^*] \times [fp] \times [ne] \times [fl] \times [fi] \times [fc] \times [L]$$

というものだった。

「最初のNは、銀河系で存在する知的生命体による文明の数。つまり宇宙人の数です。もし、銀河系で存在する知的生命体が地球人のみなら、これは？1？となりましょう。その場合に重要なのは、最後の「L」なのです。これは存在する文明の存続時間を表します。すなわち文明の寿命！　その他のパラメーターのほとんどは判明しておりますので、最初のNが1なら、最後のLもまた、自ずから導き出されます。その長さは約、一万年と算出されました」

シルバーは眉を寄せた。

「一万年……そいつは……」

【大校母】は重々しく頷く。

「そう……。地球人が文明らしきものを形にして、すでに一万年近くを経過しております。つまり、地球人の文明は寿命を迎えつつあるのです！」

シルバーは高笑いを上げる。

「ははははは！　そうか、地球人の文明は、滅びの時期を迎えているのか！　そいつは結構だ！　しかし、人類は銀河系全部に殖民して、その数も誰にも数え切れないほどだ。一〇の十乗の、そのまた十乗の、さらに十乗を掛けて、そして……。ええい！　おれにも判らんくらい、人類というのはこの銀河系に蔓延つておる！　それが一斉に滅びると言うのかね？　馬鹿馬鹿しい！」

【大校母】は、あくまで冷静だった。

「？ドレイクの方程式？が発表されたとき、地球には原型しかいませんでした。超空間航法が発見され、銀河系に人類が次々と殖民するようになって？種族？が生まれたのです。すなわち、この公式で滅びる可能性があるのは、原型の地球人ということになります」

シルバーは口許の笑いを消した。

「原型が……？」

「そうです！　原型は現在、衰亡の真っ只中にいるのです。もし原型の人々がこの銀河系から姿を消したら、どうなるでしょう？　超空間ジェネレーターは、原型の人間にのみ、起動されます。もし原型が姿を消したら、超空間ジェネレーターは役立たずの、無用の長物と化すのです。そうなったら、銀河系を支配する無数の？種族？たちの危機です！　それは、断固として防がなくてはなりません。絶対に！」

シルバーは空中に投影されているホログラフィーに顎をしゃくる。

「それがこれと、どう関わるのだ？」

「超空間ジェネレーターは、なぜ原型にしか起動させることができないのでしょうか？ それは今の宇宙の物理定数が、原型の人間の観測によって生まれ出てきたと考えられているからです。宇宙の？ビッグ・バン？により最初の宇宙が誕生した瞬間、様々な物理定数は決定されましたが、それは元々、原型の人間が知性を持ち、宇宙を観測したことによる結果なのです。因果関係は、ここでは逆転しています。観測者がいなければ、宇宙は存在しない。その観測者は原型であるがゆえに、宇宙の物理定数は決まっている……。ならば、その観測者が変化すれば、宇宙の物理定数も変化するのではないか、というのが妾の予想でした」

シルバーは呆氣に取られていた。

「そんな馬鹿な！ 【大校母】。お前は神学論争どころか、完全な神秘主義に陥っているぞ！ 正気じゃない……」

【大校母】はシルバーの非難に、まるで取り合おうとしない。それどころか、身内から湧き上がる使命感に溢れている。

「充分な数の原型の脳が必要なのです。今ある数では全然、足りませぬ。少なくとも十億！ 誤差の範囲を考慮に入れば、五十億の原型の脳が必要なのです。それらを幾つもの惑星に配置させ、宇宙を観測させます。しかし、その観測は、妾の設定した新たな物理定数を引き寄せる観測でなければなりません。そうすれば、数世紀……いや、数十世紀のうちには結果が現れるでしょう……。その宇宙は？ 種族？ のみで構成された、原型を必要としない宇宙！ 素晴らしいではありませんか！ 衰えた古い種族である原型は滅び、我ら新たな？ 種族？ が原型の手を借りずとも、超空間ジェネレーターを駆使することになるのです！」

聞いているシルバーは、怒りが静かに満ちてくるのを感じていた。
「原型のいない宇宙……。【大校母】よ、それがお前の望みなのか？」

その時、管理センターの部下が計器を覗き込み、鋭く叫んだ。

「【大校母】さま！ 岩の固まりの近くの空間に変化が！ 超空間波が観測されます！」

「何だとっ！」

と、【大校母】とシルバーが同時に叫び返す。

地球

地下の一角に、巨大な超空間ジェネレーターが設置されていた。あまりに巨大で、宇宙船に搭載できる規模ではなく、その周りに幾つもの座席が用意されている。規模が巨大すぎ、それらの座席にパックが連れてきた原型の人々を配置するのに、斥力プレートを装備した飛行モービルを何台も利用しなくてはならないほどだった。

「こんなに沢山の原型の人間が必要なのか？」

ジェネレーターを見下ろす監視所で、パックはガラスの管理人に話し掛けた。

巨大なジェネレーターの総ての椅子には原型の人々が腰掛け、目の前のスイッチを熱っぽく見つめていた。合図があれば、一斉にスイッチに手を伸ばす態勢ができている。

ミリイは興奮した顔色で、目の前の作業を見守っている。ヘロヘロは子供のように、ぽかんと口を開けていた。猫のメイド姿のアル二もいたが、詰まらなそうに自分の髪の毛を弄くっている。

ガラスの管理人は頷いた。

「そうです。地球を超空間から呼び戻すためには、一人や二人の原型では足りません。あなたが連れてこられた百名の原型の人々の意思が必要なのです」

監視所のモニターに、ルーサンとタンクの中のサークが姿を表した。画面が分割され、新たな画面にサークの仮想現実での姿が表示される。画面のサークは笑いかけた。

「こちらは、すべて順調！ 原型たちは全員、準備ができています。」

いつでも作業に懸かれるぞ!」

パックは頷き、叫んだ。

「よし! それじゃ、始めてくれ!」

サークは画面から命令する。

「超空間ジェネレーター始動!」

その瞬間、原型の人々は一斉に腕を挙げ、目の前のスイッチに手を伸ばす。百の指先が同時に、ジェネレーターのスイッチを入れた! ジェネレーターにエネルギーが注入される。

パックは全身が揺すぶられるような衝撃を感じていた。ミリイも目を睜り、驚きの表情を浮かべている。

「何があつたの? 計画は失敗したの?」

ガラスの管理人は首を振った。

「いいえ、地球が出現したので、その引力が、この月に及んだのです。角運動量を地球に奪われ、月は再び、地球の周囲を巡る軌道に乗りました」

パックは興奮した。

「見せてくれ! おれ、地球をこの目で見たい!」

ガラスの管理人は腕を挙げた。

その合図に、控えていた他のガラスの管理人が目の中のスイッチを操作する。

天井が開き出した。

ミリイが心配そうに声を上げた。

「大丈夫なの？ 外は真空よ！」

ガラスの管理人は安心させるように、ゆったりと手を振る。

「心配ありません。空間歪曲バリアの作用で、空気は保持されております。皆さんの見上げる先に、地球が見えるはずです」

その通りだった。

真っ黒な宇宙空間、角度にして三十度ばかりの中天に、真っ青色をした球体が浮かんでいる。

パックは夢見るように呟いた。

「あれが……地球？」

宝

地球を目にし、その場にいた原型の人々から津波のように喚声上がる。全員、身を乗り出し、伸び上がるようにして頭上に浮かんでいる青い球体を見つめている。

白い雲が散らばり、大陸には緑と茶色の斑点が、絵の具を垂らしたように散らばっている。

パックは呟いていた。

「あれが、人類の故郷なのか……。あそこから銀河系に人類が広がったなんて、信じられないよ！」

ミリイはガラスの管理人に尋ねる。

「なぜ、こんなにまでして、嚴重に地球を隠さなければならなかったの？ そんなに大事なものが、地球にはあるの？」

管理人は微かに首を振る。

「ある意味では、極めて重要な宝が、地球にはあるのです。もし、目先の利益にのみ目が眩み、毀損するようなことがあれば、人類の未来は暗いものになります。フrint教授は、そうお考えでした」

パックは管理人に顔を向けた。

「宝だって？ そんなお宝、どうして地球に置いたまま人類は銀河系に散らばったんだろう？ そんなに大事なら、一緒に持っていけばよかったのに」

管理人の全身がピンク色に輝き、首を細かく動かした。なんだか笑っているようだ、とパックはそれを見て思った。

「最初に超空間ジェネレーターが開発され、人類が爆発的に広がった当初は、それが宝だとは、誰も思っていなかったのです。様々な星に殖民して？種族？が生まれてくるに連れ、地球に残されたその宝は、フリント教授によって初めてその重要さを見出されました。もし心ない？種族？がそれを自分たちのために利用しようと考えると、原型の人々の未来はないでしょう。それに、その宝は、おいそれと持ち歩けるようなものではないのです」

へろへろはじれったそうに声を上げた。

「いったい、それは何だい？ そんなに、大きなものなのかな。持ち歩けないほどだなんて……」

管理人は一呼吸を置いて答える。

「それは……地球そのものなのです」

パックとミリィはぽかんと口を開けた。

「何だつて？」

パックは首を傾げていた。

針路

地球に向かうことが決まった。

宙森の原型の人々の意見がまとまったためである。パックもそうだが、その場にいる全員が、地球に強い好奇心を抱いていたのである。

パックたちはシルバーの巡洋艦【弾頭】に乗り込むことになったが、数十人いたガラスの管理人は、最初の一人を除き、姿を消していた。

「お供するのは、わたくしだけです。我々はすべて同じ鑄型からできておりますので、一人だけ同行すれば充分なのです。ここに残った仲間たちは、常に連絡が取れますから」

それを聞いて、パックはほっとなった。正直、ここにいる総ての管理人が【弾頭】に乗り込むことになったらと思っ、ひやひやしていたのである。

いくら巡洋艦とはいえ、今現在の乗り込んでいる原型だけで、艦内はかなり混み合っていたからだ。この上、数十人ものガラスの管理人が乗り込む余裕はなかった。

全員が乗り込むと、パックとミリイは操縦席に座り、手早く出発の準備を整える。

操舵室の中央には、サークのタンクが据えられた。タンクのディスプレイからサークは真正面の船窓に見えている地球を見上げる。

「地球か……。色々な伝説が語られているが、そのどれが真実なの

か、またただの昔話なのか。我々原型があの星から宇宙へ飛び出し、銀河系に広がった。しかし、今は……」

サークの顔に憂愁が浮かぶ。ルーサンは首を振って話し掛ける。
「おれたち、故郷に戻る事になったんだ。もう、どの？ 種族？ かわら追いかけられることもない！ きつと新たな歴史が生まれるさ」

管理人は、ぽつりと謎めいた言葉を洩らした。

「きつと、皆さんが驚く真実がありますよ」

【弾頭】は浮かび上がり、地球へと針路を取った。

解除

地球の大部分を占めるのは海である。

海面すれすれを飛行し、パックは眉を寄せて呟いた。

「妙な海だな。まるで凍っているようだ」

その言葉どおり、目の前に広がる海はぺたりと凧いでいて、波一つ立たない。

そのうちに、陸が見えてきた。

海岸線に砂浜が長く伸び、滴るような緑が濃い。ガラスの管理人が細い指を上げ、前方を指し示す。

「この先に建物が見えてきます。そこが目的地です」

パックは首を伸ばし、前方を眺めた。管理人の言葉通り、やがて緑の向こうに、白い立方体が見えてくる。

窓一つなく、真っ白な壁面が太陽光を反射していた。縦横、千メートルはありそうな、巨大な立方体である。立方体の周辺に、着地できそうな空き地を見つけ、パックは【弾頭】を降下させた。ハッチから外へ出て、ミリィは首を傾げる。

「音がしないわ」

その通りだった。完全な静寂がその場を支配している。目の前には、巨大な立方体が聳え、無愛想な壁面を見せている。後から出てきたパックも耳を澄ませ、頷く。

「本当だ、何にも聞こえねえ……」

へ口へ口がちよこちよこと歩き出し、近くの茂みに近づいた。ち

よい、と指先で茂みの葉先を突つつく。

「痛っ！」と指先を口に咥えた。

「こちこちだ！ この葉っぱ、まるで凍っているみたいだよ……」

パックはへ口へ口の側に近寄り、地面に目を落とした。

「何だ、こりゃ？」

屈み込み、指先で摘み上げたのは、小鳥だった。茶色い羽毛に、黒とグレーの斑が入っている。

黒い嘴、小鳥は羽根を広げ、すぐさま飛び立ちそうだが、摘み上げられたのに、ぴくりとも動かない。

背後ではアルニが地面に指を近づけ、地面から生えている草を怖々触る。

「この草もかちん、こちんよ！ まるで彫刻みたい……」

ある現象に思い当たり、パックは叫んだ。

「こりゃ、停滞フィールドじゃないのか？ この鳥、停滞フィールドで固まっているんじゃないのか？」

ハッチに立っていた管理人が頷く。

「その通りです。地球を超空間に隠すときに、全体を停滞フィールドに包みました。超空間内部は絶対零度で、そのままでは総て凍りついてしまいますので。今、解除します」

管理人がハッチから一步を地面に踏み出した、その時に“それは置きた。今まで完全な静寂が支配していたその場に、いきなり音が戻ってきた。

入口

ざわざわ……と回りに生い茂る緑の葉むらがざわめき、地面の草が生き生きとした輝きを取り戻す。

パックが摘み上げていた小鳥に生命が蘇り、ばたばたと羽根先を動かす。びくつと、思わずパックが指を離すと、小鳥は鋭くひと声「ちちっ！」と鳴いて、空中に飛び上がる。

「ごおっ！」と、突風が巻き起こる。今まで凍り付いていた地球が目覚め、息遣いを開始したようであった。

「見て、あれを！」

原型の一人が空を指差した。

紺碧の空を、鳥の群れが編隊を作って飛び去っていく。

ルーサンが斥力プレート筏を引いて外へ出てくる。プレート筏にはサークが据えられていて、ディスプレイから感慨深そうな表情で周りの景色を眺めていた。

さくさくと地面の草を踏みしめ、管理人がパックたちに建物を指し示した。

「こちらへ……」

改めて見上げると、つくづく巨大な壁面である。一口で縦横千メートルの壁面といっても、見上げると頂上部は空の青さに溶け込み、左右もまた、地平線に溶け込んでいる。

見ていると、距離感がおかしくなる。近くに巨大な巡洋艦が停船しているから、やっとスケール感が保たれるようなものだ。

建物に向けて歩いていって、パックはかなりの距離があることに

気付いた。建物があまりに巨大すぎ、すぐ近くにあるような錯覚を生んでいたのだ。さらに平坦な壁面が、その錯覚を助長する。歩いても、歩いても、まるで近づいてこないような気になる。

ふと振り返ると、原型の人々も同じような気持ちでいるらしく、どこことなく虚ろな目付きで建物を見上げながらとぼとぼと歩き続けていた。

「あれ、入口じゃない？」

ミリイが小声で囁いた。何だか大声を上げることが、憚れるような雰囲気包まれている。

真っ白な壁面に、ぼつりと黒い長方形が見えている。入口らしき黒い長方形のおかげで、やっと距離感がつかめた。

入口は縦二十メートルほど、横幅十メートルほどで、全体からすれば見失うほどちっぽけだ。パックは黒い長方形を頼りに、足を速めた。

ようやく一行は入口のすぐ側まで近づいた。先頭に立ったパックは、入口を見上げる。

真っ黒な内部は、真っ白な壁面と鋭く対比をしている。黒々とした内部に目を凝らしても、何も見えない。

ガラスの管理人は、さっさと先に入っていった。その姿が、溶け込むように内部に消えていく。

ごくり、とパックは唾を呑みこんだ。

気がつく、ミリイがパックの手の平を掴んでいた。手の平に、ミリイの体温が伝わってくる。

パックは、ぎゅっとミリイの手を握り返す。二人は目を合わせた。「うん」と、ミリイが頷く。真剣な目でパックを見つめ、口を開く。

「行きましょう！」

パックも頷き返す。

振り返ると、原型たちが緊張した表情で立ち止まっている。無理矢理どうにか、パックは原型たちに向け、笑って見せた。

「さあ、行くぜ！ フリント教授の秘密ってやつに、お目にかかるうじゃないか！」

光

内部は森閑として、厳しい静寂に包まれている。入るとすぐに、両側に壁が聳え立っている。壁は総て真つ黒で、怖ろしいほど平坦で、微かな窪みや歪みも見当たらない。

パックは黒い壁面に顔を近づけた。奇妙なことに、鏡のように磨き上げられているのに、パックの姿は映し出されない。

「なんでできているんだろう……」

呟き、指先を近づける。指先が触れた瞬間、壁面にぱつと星のような小さな光が瞬き、指先から波紋のように壁面に円を描く。パックが触れた先から光の波紋が広がり、それは薄くなつて広がり、消えた。

ミリイも真似して指先を近づける。

ぐるりと指先を動かすと、その指先に纏わりつくように光が走る。ミリイは小さく笑い声を上げた。

ヘロヘロが同じようにして、顔を上げた。

「これ、色んな数字や記号だよ！ 細かくて人間の目にはよく判らないだろうけど、僕の視覚を拡大に見れば、それが判る」

「へえ」と、パックは感心した。さすがロボットである。

ルーサンが呟いた。

「ところで、あのガラスの管理人はどうした？」

ルーサンの指摘に、パックとミリイは「あつ！」と小さく叫んでいた。

「そうだ、この中に入ったままだった！ どこへ行っただろう？」

パックの言葉に、ミリイは奥を指差した。

「行き先は、向こうしかないわ！」

ミリイの言葉にパックは頷き、背後の原型たちに叫んだ。

「行こうぜ！」

パックが先頭に立ち、歩き出すと、原型たちもそろそろと従っていく。

振り返ると、入口が小さくなっていた。その入口が、細くなっていくのを見て、パックは驚愕した。

閉まっていく！

外の光が細くなり、やがて一本の線になると、ぴたりと閉じてしまった。

それを見た原型の仲間たちから、悲鳴が上がる。

同時に、床がぱつと輝き出した。

ここは床が照明になっているらしい。下からの明かりに一同は照らされ、どうしたものかと顔を見合わせた。

「どうしたんです？ こちらですよ！」

遠くから管理人の声が聞こえてくる。

その声に反応したのか、周りの壁が微かに光り出す。ぱつと壁面に小さな星が瞬き、様々な波紋を描き出し、消えていく。身動きすると、それだけで反応するのか、ひどく幻想的な眺めである。

ミリイは不思議な光景を見つめ、眉を寄せた。

フリント教授

何かを思い出そうとしているような表情である。

「これ、何かに似ていない？」

「似ている？ 何に？」

「超空間の眺めに……」

言われて見れば、確かに壁面の模様は、超空間のあの瞼をぎゅつと瞑ったときの斑模様を思い起こさせた。

「さあ、皆さん！ いよいよフリント教授の秘密を明かす時が満ちました！」

管理人の言葉に全員、顔を上げた。

目の前に、壇ができていて、その上にガラスの管理人が立っている。どういうわけか、その場の管理人は、威厳に満ちている。

と、管理人のガラスの身体に急激な変化が生じた。透明な身体の内側から、もくもくと白い煙のように湧き上がるものがあり、それが身体中に満たされた。すると今度はガラスの管理人の身体表面がぐねぐねと波うち、別の形を取り始める。

のっぺらぼうの顔に凹凸ができ、眼窩が窪み、鼻梁が突き出した。それはある、人物の形を作り始めていた。

真っ白な表面に色が着き始め、人間の肌の色になっていく。頭髮が生まれ、眼窩に目ができた。

ミリイは呆然と呟く。

「お祖父ちゃん……」

「えっ！」と、パックはミリイを見た。ミリイの唇が細かく震え、両目が大きく見開かれた。

「お祖父ちゃん！」

ミリイは叫んだ。

目の前に立っているのは、粗末なスーツを身に着けた、貧相な老人である。

これがフrint教授なのか、とパックは不思議に思った。考えてみれば、さんざんフrint教授の名前を耳にしていたが、その姿を知らない。ミリイの様子から、目の前の老人がフrint教授その人の姿らしいが、どういうわけだろう？

フrint教授は死んでいる……。はずだったが？

投影

「そこにいるのは、ミリイか……」

皺枯れた、老人の優しい声音が聞こえてくる。老人はミリイを見つめ、少し驚いた様子を見せた。

「確かにミリイだが、大きくなったなあ……。わしの覚えているミリイは、こんなだったのにな……」

と老人は手を挙げ、自分の胸辺りを指し示す。にこにこ微笑を浮かべ、ミリイを見つめていた。

ミリイは、ゆつくりと頭を振った。

「本当にお祖父ちゃんなの？ お祖父ちゃんは死んだのに……」

「ふむ」と老人は呟いた。

「そうか、わしは死んだのか……。いや、済まなかった。説明するのが遅かった。わしは確かにプリント教授だが、その記憶を転写した控えに過ぎん。わしの今の姿は、ガラスの管理人の身体を使った投影といっていい。とすると、わしがここで記憶を保存した後、わしの本体は死んでしまったわけじゃな。いったい、あれから何年が経ったのか……」

老人はちよつと顔を上げ、考え込むような表情になる。老人の目の前の空間に、ホログラフィーで文字が浮かび上がった。

一〇二・〇二・一三……

数字は年数を表示しているらしく、老人の表情に驚きが弾けた。

「なんと！ 百年以上も経っているのか！ それじゃ、そこにいるミリイは……？」

「あたし、停滞フィールドに入ってたの」

ミリイの答えに老人は「ふむふむ」と頷いた。ミリイは堪らなくなったのか、老人の立つ壇に駆け上がりうとする。それを老人は片手を挙げ、制止した。

「待て！ ここには、わしのためのフィールドが構成されている。

お前が来たら、フィールドが乱れて、今いるわしの再現記憶も乱れてしまう。悪いが、このままにしておくれ」

再現されたフリント教授の言葉に、ミリイはがっくりと肩を落とした。フリント教授はパツクの背後で呆然と見上げている原型の人々に目を留めた。

「その人たちは？」

危機

ミリイは背後の原型たちの仲間を見て、もう一度、フrint教授に向き直り、これまでの経過を説明した。シルバーの名前が出て、フrint教授は首を捻った。

「シルバー？ あの下働きのロボットのことかね。どうして、海賊なんぞになろうと考えたのだ」

ミリイは不思議そうに尋ねる。

「お爺ちゃんが超？ 種族？ という研究で、シルバーの人格を新しい身体に転写させたからよ！ 憶えていないの？」

教授は首を振った。

「わしがここに記憶保存した後のことじゃからな。知らんのも、無理はない。そうか、色々あったんだなあ……」

感慨に耽るフrint教授の投影に、それまで黙り込んでいたアルニが声を掛けた。

「ねえ、地球の秘密って、何なの？ ここは何の場所なの。そろそろ聞かして欲しいわ」

ずけずけとしたアルニの物言いに、教授は相好を崩した。

「これは失礼した！ つい、個人的なことで、ほったらかしにしてしまったな！ 宜しい。まず、この場所だが、ここは記録庫なのだ。あらゆる記録がここには保存されている。その記録とは、地球に存在する、ありとあらゆる生命の遺伝子をコード化したもので、この建物全体が、記憶保存庫として機能しているのだ！」

サークが丁寧な口調で尋ねる。

「なぜ、そのような必要があるのです？　それが我々と、どう関わりあうのですか？」

フリント教授の瞳が煌いた。

「この銀河系に無数の？種族？が存在するが、遺伝子エッチングで生まれた？種族？は、どのくらい種類があるか、知っているかね？」

教授の意外な問いかけに、全員が怪訝そうに顔を見合わせる。アルニは、あやふやに答えた。

「えーと……百！　くらいかしら？」

教授は楽しそうな笑い声を上げる。

「惜しいな。正解は、その十倍にものぼる。なんと、千以上……正しくは千と跳んで五十七の？種族？が、この銀河系には存在している。わしは一つ一つ、虱潰しに調べたのじゃよ」

驚きの声が、その場にいた全員から上がった。しかし教授の表情には憂いがあった。

「しかも、年々歳々、新たな？種族？が遺伝子エッチングにより生まれてくる。わしが調べた百年前でさえ、そうなのだから、今頃はどれだけ増えたか、誰もにも判らなくなっている。この？種族？の無制限な増殖が、銀河系に危機を生じさせている！」

教授の口調は真剣だった。自分の言葉が全員の胸に沁みこむのを待ち、教授はもう一度はつきり繰り返した。

「いいかね。銀河系は危機を迎えているのだ！」

壁面

白い壁面を見上げたシルバーは、壁面に取り付いている奇妙な姿をした？種族？を、ちらりと眺めた。

頭がひどく大きく、身体は申し訳程度についているに過ぎない。自分で移動できないのか、専用の移動機に乗って、あちらこちらと壁面を食い入るように見つめている。細い指先が、花卉のような形の分析装置を操り、壁面の弱点を探している。

【弾頭】が着陸し、そのまま動かないことを確かめ、どうやらミリイたちはこの建物に入ったようだと確信して、シルバーは宙森の宇宙戦艦を指揮してやってきたのである。【大校母】は宙森から動けないため、シルバーがこの場の指揮を執ることになった。

空を見上げると、宙森のリング状の円環部分が浮かんでいる。もつとも、シルバーが視覚を望遠にしてやっと見える程度である。宙森は地球の静止軌道に留まり、【大校母】は多数の？種族？で構成された侵攻部隊を組織したのである。

部隊を編成するとき、【大校母】はこの巨大頭の？種族？を連れに行くよう、シルバーに強制した。こういった分析には不可欠な数学的能力を高めた？種族？だとのこと。シルバーは、それは表向きの理由で、実際は監視役なのだろうと理解していた。

まあ、監視役だろうがなんだろうが、役に立てばよい。

宙森の宇宙戦艦は、例によって植物性のものだった。巨大な蚕豆……いや、宙森だから宙豆と呼ぶべきだ……の形をして、外板は頑丈なクチクラ組織で覆われている。今は、どっしりと着陸脚を地面

に伸ばし、シルバーの【弾頭】の側に停泊していた。

全身、これ頭ばかりと思える？ 種族？ が、顔を上げた。巨大な頭蓋骨の下に隠れるように、大きな丸い目と華奢な顎をした？ 種族？ は、絶望的な表情を見せた。

ぶるん、と巨大な頭を振る。まるで一メートルもある巨大な茸に目鼻がついているような趣である。

「駄目です！ この壁面は、分析を受け付けません！ あらゆる波長で調べていますが、すべての波長は壁面に吸い込まれてしまします」

シルバーは唇を噛みしめた。

「糞！ はるばると遠路ここまでやって来て、そんな詰まらん与太を耳にしなければならんとは……。なんとか破る方法はないのか？」

無駄だと思っても、なにか行動したいという欲求に動かされ、シルバーはレーザー・ガンを構えた。

「どいてろ！」

シルバーに急かされ、櫓に乗っていた？ 種族？ は慌てて脇にどくすでにシルバーが握る銃口の周りからは、光束発射準備のためのイオンが放出され、陽炎のような空気の揺らめきが認められていた。

シルバーは引き金を引き絞った。

銃口から壁面に向けてレーザーが放たれる。

引き金を一杯に引き絞ったシルバーは、眉を顰めた。壁面に銃口を向けたシルバーの腕は、ぴたりと静止したまま微動だにしない。そのうち、レーザー・ガンのエネルギーが尽きてしまった。

大腿に壁面に近づき、レーザーを浴びせた部分に顔を近づける。壁面には、全く何の変化も見受けられない。

そつとシルバーは壁面を触つてみた。

冷たい。あんなにレーザーを全出力で浴びせたのに関わらず、壁面には一カロリーの熱も存在していなかった。

ふと思いつき、シルバーは頭の大きな？種族？に話しかけた。

「この立方体の大きさは？」

あまりに初歩的な質問に、巨大頭の？種族？は当惑したように目をぱちくりさせた。

「そ、それは……」

手元の分析器を使い、立方体に向ける。その顔に驚きが浮かぶ。

「妙です！ これによると、無限大と表示されます。レーザーを使った計測なので、こんな結果が出るとは信じられません」

シルバーは腕組みをして考え込んだ。

「総ての波長は吸い込まれる、と言ったな。つまり、反射が戻らないということか。まるで完全黒体みたいだな。あるいは……」

「ブラック・ホールの特性に似ていますね」

巨大頭の返事に、シルバーは「うむ」と重々しく頷く。ぐいと巨大頭に向き直り、矢継ぎ早に命令を下した。

「論理破城槌を用意しろ！ どうやら、あの立方体は、物質的なものではなさそうだ。物理的な力では破壊できない性質なのかもしれない」

シルバーの命令で、その場にいた全員が動き出す。

覚悟

宙森の宇宙船内部から、妙な形の機械が引き出されてきた。先端に無数の走査針がびっしりと生えた禍々しい形の機械が、斥力プレートに載せられ立方体に近づく。

論理破城槌とは、ゲーデル（一九〇六―七八）の不完全性定理に基づいて設計制作された数学的分析装置である。完全なものは数学的に存在しないという定理に基づき、論理的な弱点を探索するための計測器だ。

移動櫓に乗った巨大頭の？種族？が機械の操作卓に座り、細長い指先で素早く起動させる。機械の先端の針先がさ迷うように立方体に向かい、ざわざわと動き回った。

唇を引き締め、巨大頭は真剣な顔つきになった。

針先が壁面の論理的な弱点を探る。初歩的な？ゼノンのパラドックス？から自己言及パラドックスなど様々なパラドックスが数式に還元され、論理整合の軋みを露呈させようと次々と投げかけられる。しかし壁面は、びくとも反応しない。巨大頭は戦法を変えることにした。

質的な攻撃法から、量的な攻撃法に変更する。無限に関する様々な数学論理が、壁面にぶつけられた。

巨大頭の唇に、会心の笑みが浮かぶ。

遂に、壁面の弱点が顕わになる。鍵は、虚数域に存在する！

「タキオン放射を試してみます。上手く行けば……」

巨大頭は呟くと、別のスイッチを動かした。
ぐあん……と立方体が震えた！

「反応したぞ！」

シルバーが喜びの声を上げた。巨大頭も嬉しげな表情になる。

「もし、あれがブラック・ホールの特性を持っていると仮定するならば、タキオン放射により因果律の破れが観測されると予想したのですが、上手く行きました！　つまり……」

巨大頭が滔々と説明を続けようとするのを、シルバーは手を振って押し留めた。

「よしよし。小難しい理屈は、おれには判らん。とにかく、弱点が露呈されたのだ。あとは、こいつを破る仕事が残っているだけだ！」

シルバーは立方体を見上げた。その視線の先に、宙森が浮かんでいる。

宙森を見上げるシルバーの胸に、ふとした疑念が浮かんでくる。この立方体に隠されている秘密が【大校母】に関し、どう利することになるのか……。あいつは原型の絶滅を狙っている。唇を噛みしめ、新たな覚悟がシルバーの胸に湧き上がる。

そんな暴挙を許すわけには断固いかない！　もしものときは、おれが……。

知識

「銀河の危機とは……」と口を開いたフrint教授は、ふと顔を上げ眉を寄せた。

「今のは、何だ？」

教授の言葉に全員、不安そうな顔を見合わせる。

パックが叫んだ。

「揺れているぞ！ 地震か？」

ずしん……と、内部に低い震動が響き渡った。黒い壁に無数の輝点が湧き上がる。

今度は、はつきりと、全員の身体に伝わるほどの振動が伝わった。パックは背後を振り返る。真っ黒な闇が切り裂かれ、眩しい外光が差し込んでくる。

ぎえええ……と、悲鳴に近い軋み音とともに、周りの壁がぼろぼろと剥落し始めた。一抱えは優にありそうな真四角な黒い固まりは、床に落下するとさらに小さな四角い固まりに分解してがしやりと音を立て、散らばる。

思わず屈みこんで一つを手に取り、握りしめると、手の平の中でぐしゃりと潰れた。手の平を開くと、やはり真四角な欠片となっている。

どさどさとブロックが内側に倒れこむ中、外部から武器を手に、数十人の？種族？が雪崩れ込んでくる。その先頭を歩く人影を見て、ミリイとパックは同時に声を上げていた。

「シルバー！」

シルバーは二人の声に気付き、にやり、と笑いかけた。ぎよろりと大きな目で内部を見渡す。

と、その目が壇上に立っているフリント教授の姿に釘付けになった。

「フリント教授！ 死んだはずではなかったのか？」

壇上のフリント教授は猛然と怒りの声を上げていた。

「何者だ！ ここは人類の知識の集積所なのだぞ。お前たちが破壊しているのは、かけがえのない知識、そのものなのだぞ！」

叫びつつ、指を振り上げる。

その様子に、シルバーは一人「なるほど」と頷いていた。

「察するところ、あなたは、フリント教授の記憶の再生らしいな。おれの姿を見て判らなかつたのが、その証拠だ」

フリント教授は、ぽかんと口を開け、パックとミリイを見た。

「こいつは、何を言っているのか？ 一目でわしが再生された記憶であることを見抜くとは、只者ではないが……」

パックは叫んだ。

「だから、こいつがシルバーなんだって！ あんたが記憶を保存したあと、下働きのロボットの記憶を新しい身体に移植したって説明したろう？」

教授は仰天した様子だった。

「あれが、シルバー！ なんと変われば変わるものだ……」

しかし教授の目付きは興味深そうにシルバーを見つめていた。

「その身体は炭素を基にしたものではなく、金属を主成分としているらしいな。ふむ、興味深い……！ となるとDNAではなくGN

ゲルマニウム

Aで核酸を構成しているのか。なぜ、わしがお前のような身体を設計したのか、その理由が知りたいな。おそろく……」

教授の視線はうつろになり、自分だけの思索に耽り始めたようだった。

ミリイは、そんな教授を見上げ、苛々と足踏みを繰り返す。

「お祖父ちゃん！ 今は、そんなこと言っている場合じゃないでしょう？ どうするの、この場所が、こんなに破壊されて……！」

二人の間延びした遣り取りに、シルバーは高笑いを上げていた。

「あははははは！ 教授は、こんな記憶の再生になっても、相変わらずだな！ さすがは真理の探究者、といったところか」

ひとしきり笑いを上げると、背後から近づく移動櫓に乗った巨大な頭の？ 種族？ を振り向き、命令する。

「おい！ ここはいつたい、どういう場所なのだ？ お前には判るか？ フリント教授は、知識の集積所と言っていたが」

巨大な頭を振りたてて？ 巨頭種族？ は、まだ無事な壁面に近づいた。櫓から伸び上がるようにして壁面に顔を近づけ、大きな丸い目をまじまじと見開いて、壁面に映し出されている紋様に見入る。

崩壊

この騒ぎで、総ての壁面には無数の光の紋様が浮き出ている。巨大頭は目にルーペに似た分析装置を押し当てた。

機能はルーペそのものだが、様々な波長、拡大率を同時に走査でき、単純な拡大鏡とはとも言えない。

その途端「わっ！」と声を上げ、巨大頭は顔を仰向けた。どさりとその場に引っくり返り、幼児のような手足をばたばたとさせる。口許からぶくぶくと泡が零れた。

シルバーは驚いて駆け寄った。

「おい、どうした？」

ひくひく、と巨大な頭蓋骨の皮膚に、無数の血管が浮いて？ 巨頭種族？ は、青ざめた顔でシルバーを見上げる。その目に浮かぶのは、恐怖そのものであった。

「こんな……こんなことって……！」

呟くと、眼球が白目に裏返り、そのまま気絶してしまった。

シルバーは再び教授に向き直り、どすどすと足音高く近づくと喚いた。

「教授！ いったい、ここは何の目的で建てられた場所なのだ？ 知識の集積所とか、ほざいていたな？ その意味は何だっ？」

詰問の声に、教授は我に帰った。うつろだった視線が喚き散らすシルバーに戻り、眉がぐつと狭まり、表情に暗い影を作った。

「さつきも説明しかけていたが、現在この銀河系は崩壊の危機にある。それを食い止めるため、わしはこの建物を作ったのだ」

さつとシルバーの表情が真剣なものになった。怒りの表情が掻き消え、冷静そのものになる。

「銀河系の崩壊？　なんだ、そりゃ？」

じつとシルバーを見つめる教授は、言葉を続ける。

「多分、わしが後年お前のような身体を設計したのは、その危機が原因なのだ。危機に対処するための一つの方法だったのだから。しかし、他にお前のような個体が存在しないところを見ると、試みは失敗したのだろう」

シルバーの表情に、再び怒りが浮かぶ。

「おれが、失敗作だと……」

シルバーの口調は軋むようであった。

報告

宙森の管理センターに設えられている豪華な玉座に巨体を横たえた【大校母】は、苛々と爪を噛んで報告を待っている。

時折、鯨のような巨体に蠕動が走り、その度に新たなボーラン人の嬰兒が排出された。

待っている間に、もう十人は出産したろうか。シルバーの奴、いったい何を愚図愚図と報告を引き伸ばしているのやら……。

センターで通信装置の前に座っていた要員が顔を上げた。

「【大校母】さま！ 報告です！ 通信が入っております！」

「すぐスクリーンに出しておくれ！」

【大校母】は、待ってましたとばかりに身を乗り出した。要員は素早く目の前の装置を操作して、センターの中央に浮かんでいるホロ・スクリーンに映像を映し出す。

映し出されたのは、ボーラン人の通信部隊である。複眼を煌かせ、ボーラン人の部下は早口で報告をする。

「シルバーは立方体の入口を抉じ開けました！ たった今、侵攻部隊が内部に進入成功致しましたので、そちらからの回線を繋ぎます！」

スクリーンに立方体の内部の様子がくつきりと映し出された。十万キロもの距離を感じさせない、鮮明な映像である。

真っ黒な壁面に、奇妙な斑模様が映し出されている。それは一瞬も休むことなく、変化を続け、見ていると目が眩むような気がする……。

しかし【大校母】は、そのようなものには目もくれなかった。その代わり、中央の壇に立つ、一人の見窄らしい貧相な老人に目が釘付けになった。

「あれは……フリント教授……！」

すぐさまボーラン人の部下が報告をしてきた。

「いえ、シルバーの報告によりますと、あれは教授の記憶を再生したものだそうです。実体はなく、投影されたものだそうです」

「ほっほっほ……！」

巨体を揺らし【大校母】は自分の思い違いに苦笑した。あまりに真に迫っている姿のため、百年以上も前に死んだフリント教授が、てつきり生き返ったのかと、一瞬、大きな勘違いをしたのである。

再現されたフリント教授の前に、シルバーが怒りの表情を顕わにして立ちはだかっている。シルバーの唇が動き、怒号ともいえる叫び声が聞こえてくる。

「おれが失敗作だと！　どういうことだ？」

「おや？」と【大校母】は興味が湧いてくるのを憶える。口を挟もうかと思っていたが、気が変わった。少し、この場の様子を見守ったほうが良さそうである。

望み

「すまん。事実だから、しかたがない」

フリント教授は憂い顔でシルバーに答える。シルバーは怒りの余り「ぬぬぬぬ……！」と口の中で呟いていた。

「さて」と、フリント教授は背筋を伸ばし、両手で背広の襟に手をやる。まるで教室で生徒たちに講義をするかのようである。

「そもそも、わしが銀河系の将来に暗い影を感じたのは、銀河系に存在する？種族？の調査を始めてからだった。わしが調査した百年前には、銀河系に存在する？種族？の数は、一〇五七もの数に上った。しかも、当時から？種族？の数は増加しつつあり、現在では、いったい幾つの？種族？が存在するやら、誰にも見当がつかなくなっている」

教授は、武器を持った侵攻部隊などまったく気にする様子もなく、悠然と講義を続けている。泰然自若とした気迫に吞まれ、その場に
いる全員がぴくりとも動かず、教授の話に耳を傾けていた。

「情報物理学という学問の分野を耳にしたことはないかね？　ない？　それでは、説明しよう。」

情報とは即ちエネルギーである　これが、情報物理学の基本的な考えだ。エネルギーは質量でもある。それは、アインシュタインの相対性理論から導き出される。

つまり、十分な密度の情報は、物理的な歪みを空間に作り出す、ということだ。しかも、遺伝子は、情報そのものである！　？種族？を生み出す遺伝子エッチングは、遺伝子を n 倍体交雑の操作で生み出される。一つの？種族？が生み出されることに、その遺伝子は

次々と倍数体となつて、情報の密度が倍加する！

これは、最初の遺伝子操作ともいえる小麦の生み出されたプロセスを思い起こされる。メソポタミアで栽培されていた最初の一粒小麦は七本の染色体を持っていたが、交雑により、二倍の十四本の染色体を持つ二粒小麦が生み出された。次々と倍数体小麦が品種改良により生み出されるプロセスは、遺伝子エッチングによる？種族？の倍加の流れと基本的に一致するのだ！」

シルバーは強いて冷静さを装って詰め寄った。

「それが、おれを失敗作だというお前の話と、どう繋がるのだ？」
教授はシルバーに優しく語りかけた。

「お前の染色体は、ゲルマニウムを基調とする堅固なゲノムを形作っている。普通の生命が染色体を分裂させ、細胞分裂する際、放射線やその他のアクシデントで遺伝子の改変、欠落などが避けられず、我々人間においてはテロメア遺伝子により徐々に老化する。

しかし、お前のゲルマニウム・ゲノムには、そのような欠落は一切、存在しない。お前は、この宇宙が続く限り、よほどのことがなければ、不滅でいられるだろう。つまり不死身、ということだが、それは福音だろうか？

さつき壁の模様を分析しようとした？種族？は、なぜ気絶したのか？ 壁が映し出す情報の密度をまともに受け止め、頭脳がその密度に耐えられず、まずい譬えだが、一種のヒューズが飛んだ状態になったのだ。

お前は生きている限り、あらゆるものを見、聞き、感じるだろう。だが、いずれは自らの記憶に押し拉がれ、やがては無感覚、無感動の闇に沈む。おそらく、わしの本体は、強固な遺伝子を持つ超？種族？を作り出し、遺伝子エッチングを受け付けない身体を設計しようとしたのだろう。しかし、その不死身こそが一種の袋小路に

陥る、というパラドックスを悟ったのではないかな？」

シルバーは愕然と呟いた。

「おれの身体は、遺伝子エッチングを受け付けない？ それでは、おれの望みは叶わないのか？」
教授は驚いたように尋ねる。

「お前の望みとは、何だね？」

記憶

「お前の望みとは、何だね？」

シルバーの返事は呻き声になった。

「おれは、原型の身体を得たいのだ！ おれのこの不死身の身体は、おれにとつては牢獄そのものだ！ あらゆる感覚は確かに、おれのものだ。だが、生きる喜びには程遠い。この金属の身体は、肝心の生きている実感を、おれには決して与えてくれぬ」

教授は否定するように首を振った。

「原型の身体に記憶を移植することは不可能だ。成人の原型の脳細胞は、そのような操作をするには不向きで、無理矢理そのような移植をすれば、蛋白質でできている脳細胞は壊れてしまうぞ」

シルバーは教授の言葉に目を光らせた。

「成人の原型の脳、と言ったな？ それでは赤ん坊の脳なら、どうだ？ 赤ん坊の脳は真っ白な白紙だ。それなら、記憶移植もできるのではないか？」

教授は憤然と返答する。

「何だと？ お前は、自分の欲望のために人間の赤ん坊を使うつもりか？ そんなことは許されない！ しかし、どうしてもお前が原型の人間に生まれ変わりたいというのなら……」

シルバーの表情に希望が浮かぶ。

「何か手があるというのか？」

「お前のゲルマニウム・ゲノムをシミュレートして、DNAを設計する。それを人工胎盤で成長させれば、炭素を主体とした原型の人

体が生まれるだろう。その脳に、お前の魂を移植する。記憶ではなく、お前の個性そのものだ。シルバーとしての個人の記憶は失われるが、お前の個性は引き継がれる。それなら、お前が原型の人間に生まれ変わるといふ望みは叶えられる」

シルバーは喜びの声を上げた。

「そうか！ それなら、希望はある。個性が引き継がれるなら、今の瓦落^{ガラクタ}多な記憶など、あつさり溝に捨てても構わん！ おれはやるぞ！ それで、銀河系が破滅に瀕しているというのは？」

話題が元に戻り、教授は再び講義然とした口調になった。

「さつきも言ったように？ 種族？ のゲノムは、遺伝子エッチングにより複雑さを増している。？ 種族？ の野放図な増殖は宇宙空間に歪みを与え、時空間は輻輳し、物理定数は混乱するだろう。その結果、超空間ジェネレーターは効果を働かせなくなり、銀河系で総ての？ 種族？ は孤立してしまう。わしは、それを防ぐため、この立方体を造り上げた」

フロント教授は両手を広げた。

「ここには、地球の総ての生命体の遺伝子情報が集まっている。すでに気がついた者もいるだろうが、壁面に現れる斑模様は、超空間に見られるそれと酷似している。なぜなら、地球の二十億年にわたる生命の連鎖の記憶が、原型に超空間ジェネレーターを起動させる原動力なのだ。だから、原型以外には超空間ジェネレーターを起動させられないのだ。？ 種族？ の遺伝子は、地球との連鎖が断ち切られているから」

教授が言葉を切ると、その場を監視していた【大校母】が怒りの声を、通信機を通じて発した。

「それでは？ 種族？ は、どのようなことがあっても超空間ジェネレーターを起動させることはできないと申されるのですか？ フリント教授」

ぎくり、と教授は顔を上げた。

侵攻してきた？ 種族？ が持ち込んだ通信機のモニターには【大校母】の怒りに満ちた顔が映し出されている。

奔流

「どなたかな？」

【大校母】の怒りの表情にもまるで動ぜず、教授は丁寧な口調で話しかけた。【大校母】は顔を真っ赤にさせ、噛みつくように喋り出す。

「原型以外、超空間ジェネレーターを起動させられないという話は、本当なの？ それは決まったことなのですか？ 妾には信じられませぬ。そのため、妾は原型の脳を使った計画を推し進めているというのに……」

教授の眉が顰められた。

「計画？ 原型の脳を使った？」

「そうです！」

【大校母】は、ぐい、と頭を揺するようにして自分の？楽園計画？の全貌を話し出した。

聞いているフリント教授の顔つきが徐々に険しくなる。最後まで【大校母】が話し終えると、強く首を振って口を開く。

「そのような手段では、銀河の危機は避けることは金輪際できない！ 問題は？種族？の増殖によるものだからだ。あなたは自分以外の総ての？種族？を亡ぼすつもりか？」

【大校母】の目付きが鋭く光る。

「必要ならね……。フリント教授、あなたは銀河系で居住可能な惑星を多数、発見なさったそうですね。その星系の座標を妾に示さない！ 妾の？楽園計画？には、その星系の座標が必要なのです。」

居住惑星の数が増えれば増えるほど、観測させる原型の居住惑星が増えるのですから」

その場にいた宙森の侵攻部隊が全員さつと武器を構える。緊張が高まった。

サークを守っていたルーサンが「野郎……」と、似合わない唸り声を上げた。

宙森から脱出してきた原型の人々も、武器を持っていた。覚束ない手つきながら、それでも自分たちの武器を手に取り、対抗する構えを取った。

「やめろ！　こんなところで射ちあいなど、暴拳以外の何物でもないぞ！」

堪りかねて教授が叫ぶ。だが、教授の叫びは、逆に緊張の糸をぶつつつりと断ち切ったかのようにだった。

どちらが先に武器の引き金を引いたのか、真紅のレーザー光が、さつと斑模様を映し出している壁面を撫でる。その途端、総ての壁が強烈な光芒を放ち、全員の目を眩ませた。

「わあ！」と光の奔流に誰かが悲鳴を上げた。

怒り

まるで光が爆発したようで、パックもまた、何も見えなくなっていた。

「ミリイ、どこだ！」

目を擦り、パックは両手を前に探るようにして叫ぶ。

「ここよ！」

ミリイの声が聞こえる。パックはそちらに手を伸ばす。指先に、ミリイの指先を感じ、パックはがっしりと、ミリイの手を握りしめた。

「目が見えない！」

高い叫び声はアル二のようだ。

「ねえ、どこ？ みんなどこにいるの？」

どん、とパックの肩に柔らかなアル二の身体がぶつかってくる。

アル二は小さな悲鳴をあげ、夢中になってしがみついてくる。

じりじりとパックは心覚えの記憶を頼りに、後退した。背中が壁につくのを感じ、大きく息を吐く。

やっと網膜に焼きついた斑点が薄れ、パックは狂おしく、辺りを見回した。ミリイとアル二は青ざめた顔で、パックの腕にしがみついていた。

立方体の内部は、戦いの真っ最中だった。

原型と？ 種族？ の侵攻部隊は、壁面の光の爆発でお互い一瞬、視覚を奪われ、うろつろとさ迷い歩いている。

そのうち視界が戻ってくると、目の前に敵を認め、てんでんばら

ばらの状態で武器を射ちあったり、あるいは取っ組み合いを始めた
りしている。それには統制というものは何もなく、目に付いたら即
戦いの火蓋が切って落とされるのだった。

壁面は先ほどのような光の爆発は収まったようだが、それでも狂
騷的ともいえる光の模様が絶え間なく映し出されている。

壇の上のフリント教授はこの騒ぎの中で、しきりと「やめろ！
やめろ！」と叫んでいる。

だが、大声で叫び合う戦闘状態の中では、誰も耳を傾けようとは
しない。ただ口がぱくぱくと動いているのが見えるだけだ。

足を何かが掴むのを感じ、視線を下げると、そこにはへろへろが
ガタガタ震えながら、パツクのブーツにしがみついている。

「へろへろ！ 無事だったか！」

へろへろはパツクを見上げ「うううう！」と言葉にならない唸り
声を上げる。

「ぼ、僕、こんなの、苦手なんだよ……」

へろへろの顔色はレモン色から、真っ白になっていた。頭のホイ
ップ・アンテナがびりびりと震えている。

怖ろしい雄叫びに、パツクは顔を上げた。

見ると、シルバーが怒りの表情物凄く、阿修羅のように拳を振り
上げ、足を蹴り上げ、当たるを幸い暴れ回っている。

相手は原型だろうか？ 種族？ だろうか、まるでお構いなしだ。シ
ルバーは武器を持っているはずなのに、なぜか素手で戦っている。

誰かがレーザーを浴びせた。だが、それはシルバーの衣服を焦が

すだけで、まるで平気だ。遂にシルバーの衣服に火が着いた。

ぼっ、と音を立て、シルバーの全身に炎が回った。しかしシルバーは熱さというものを感じないのか、逆に怒りが燃え上がったかのようだ。

ぐっとシルバーは出口を睨みつけた。その視線の先に【弾頭】があった。

シルバーは炎を上げたまま、出口に向かう。

「何をする気なのかしら？」とミリィが呟く。
パックはミリィに叫んだ。

「追いかけよう！ 何を企んでいるのか判らないけど、どっちにしろ、碌なことじゃなさそうだ！」

「うん」とミリィは頷いた。走り出す二人に、アルニとヘロヘロは慌てて付き従う。

混乱

生きている炎のようなシルバーは、開いている【弾頭】のエア・ロックに飛び込んだ。

途端に【弾頭】内部の自動消火装置が働き、ぶわーっと真っ白な消火液が噴出する。

「ぐわあああつ！」とシルバーは怒りの咆哮を上げる。消火液を振り払い、シルバーは叫んだ。

「おれは、これが嫌いなんだ！ 畜生！」

ぶすぶすと衣服が焦げる音とともに、煙が舞い上がる。消火装置はしつこくそれを感じし、シルバーの身体に消火液を浴びせていた。遂にシルバーはレーザー・ガンを構え、消火栓を狙い撃った。

ぼん、と音を立て、消火栓が弾けとんだ。

身体に纏いついた消火液を振り払い、シルバーは唸り声を上げ、艦内に飛び込む。

パックとミリイはエア・ロックから内部を覗き込んだ。ここから先はシルバーが何をしているのか、確認できない。

足音に振り返ると、ヘロヘロとアルニが小走りで近寄ってくる。その背後から近づく人影を見て、パックは目を丸くした。

ガラスの管理人だ。

今は元の透明な身体に戻り、軽い足取りで近づいてくる。

「お祖父ちゃんは？」

ミリイが小声で管理人に話しかけた。管理人は小さく頷いた。

「あのような混乱状態では、教授の話有谁も聞こうとは思いませんか

らね。ですから、わたしが代わりになって様子を見に来た、という訳です。シルバーとかいう金属人間は、いったい何をしに来たのですかね？」

管理人が話している間にも、立方体の内部から戦いの物音が聞こえている。もう、お互い何のために戦っているのか判らなくなっているようだ。

管理人は、ちょっと肩を竦める動作をした。

「あのままでは、折角の記録保管庫が修復不能に陥る可能性があります。彼らには少し、頭を冷やしてもらいましょう」

透明な片手を挙げ、何か素早く指先を動かす。と、立方体の方角から聞こえてくる騒乱の音が、ぴたりと止まった。

パックは物入れから小型の望遠鏡を取り出し、立方体の内部を探った。

「ありや！ みーんな、止まっちゃまっている。まるで凍りついたみたいだ……」

戦艦

望遠鏡の視界の中に、動きを止めた原型と？種族？の姿があった。まるでビデオの一時停止のように、ぴたりと動きの途中で凍り付いている。

ミリィはパックの望遠鏡を奪い取るようにすると、目に当てる。

「本当……。どうしちゃったのかしら？」

呟くと「あつ」と小さく叫ぶ。管理人を睨んで囁いた。

「停滞フィールドね！　そうでしょう？」

管理人はまた頷いた。指先を上げ、顔の前に持ってくる。その意味を悟り、ミリィは首を竦めた。

全員、そろりとエア・ロックに足を掛け、艦内に首を突き出すようにして内部を探った。

シルバーがコンソールの前に押し掛かるように立ち、ホロ・スクリーンを開いていた。ホロ・スクリーンには【大校母】が映し出されている。【大校母】は怒りの声を上げていた。

「シルバー！　何が起きたのです？　侵攻部隊からの連絡が、いきなり跡絶えてしまいましたよ！　それと、あなたに頼んでいた居住惑星のデータは、どうしたのです？」

「うるさいっ！」とシルバーは喚いた。その大声に【大校母】は、びくりと唇を引き結んだ。

「あんたの魂胆、読めてきたぜ。あんた、この銀河系の総ての？種族？はおるか、原型を亡ぼすつもりだな」

【大校母】が何か言いかけるのを、シルバーはおっかぶせて黙らせ

る。

「おれは、原型の身体を手に入れる方法が判った！　しかし、あなたの計画では、総ての原型を亡ぼすつもりだろう。そんなことは許せねえ！　おれは、生き抜いてやる。あなたの計画は、なんとしても打ち砕いてやるから、そう思え……！」

【大校母】は「くくく……！」と忍び笑いを漏らした。

「あなたに何ができると言うのです？　あなたにあるのは、その【弾頭】たった一隻だけではありませんか。その一隻で、妾の宙森にある軍団に対抗できるものですか！」

「はっはっはっはっは！」

シルバーは身体を揺すり、大声で笑う。が、その両目は決して笑ってはいない。

「おれが一人だと？　馬鹿を言うな。おれは、お前の知らないうちに宇宙戦艦【鉄槌】を呼び寄せていたのだ！　そら、もうすぐ超空間フィールドが開き始めるぞ！」

「まさか！」と【大校母】は叫ぶと、管理センターの部下たちに命じる。

「今のシルバーの言葉、本当かえ？」
すぐ返答があつた。

「地球の近くに超空間フィールドを感知！　宇宙船らしきものが出現します！　物凄い大きさです！　この宙森とほぼ同じくらいのこと……ああ、小惑星が出現！　全長五十キロメートル！　戦艦です！　スラスターの軌跡は【鉄槌】の記録と一致……！」

【大校母】は、真っ青になった。

シルバーの決意

スクリーンの中の【大校母】は、まさに恐慌状態そのものだった。「信じられない」とばかりに、口をぽかんと開き、目は一杯に見開かれている。

「なぜ、そんなことができたのです！ 超空間通信は、未だに実現していないのに」

シルバーは嘲笑う。

「簡単なことだ。ここまで【弾頭】でやってくる前、おれは部下に命じて単座艇で後を尾けさせていたのだ。超空間フィールドを観測させ、どこへ転移するか判ったら【鉄槌】へ連絡すれば、後を辿れる。後は頃合を見て、こちらから連絡すればよい。さあ、おれの戦艦が来たからには、もうお前とおれは五分五分だな！」

「くううう！」と、悔しそうに【大校母】はシルバーを睨みつけた。きりきりきりと歯を食い縛り、怒りの視線を向ける。

「シルバー！ そっちがその気なら、妾も考えがあります！ 後悔なさらないよう、お祈りでも、お題目でも、念仏でも唱えていなさい！ 通信終わり！」

ぷつん、と音を立てホロ・スクリーンが真っ暗になった。

「けっ！」と呟くと、シルバーはいきなりパツクたちに顔をねじ向け、怒鳴る。

「そこで隠れている奴ら！ いい加減、鼠のようにこそそしていないで、出てこい！」

パックたちは顔を見合わせた。シルバーの奴、とつくに気付いていたのか？

こうなったら堂々とするに限る。パックは大腿で操縦室へと踏み込んだ。

パックと、ミリイたちの顔を見たシルバーは、にたりと笑い掛ける。

「やっぱりな！　こんなことではないかと思っていたぞ。お前たち、わざわざこっちに乗り込んで、どうするつもりなんだ？」

ミリイは胸を張った。

「あんたこそ！　宙森と戦って、何を得るつもりなの？」

シルバーは真面目な顔になった。

「おれは、原型の身体を手に入れる！　この世界を精一杯、生きて生き抜いて、味わい尽くす！　そのためには、原型が安心して暮らせる世界が必要だ。【大校母】の？楽園計画？を見過ぐすと、おれにも危険が及ぶ可能性がある。だから、断固としてあいつの計画は潰す！」

出発

シルバーはじつとミリイの目を見つめた。見返したミリイの目が
瞠られる。

「本気なのね……」

シルバーは無言で頷き、大声を張り上げる。

「さあ！ おれの戦いに参加するのか、しないのか？ これは本当
の戦いだ。ただ面白半分で従ってこられては、迷惑だ！」

パックは笑い返した。

「おれも戦う！ おれたち原型を滅ぼそうなんて、絶対に許せねえ
！」

ミリイも頷いた。

「あたしだって……。お祖父ちゃんのためにも！」
へろへろは軽く首を振った。

「やーれ、やれ！ こんなことになるんじゃないかと思ってた！」
ガラスの管理人は一步、前へ出た。

「わたしも参加させて頂きます。お役に立てるかどうかわかりません
が、フrint教授の計画を進めるためです」

そこでアル二が呆然と呟いた。

「あんたら正気じゃないわ！ 宇宙戦争よ！ 死ぬかもしれないの
よ！」

全員の注目を浴び、アル二は「やだ！」とばかりに軽く拳を握っ
て口許に持つていく。ひくひくと唇が笑いの形を作りそうになるが、
それは泣き顔にしか見えない。

シルバーは静かに話し掛けた。

「逃げてもいいのだぞ。お前の言うとおり、死ぬかもしれない戦いなのだ」

アルニは、どっかりと、その場に座り込んだ。

「へっ！　こうなったら、どうにでもなれだわよ！　いいわよ、あんたがどんな戦いをするか、見せてもらうわよ！」

腕組みをして、シルバーを見上げる。

ぼりぼりとシルバーは頭を掻いた。

「なんだ、同行するのか。てっきり降りと思っていたぞ」
「迷惑？」

アルニは挑戦するような目つきになる。シルバーは両手を上げた。
「判った、判った！　ともかく、出発だ！　お前たち……」
と、パックとミリイを見た。パックたちは「よしきた！」とばかりに操縦席に座る。シルバーは大股に艦長席に座ると、号令するよううに手を挙げ、スクリーンの表示を指し示す。

スクリーンには宙森が映し出されている。

「出発だ！」

「了解！　エンジン始動！」

パックは操縦桿を握った。

命令

【鉄槌】は超空間から出現すると、即座に臨戦態勢に入った。艦橋のホロ・スクリーンに【弾頭】から送信されたシルバーの厳しい顔が大写しになる。

「おれだ」

ぶつきらばうにシルバーは口を開いた。さつと艦橋で臨時の艦長席に座る代理の？ 種族？ が直立不動になり、報告をする。艦長代理は四本腕のゴロス人だった。

「こちら【鉄槌】。ご命令どおり、戦闘態勢を整えております！ 各宇宙戦艦、いつでも出発できます！」

シルバーは頷いた。

「よし！ 宙森に攻撃を集中させる！ 第一列を宙森の前後に密集させ、動力を破壊！ ただし円環部分の、住民には被害を与えないよう注意しろ！ 今回の作戦は、宙森の司令部を直撃することが肝要だ。【大校母】は原型の脳を摘出するという、非道な計画を押し進めている。それは絶対に許せない！ 証拠を掴み、銀河帝国警察に提出して、その計画をぶつ潰す！」

艦長代理は、ぽかんと口を開けた。

「あ……あの、つまり警察に協力するわけですか？ 我ら宇宙海賊が？」

シルバーは、ぐっと両目に力を入れ、睨みつける。

「何か問題でもあるのか？」

艦長代理は真っ青になった。慌てて敬礼をして叫ぶ。

「い、いえ！ 何にもありません！ ご命令通り、攻撃を開始します！」

代理の返答に、シルバーは満足そうに頷いた。

「よし、上陸部隊を編成しておけ。それから……」

にやりと笑いを浮かべる。

「宙森の司令部では、略奪を許可する！ おれたちは海賊だ！ 思い切りやれ！」

シルバーの言葉を聞いて、艦橋にいた全員が喚声を上げる。艦長代理は、ほっと安堵の溜息をついた。

シルバーの映像が消えると「やれやれ」と首を振り、艦長席にどっかりと座り込んだ。首を捻り、呟く。

「おれたちが警察に協力だと？ 世も末だ。世紀末だ……」

攻撃

【鉄槌】と宙森の宇宙戦艦は、じりじりと接近を始めた。【鉄槌】側は主力の戦艦、巡洋艦、駆逐艦などが前面を固め、宙森からも同じような構成の陣形で近づきあう。

まず、宙森から攻撃は始まった。

宙森のハブ部分から大出力のレーザーが放出され、それは【鉄槌】側の防護バリアで中和される。

宙森からの攻撃に応じて【鉄槌】の陣形からも宇宙魚雷が発射される。魚雷は無反動スラスタを装備し、宇宙空間に細い重力レンズの航跡を残し、亜光速の速度で殺到した。

宙森から再びレーザーが発射される。宇宙空間に大出力のレーザーによって宇宙塵が励起され、光の棒が瞬いて魚雷を貫き、次々と空間で爆発を繰り返す。

ここまでは手はじめである。お互い手の内を明かさないための、軽いジャブの応酬、といったところだ。

「こつちからも攻撃するかい？」

パックが艦長席にどっかりと腰を据えているシルバーを振り向き、尋ねる。シルバーは軽く首を振った。

「馬鹿を言うな！ 要員が足りんのだ。この巡洋艦が機能するためには、本来は訓練された要員、五百名を必要とするのだぞ。戦闘などできるわけない」

「ちえっ！」と、パックは不満を漏らす。

ホロ・ドラマみたいな戦闘ができるかと思っていたのだが、あて

が外れた。

ミリイ、ヘロヘロ、ガラスの管理人などはコンソールに陣取り、計器を読み取ったり、あるいは調整などしたりして、それぞれ忙しい。

だが、アルニはなににもすることなく、退屈そうに髪の毛を捻くっている。欠伸を噛み殺し、呟いた。

「ねー、これからどうなるの？」

パックは悪戯心を抑え切れない。顔をアルニに近づけ、強いて冷静さを装い囁く。

「戦争だぜ！　するとなあ……」

アルニは「なにになに？」と顔を近づける。

いきなりパックは「どかーん！」と大声を張り上げた。

「……で、爆発が起きるぜ、きつと！」

「いやーん……！」

アルニは吃驚して目を潤ませる。

「けけけけ！」とパックは笑い出した。

侵攻

「もうすぐ本格的な戦いが始まる。油断するなよ」

シルバーがぐつと上体に力を入れてスクリーンを睨みつけた。慌ててパックは居住まいを正し、コンソールに向かい合う。アルニもまた顔を上げ、緊張した表情で見つめる。

スクリーンには宙森と【鉄槌】双方の戦艦が煌く輝点となって映し出されている。それが徐々に距離を詰め始めた。

宙森側の戦艦は【鉄槌】側の陣列を包囲するつもりらしく、四方に散らばる。【鉄槌】側は薄くなった陣形に密集隊形で突き破る動きをする。その先頭に宙森の戦艦が集中して砲撃を浴びせ始めた。

「どっちが優勢なんだ？」

パックはシルバーに尋ねるが、シルバーは無言でスクリーンを睨みつけているだけだ。おそらく、シルバーにも判断できないのだろう。

宙森からの大出力レーザーが空間を切り裂き、【鉄槌】側は防護バリアを強化して中和する。

遂に【鉄槌】自体が動き始めた。

宇宙魚雷を抱いた魚雷艇が陣形の隙間を縫うように進み、宙森に魚雷を放って放物線を描き、離脱していく。今度は宙森にぎりぎりに接近しているので、何発かは命中し、宇宙空間にオレンジ色の爆発を描いている。

「こちらが押しているようだ……」

ようやく、シルバーが小声で呟いた。腕組みをすると、それまで握りしめていた艦長席の手すりが、ぐにやりとシルバーの怪力で変形していた。

宙森側の戦艦は【鉄槌】側に比べ、やや機動性が劣っているようである。【鉄槌】側の戦艦の機敏な動きに対応しきれず、戦列のあちこちで分断、包囲され、動力炉をやられ、動けなくなっていく。スクリーンに【鉄槌】の艦長代理ゴロス人が興奮に顔を火照らせ姿を表すと、得意そうに報告してきた。

「こちらの勝利です！ 宙森側の戦艦は、完全にこちらが制圧しました。もう、宙森からの抵抗は皆無です！」

シルバーは立ち上がった。

「よし！ それでは、上陸部隊を侵攻させる！ おれも同行する。そうだ……」

鋭い目つきになってアルニに尋ねる。

「宙森の【大校母】は、フェロモンを使って向こうの連中を制御しているということだったな？」

アルニは急いで頷いた。

「そうよ！ そのパックが神経衝撃銃を浴びせて【大校母】がまいつちやったとき、向こうの連中、何をして良いか、判らなくなちやったわ！」

「それだ！ おい、上陸部隊は呼吸装置を装備するよう命令しておけ。【大校母】のフェロモンに操られたら、敵わんからな」

艦長代理はシルバーの命令を復唱し、スクリーンから消えた。

シルバーはパックとミリィを見る。

「おれは平気だが、お前たちは……」

アルニは口を挟みこんだ。

「大丈夫、なんでも【大校母】のフェロモンは、原型には効かない
そうよ」

シルバーは、にやりと笑った。

「そいつは好都合だ！ それでは、おれたちも前進だ！ パック、
ミリィ！ 操縦を任せるぞ」

「ちよつとお……」

ミリィはぶくーつと頬を膨らませた。

「あたし、あんたの部下じゃないわ！ 命令しないでくれる？」

シルバーは、おどけた仕草で肩を竦める。

「すまん、すまん。ミリィお嬢さま。では、操縦をお願い頂けま
すか？」

わざとらしく丁寧に話し掛け、眉を上げた。

ミリィは「ふんっ！」と前を見て、操縦桿を握りしめた。

【弾頭】は、ゆっくりと宙森のハブへ向かっている。

突入

【弾頭】が宙森に接近していくと、ハブから温存されていた敵宇宙戦艦が迎撃態勢をとって、接近を許すまじと攻撃を加えてくる。

【鉄槌】からシルバーの護衛に駆けつけた戦艦がそれを迎え撃ち、激しい宇宙戦闘が開始された。

「こちら【弾頭】のシルバーだ！ 本艦は、これから宙森のハブ格納庫に突入する。全艦、援護して突入を開始せよ！」

シルバーが艦長席からホロ・スクリーンに開いた各宇宙戦艦の艦長に命令すると、きびきびした答が返ってくる。

「了解！ シルバー司令官の突入を援護します！ 全砲列、敵宇宙戦艦に照準あわせ！」

「こちら揚陸強襲艦！ 突入の準備よし！」

「上陸部隊、全員装備完了！」

宇宙空間にX線レーザー、反陽子・プラズマ・ビーム、更には、亜光速に加速され、質量を増した帯電した粒子を放つ加速粒子砲などの武器が宇宙塵を励起させ、ぞつとするような光束が瞬く。

ほとんどはこのために展開された防護バリアで中和されるが、それでも受け止められずバリアを破壊され、装甲を貫かれた宇宙船が火の玉となって大爆発を起こす。

細いビームで切断された船体から、真空中に乗員が投げ出され、不運にも宇宙服を身につける暇のない犠牲者がばたばたと藻掻いている光景を見て、パツクは「これが戦争なのか！」と、改めて戦慄を感じていた。

さっき自分が攻撃できないでいたことにガッカリしていたのが馬

鹿みたいだ。もし、自分で砲を操作する羽目になっていたら、冷静になれたかどうか、怪しいものである。

激しい宙森からの攻撃を縫い、【弾頭】はじりじりとハブへと接近を続けていた。

【弾頭】は戦闘できる要員がないことで、逆に防護バリアに全エネルギーを傾注できていて、宙森からの攻撃にびくともせず、悠然と近づいていく。味方の宇宙戦艦は【弾頭】の強化されたバリアを盾に、密集隊形を作って続いていた。

バリア

「格納庫入口は、防護バリアが張られているぜ！ どうする？」

操縦席の表示を読み取り、パックはシルバーに振り返って叫ぶ。

シルバーは「ふん」と鼻を鳴らし、冷静な口調で返事する。

「構わん！ このまま突っ込め！ 防護バリアの役目は、本来ビーム攻撃を中和することにある。物質の突入には役立たん。バリアの境界を突破するとき、不快な気分になるが、気にしなくてもいい」

宙森の格納庫入口は、真っ黒な防護バリアが張り巡らされ、内部の様子は窺うことができない。「ままよ」とばかりにパックは姿勢制御噴射を効かせ、【弾頭】の楔形の船首を入口へと突っ込ませる。隣席ではミリイが刻々と接近している宙森の格納庫までの距離を読み上げている。

「距離一〇〇〇……八〇〇……六〇〇……」

艦内に衝突警報が鳴り響く。ディスプレイには艦のコースを変えるよう、コンピュータがしつこく報告を表示している。遂に人工音声が発せられた。

「本艦は前方の物体と衝突の危険があります。コースを変更することを忠告します。繰り返します本艦は前方の……」

「うるせえっ！」

シルバーが声の限りに怒鳴る。

ぴた、と警報音が停止した。

パックはシルバーを見て「どういうこった？ 黙らせちゃったぜ！」と声を掛けた。

シルバーは肩を竦めた。【弾頭】はシルバーの所有物である。シルバーの命令にはすべて最優先権が与えられている。艦内のコンピュータは、シルバーの声紋を認識して、その命令に従ったただけなのだ。

ミリイが目を見開き、接近してくる宙森の格納庫入口を睨み、宣告する。

「距離一〇〇！」

【弾頭】の楔形の船首が、宙森格納庫入口全体を覆っている、真っ黒な防護バリアに突っ込んでいく。船首が突き刺さる瞬間、防護バリア全体に漣のように青白い光が波打った。

バリアを通過する瞬間、パツクの全身に、言いようのない冷気が貫いた。

「わっ！」「ひっ！」とアルニとヘロヘロが小さな悲鳴を上げた。

ばちばちちっ！ と【弾頭】の船窓に火花が散る。見ると格納庫には手に手に武器を持った宙森の軍隊が待ち構えていた。

スイッチ

背後のモニターには、【鉄槌】上陸部隊の揚陸強襲艦が防護バリアを次々と突き抜け、格納庫に着地してくる。

着地した瞬間、大型のハッチが開き、中からバトル・スーツを装備した兵士が現れた。兵士たちはさっと武器を構え、宙森の軍隊に狙いをつける。双方でたちまち接近戦が開始される。

パックは横噴射を利かせて【弾頭】を横滑りさせながら甲板に着地させ、艦体を盾にした。【鉄槌】側の戦闘員は、さっと【弾頭】の艦体ごしから攻撃を加える。

宙森の攻撃側は、じりじりと後退を始める。

ついに支えきれず、スポークへと追い込まれていく。大慌てで手近の木製の装備を引き剥がし、バリケードを築き上げる。

【鉄槌】の戦闘指揮官が、囁れ声を張り上げた。

「突っ込めええっ！」

「うおおっ！」と雄叫びを上げて【鉄槌】戦闘員が格闘斧を手に走り出す。宙森側の木製のバリケードを、戦闘員の斧が叩き壊し、突入口を切り開く。

攻防は一進一退を繰り返した。が、【鉄槌】の攻撃が優勢で、宙森の戦闘員は遂に雪崩を打つように退いていく。

それを見て、シルバーが勢い良く立ち上がると猛然とエア・ロツクへ向かった。

「行くぜ！」

パックは叫んでシルバーの後を追ってエア・ロックから外へ飛び出した。ミリイとヘロヘロ、ガラスの管理人が続く。

と、パックは立ち止まった。エア・ロックから艦内を覗き込むと、アルニが真つ青な顔で立ち竦んでいる。

「あ、あたし、行けない……！」

両手を組み合わせ、身を擦るようにして、いやいやをする。パックは肩を竦めた。

すると、シルバーがさつと艦内に飛び込んだ。ぎろりと立ち竦んでいるアルニを睨みつけ、轟くような声で吠えた。

「どうした！ 何を愚図愚図している？」

アルニの瞳に涙が溢れる。

「許して……！」

シルバーは「うむ」と頷いた。

「よし、お前はここで、おれたちを待て。そうだ、お前に任務を与える。ここへ座れ！」

いきなりシルバーはアルニの両脇に手を入れ、抱え上げると操縦席に無理矢理ぐいと座らせる。

呆然とアルニは目の前のコンソールを見つめる。シルバーはコンソールの一角を指差した。

指先には一個のボタンがあった。てきぱきとシルバーはコンソールの装置を操作して、なにか調整している。その作業を続けながら、アルニに話し掛けた。

「これが見えるな？ もしものときは、こいつを押せ！ ただし、

命の危険がありそうなときに限るぞ！」

アルニは青ざめた顔をシルバーに向けた。

「押すと、どうなるの？」

「自爆する。【弾頭】の核融合炉が崩壊し、一瞬で跡形も残らない。安心しろ、苦痛はない」

「自爆！」

シルバーの冷徹な口調に、アルニは卒倒しそうな顔つきであった。シルバーは片手をアルニの肩に置いた。

「頼んだぞ。いいな！」

アルニは目を一杯に見開き、がくがくと操り人形のように何度も頷く。シルバーの口許に微かに笑みが浮かぶ。パックたちに顔を向け、怒鳴った。

「行くぞ！ 思わぬ手間を取った」

パックは「うん」と頷き、再び外へ飛び出した。飛び出す寸前、ちらりと艦内を覗き込むと、アルニは目の前のボタンを見つめ、彫像のように凍り付いている。

大股で歩くシルバーに追いつき、声を掛けた。

「さっきの自爆スイッチって、なんの冗談だい？」

シルバーは、ぐずりと笑いを零した。

「気がついていたのか？ まあ、ああ言えば、あの娘は、余計なことを考えて悩まないだろうと思ってな」

「じゃあ、あのボタンは？」

シルバーは歩きながら【弾頭】を振り返る。釣られてパックも見上げると、船窓からアルニが心細そうな表情で見送っていた。

「まあ、本当にあの娘が生命の危険を感じたら……押すかどうか判らんが、もし押したら驚くこと請け合いだ！」

空気

喚声を上げ突入していく【鉄槌】の戦闘部隊を追いかけ、パックたちは宙森の格納庫から司令センターを目指す。

「司令センターは、こっちだ！ 遅れるな！」

シルバーは先頭に立って、部下たちを叱咤した。【大校母】のフレモンに対抗するため、部下は一人残らず、顔に呼吸装置を装着していた。通路の角々には宙森側の防衛部隊が待ち構え、物陰に隠れながら撃ってくる。

宙森内部は、ふんだんに木材が使用されている。そのせいで、レーザーなどが焦点を結ぶと焼け焦げ、焦げ臭い匂いがあたりに満ちている。

不燃処理をされているので燃え上がることはないが、ぶすぶすと燻って空気に白い煙が混じって、ひどく視界が悪い。しかしシルバーは平気な顔をしている。部下たちに、シルバーは大声で命令を下した。

「視界が悪い！ 赤外線視覚に調整しろ！」

シルバーの部下が一斉にマスクの上から眼鏡を装着して、赤外線視覚に切り替える。シルバー自身は視覚を調整できるので、そのような必要は一切ない。

宙森の抵抗は意外と頑強であった。数倍する攻撃側に対し、まるで諦めというのを知らないかのようなのである。

パックは宙森の敵兵を見て、ぞっとなった。

全員、例外なく目が吊り上がり、口を真一文字に引き結んでいる。たとえ至近距離にレーザーや、弾丸が撃ち込まれても、微動だにしない。手にした武器を黙々と操作して応戦している。

まるで死の恐怖というのを知らないかのような。事実、すぐ近くで誰かが直撃を受け、全身から血吹雪を噴き出しながら倒れても、ちらりと見向きさえもしない。

苛々とシルバーは足踏みを繰り返す。

「糞！ 【大校母】のフェロモンというやつに操られているに違いない！ なんとかできんのか？」

へロへロが、ぼつりと提案した。

「だったら空気を入れ替えたらどうだい？」

シルバーは呆気にとられ、口をあんぐりと開いた。

「空気を……入れ替える？」

まじまじとシルバーに見つめられ、へロへロは真っ赤になった。

「ご、御免！ 馬鹿なこと言っちゃった……」

「いいや！ そうではないぞ！」

シルバーは首を振り、にんまりと笑顔になる。

「確かに、空気を入れ替えれば、それで【大校母】のフェロモンは、すっかり吹き払われる理屈だ！」

パックは疑問を投げかけた。

「どうやって空気を入れ替えるつもりなんだい？ ここにエア・コンでも持つてくるつもりか？」

シルバーはぐい、と背筋を伸ばした。

「いいや！ そんな必要はない！ おいつ、それを貸せ！」

喚くと、部下の一人から通信機を取り上げる。ぱちりと通信機を

開き、叫ぶ。

「おれだ！ 我々の位置は把握しているな？ うむ、そうだ……おれたちから少し離れた距離の壁、そこに穴を開ける！ 構わん！ ぶち開けるんだ！」

掃討

「シルバーっ？」

ミリイが悲鳴のような声を上げる。

「あんた、何を考えてんのっ？」

「下がってる！ 来るぞ！」

シルバーは両腕を広げ、ミリイとパックを押し倒す。「わあ！」と悲鳴を上げ、ミリイとパックはシルバーの巨体に押しつぶされるように、床にべったりと腹這いになった。

途端に「ごおっ！」と轟音を上げ、通路の隔壁が吹っ飛んだ。壁にまん丸な穴が穿たれ、そこから内部の空気が、一気に外部の真空に向けて吸い出される。

猛烈な風が吹き荒れ、パックは強烈な勢いに身体が飛ばされるような恐怖を味わった。

開いた穴を見ると、外部の宇宙空間に宇宙船が浮かび、その横腹から蛇腹のようにエア・ロックが伸びてくる。エア・ロックはその鎌首をふらふらと動かし、ぶち開けた隔壁の穴にぴったりと貼りついていた。

即座に猛烈な風は、ぴたりと止まり、急激な減圧で空気中に細かな霧が漂う。

穴から次々とシルバーの部下が飛び出し、うろたえている宙森の敵へ殺到した。同時に密着したエア・ロックから、どつとばかりに空気が内部に吹き込んでくる。そのため戦闘の煙は吹き払われ、新鮮な空気が満たされていた。

あれほどの抵抗を見せた敵側は、あつけないほど簡単にシルバーの部下の進入を許す。喚声を上げて殺到するシルバーの軍勢に、悲鳴を發し、見つともないほど無様な敗走を開始した。

その顔を見ると、ごく当たり前の、戦いに恐怖を感じている兵士の表情であつた。

「ふうーっ」とパックは息を吐き出した。

ふらつく足を踏みしめ、ようやく立ち上がり、ミリイを助け起す。ミリイは呆然と乱れた髪の毛を掻き上げた。

シルバーの部隊は掃討作戦を展開していた。空気が入れ替わったせいか、宙森の部隊には完全に戦意がなくなっていた。

がちや、がちやりと音を立て手にした武器を投げ出し、へたへたと膝を折って、シルバーの部隊に降伏の意を顕わにする。

「【大校母】は、どこにいるっ？ お前ら、知っているのか！ 司令センターにいるのか？」

ずかずかと降伏している兵士に歩み寄り、シルバーが噛みつかんばかりの勢いで質問している。顔を上げた敵兵は、ゆるゆると首を振って返事する。

「わ……判りません……わたしら、ただここを守れと、上から言われただけです」

わくわくと唇を震わせ、一人の？ 種族？ が哀れっぽい声を上げる。皮膚が古革のような皺に埋もれた？ 種族？ で、身体は貧弱で、とても戦い向きの身体つきをしていない。

「うぬう……！」とシルバーは唸った。

ひそひそとシルバーの部下が尋ねる。

「どうします？ このまま、司令センターへ直行しますか？」

シルバーは、ぶるん、と頭を振った。

「判らん！ 【大校母】の奴、のうのうと司令センターに留まっていると思えんが……しかし、他に当てはないしな……」

しばし、考え込み、シルバーは決断を下したかのように一同に向かって叫ぶ。

「よし！ おれたちは司令センターに向かう！ お前たちは、ここで待機しろ。パック！ ミリィ！ 行くぞ、従いてこいっ！」

返事も待たず、シルバーは走り出す。

ミリィはぽかんと口を開け、パックに向かって呟いた。

「呆れた……！ シルバーったら、すっかりあたしたちを部下だと思っているわ！」

パックは肩を竦め、歩き出す。

「細かいこと、気にすんな！ とにかく、追っかけようぜ！」

扉

シルバーは、長い通路を大股で歩く。

時折、前方から逃げ遅れた宙森の兵士がシルバーの姿を見つけ、慌てて攻撃する。だが、まるで意に介しない。そのたび、手にしたレーザー・ガンや、火薬を使用した銃を使って応戦する。恐怖を感じ、逃げていく相手には、目もくれない。

まるで無人の荒野に行くようなシルバーに、パックとミリィ、ヘロヘロ、ガラスの管理人という順番で従っていく。そのうち、完全に辺りには、ひと気が一切なくなってしまった。冷たい静寂の中、五人の足音だけが響いている。

「妙だぜ……誰もいないみたいだ……」

パックが呟くと、ミリィも同意する。

「逃げたのかしら？」

ミリィの疑問にヘロヘロが問い掛ける。

「どこにだい？ 逃げるところなんか、あるのかい？」

だしぬけに、シルバーが立ち止まった。

目の前に巨大な観音開きの、木製の扉があった。深い飴色をしていて、どっしりと重そうな板でできている。

「ここだ。この先に、宙森の司令センターがある」

シルバーは扉の側にある開閉スイッチを操作する。しかし、扉は固く閉ざされ、ぴくりとも動かない。

シルバーの眉が顰められた。

「閉まっているのかい？」

パツクの問い掛けに、「うむ」と無言で頷くと、シルバーは固めた拳で扉を一撃する。

「だあーんっ！」と、パツクが思わず飛び上がりそうな打撃音が、辺りに響く。

シルバーの唇が引き締められた。

扉の取っ手を両手で掴むと、ぐっと全身に力を込める。服の下から、ワイヤー・ロープのようなシルバーの筋肉が盛り上がる。

「ぬ！……おおおおおっ！」

呻き声が洩れる。ぶるぶるとシルバーの全身が細かく震え始め、怖ろしいほどの力が込められているのが判る。

パツクは、そっとミリーの肘を掴んで後ろに下がる。

シルバーが踏みしめている床が、みしみしと軋み始めた。

がたんっ！と大きな音を立てて、扉が弾け飛ぶ。シルバーは両腕を広げ、重い扉を放り投げた。

パツクは呆れた。なんて馬鹿力だ！

ふうーっ、ふうーっとしてシルバーは鞆のような息遣いをして顔を上げた。

「【大校母】！どこにいるっ！」

大声で叫び、開いた入口に飛び込んだ。

パックたちもシルバーの後から司令センターに踏み込む。

人間の脳

「あれ？」とパックは声を上げた。

宙森の司令センターは、蛻の殻だった。がらんとしていた。

巨大な空間には、人っ子一人すらも見当たらない。

数百人を収容できる無数のコンソールには、ちかちかと様々な計器やモニターに灯りが点っているが、ただ静寂が支配しているだけで無人であった。

「逃げたか……」

シルバーの唇が、不満にぐっとひん曲げられた。

「糞お！」

大声を発し、手近のコンソールに思い切り拳を叩きつける。

コンソールは、シルバーの拳の形に、ぐにやりと凹む。シルバーはもはや、自分の力をコントロールできないようだ。

わあわあという喚声に、パックはぎくりと顔を上げた。また戦闘があるのか？

しかし戦闘にしては妙だ。喚声には笑い声も混じっている。

どたん、ばたん……と何かが倒される音、ばりんと突き破られる音が交錯している。

「ありや、何だ？」

パックの呟きにシルバーは肩を竦めた。

「おれの部下だ。略奪を許可しているから、おおかた手に入れられるものを漁っているのだろっ」

詰まらないことを聞くなとばかりに、シルバーはそっぽを向く。怖ろしく不機嫌である。

パックは「ああそうか」と頷いた。さすが宇宙海賊である！

その時、シルバーの部下が、あたふたと司令センターに飛び込んできた。

「シルバー司令官！」

「なんだっ！」

部下の大声にシルバーは、ぐい、と身体をねじ向ける。部下は果然と青ざめた顔で喚いた。

「妙なものを見つけました！ タンクの中に人間の脳が……」
ぎよっとなつて、パックとミリイは顔を見合わせる。

「人間の脳だつて？」

パックの言葉にミリイは、まじまじと目を見開き、大きく頷く。

「きつと【大校母】の？ 楽園計画？ よ！」

「どこだっ！」

シルバーは大声を上げると、一飛びで部下の側へ近寄った。その勢いに、部下は思わず仰け反った。

「そいつは、どこにあるんだっ！」

「こ、こっちです……」

へどもどとシルバーの部下は案内に立った。

タンク

通路を戻り、部下は下の階層へ続く階段があった。通路には他の部下たちがぞろりと勢ぞろいして、シルバーを待っている。

部下たちはシルバーを目にすると、信じられないものを見たという表情を浮かべ出迎えた。

階下に降りるとそこは円形の部屋になっていて、無数の透明なタンクが並んでいた。タンクには透明な液体が満たされ、一つ一つに剥きだしの脳がぷかぷかと浮いている。

脳には生命維持装置が繋がれ、情報ケーブルが接続されている。天井近くにはタンクの状態を示すモニターが輝きを放ち、様々な数値や図表が映し出されている。

「こ、これは何です？ 司令官」

部下が視線をきよときよと動かし、顔に一杯の汗を浮かべて話し掛けた。どう判断して良いのか、てんで判らないといった様子である。

「これが【大校母】の？ 楽園計画？ の全貌……いや、その一部だ。【大校母】は、これと同じような装置を、億の単位で揃えようとしていたんだ」

シルバーの言葉に、一人の部下が、まじまじとタンクを覗き込む。

「こりゃ、人間の脳味噌なんで？ なんでまた、こんな真似を？」
シルバーはその部下に？ 楽園計画？ を説明した。部下は首を振った。

「そんなこと、本気で信じているんですかね？ 何だか、気味が悪いや。するつてえと【大校母】は、ボーラン人以外の？ 種族？ をマジで全滅させようと思ってるんスか？」

シルバーが頷くと、部下たちは顔を見合わせた。

「とんでもねえこと考えやがる……」
一人が忌々しげに呟く。

パツクは腕を組んで口を開いた。

「これ、どうする？ みんな、身体を失って、夢を見ているんだろ
う？ 元に戻せるのか？」

ガラスの管理人が前へ出た。

「それは、わたしにお任せ下さい……」
ミリイは目を丸くする。

「あなたが？」

ガラスの管理人は目鼻のない顔を頷かせた。

「ええ、我々はプリント教授によって人格転移用の器として設計されています。我々の身体を、この犠牲者たちに提供しましょう。元の身体は失われますが、それでも通常の生活は取り戻せます」

シルバーは管理人に微かに頷く。

「おれがこの身体に記憶を転移させたのと、同じことをするのだな。それはそれでいいとして、ところで【大校母】は、どこにいますの
？」

？種？

【大校母】は緊急脱出用の小型艇に乗り込み、ここを先途と脱出を企ていた。

逃げなくてはならぬ！

折角の計画がシルバーによって目茶目茶にされたが、なんとか生き延びて、復活を目論むつもりであった。

脱出艇に乗り込む寸前、部下たちにはフェロモンをたっぷり浴びせ、死の恐怖にも打ち勝つほどの戦闘意欲を吹き込んでおいたが、シルバー相手にどれほど保つのやら……。

【大校母】は、自ら脱出艇の操縦桿を握りしめ、襲ってくる陣痛に耐えた。こんなときに出産などしている場合ではない。脱出艇には、宙森の？種？が積み込んである。これを適当な太陽系に運び、彗星の核へ植えれば、百年ほどで一丁前の宙森が育つのである。そこを根城に、もう一度じっくり計画をやり直す！

しかし、この脱出艇には超空間ジェネレーターが装備されていない。脱出を完全にするためには、ジェネレーターの装備されている宇宙船が必要なのだ。

狂おしく【大校母】は脱出艇の窓から、いくつも並んでいる宙森の格納庫入口を眺めた。

やはりどの格納庫にも、宇宙船は残っていない。シルバー相手の宇宙戦争により悉く失われて、何も残っていないのだ。

と、そこで【大校母】の目が、一つの格納庫に吸い寄せられた。

宇宙船が停泊している！ しかもジェネレーターを完備した、大型の宇宙船だ！

あれは……シルバーの巡洋艦【弾頭】ではないか！

【大校母】はコンソールを操作して、【弾頭】の主コンピューターを呼び出した。【大校母】ら、宇宙海賊共通の暗号で、【弾頭】のコンピューターを遠隔操作して、船内の様子を表示させる。モニターに映し出された【弾頭】操舵室には、原型の娘がぼつねんと操縦席に座って、所在無げな様子である。娘は妙な格好をしていた。猫の形の耳の飾り物を頭に被り、クラシクなメイドの服装を身につけている。

もってこいだ！ ジェネレーターを装備し、かつまた原型がいるというのは【大校母】に絶好のお膳立てである。腹立たしいことに、ジェネレーターは原型の人間のみしか、操作できないのだ。

格納庫には見張りすらいない。舌なめずりをして【大校母】は脱出艇の艇首を、その格納庫へ向けた。そろそろとにじり寄るように巡洋艦の近くに着地させる。？種？の入ったケースを抱え、巨体をずるり、べたりと動かしながらエア・ロックへ向かった。

ブーツ

ぼろぼろと巨体の後ろから赤ん坊を吐き出しながら、【大校母】はえっちらおっちらと重い身体を運んでいく。

エア・ロックから操舵室へ直行する船内エレベーターに潜り込む。エレベーターのコンピューターに「操舵室へ！」と叫ぶと、重力コントロールにより、エレベーターは動き出した。漸く【弾頭】の操舵室へ侵入した。

のそりと【大校母】が這いこむと、原型の娘が気付き、弾かれたように立ち上がる。

「あんた、だれ？」

「あたしは宙森の【大校母】。この巡洋艦を頂くよ！ さあ、操縦席に座りな！」

すっかり【大校母】の口調は、宇宙海賊の姐御のような、伝法なものに変わっていた。いや、お里に戻ったというべきか。手には剣呑な輝きを放つ銃を握っている。

おろおろと原型の娘は助けを呼ぶように、視線を目ま狂おしくさ迷わせる。しかし助けなど、来るはずもない！

「さあ！ あたいの言うとおり、ジェネレーターの前に座るんだ！」

ぐい、と銃を振ると、原型の娘はよろよろと後じさり後ろ手で操縦席を探る。

と、娘の厚底のブーツがかくん、と横になった。まるで実用的でない、厚底のため、転んだのだ。

一声「きゃあっ！」と悲鳴を上げ、原型の娘は横倒しになりそうな体を支えるため、コンソールに手をついた。瞬間、指先が一つのボタンを押していた！

ぱぱぱぱっ！ と、操縦室全体のコンソールに、いきなり灯が点る。ひゅーん…… と、エンジンに火が入り、巡洋艦は誰にも操縦されることなく、格納庫から浮き上がる。

「なんだいつ！ 自動操縦なのかい？」

だしぬけの出来事に【大校母】はうろたえていた。巡洋艦は格納庫を脱け出、ぐんぐんと加速していく。航法モニターに、遠ざかる宙森が見えていた。

「どこへ向かっているんだ？ 教えなっ！」

「し、知らないわ…… てつきり、自爆ボタンだと思っていたのに……」

真っ青な顔で娘は答える。

「自爆ボタンだってえ？」

言い合っている間にも、【弾頭】は加速を続け、遂に亜光速に達した。超空間が開く！

【弾頭】は超光速ジェネレーターを起動させていたのである。シルバーがセッティングしたとき、アル二の指がボタンを押すと同時に、超空間ジェネレーターを起動させるよう、回路を組み上げていたのだ。

こうして【弾頭】が向かったのは……。

これから

「【大校母】の奴、【弾頭】を乗っ取った方がいいが、まさかあんなところに出現するとは思ってもみなかつたろうな！」

上機嫌にパックは叫んだ。向かい側のシルバーは肩を竦めた。

「しかしアルニが、まさかあのボタンを押すとはな。自爆ボタンだと言い聞かせていたから、押すはずもないと思っていたが、意外と人は見かけによらないな」

一同は【呑竜】に集まっていた。ミリイの【呑竜】は、無事に宙森の格納庫で持ち主を待っていたのである。ミリイとヘロヘロは、正気に返った宙森の甲板員の手により整備され、燃料も注入された船内に入り込み、懐かしそうに操縦席を覗き込んでいる。

ミリイが顔を上げた。

「それで【大校母】はどうなるの？ 【弾頭】の行き先を首都の洛陽にセットしたのは、このためなの？ シルバー」

シルバーは「ふふん」と囁いた。

「まあな。おれの頭は優秀なコンピュータなのだ！ 先を先を読むのが、おれの流儀ってわけさ！」

シルバーのセッティングにより【弾頭】は自動操縦で首都洛陽のある太陽系の、よりにもよって、ど真ん中に出現したのである。

洛陽の太陽系は厳重な警戒星域と定められている。いかなる理由によっても、軍艦 特に駆逐艦以上の船の侵入は禁止されている。

巡洋艦である【弾頭】が実体化した途端、首都警察と銀河帝国宇宙軍の包囲の的となった。【大校母】は有無を言わず逮捕された。

さらにシルバーの暴いた【大校母】の？楽園計画？の全貌が通報され、他？種族？に対する残虐な犯罪となり、【大校母】は停滞フィールドによる禁固刑を言い渡された。

この刑が終了するのは宇宙が終焉を迎えるまでであろう、というのが、もっぱらの評判である。

同乗していたアルニは、原型であるということが考慮され、罪は不問にされた。単なる超空間ジェネレーターの起動係に過ぎない以上、罪には問えない、という裁判所の判断であった。

「それで、これからどうなるんだ？」

誰に言うともなく、パックはぼんやりと疑問を口にする。パックの言葉に、一同は顔を見合わせた。

へろへろが口を開く。

「これから　って、どういうこと？」

パックは意味ありげにシルバーを見る。その視線を追って、ミリイは頷く。

二人の視線に、シルバーは眉を上げて見せた。

「おれのことか？　決まっている。おれは原型の身体を手に入れる！」

シルバーは立ったままのガラスの管理人を見やった。どういうわけか、ガラスの管理人は、座った姿を見せたことがない。管理人は、ゆっくりと首を縦に振った。

「月にある、フロント教授の残した装置ならば、あなたに新たな原型の身体を提供できます。しかし、あなたの本来の記憶は失われる

のですよ。それでよろしいのですか？」

シルバーはせせら笑った。

「構わん！ おれの個性そのものは保存されるのだろう。おれは、おれだ！ 詰まらん記憶など、欲しいとは思わん！」

管理人は答えた。

「それでは、そのように……」

転移

月のフrint教授の装置で、シルバーの新たな原型の身体が作られた。シルバーのゲルマニウムを基とするゲノムが、蛋白質に翻案され、急速な成長を施された原型の身体は、ぴかぴかのプラチナ重合体であるシルバーの元の身体と瓜二つであった。

再びシルバーは転移装置に横たわっている。隣には原型の身体が眠るように装置に寝かされていた。

その身体を見ながら、シルバーは見守っているミリイとパックに声を掛けた。

「それじゃ、お別れだ。今のおれは、お前たちを忘れるが、お前たちは新しいおれに出会うことになる。よろしく頼む！」

ぴかぴかと光る装置が頭に近づき、シルバーは目を閉じた。

ガラスの管理人は黙々と操作を続けている。

低い唸り声をあげ、暫く装置は二つの身体を繋ぎとめていた。作業を見守るミリイの顔に、複雑な表情が浮かぶ。惧れ半分、期待半分といったところであろうか。見守るミリイは、両手をぎゅっと握り締めていた。

そのうち、装置の唸りは止まった。管理人は顔を上げた。

「終わったのか？」

パックの質問に管理人は頷く。

と、原型の身体が目がぱちりと開いた。

「シルバー……」

ミリイが呟く。その声に、原型のシルバーは口を開いた。
「シルバー？ それは、おれの名前か？」

がばり、と原型のシルバーは身体を起こした。しげしげと自分の両手を見つめている。

「これがおれの身体……。不思議だ……。確かに、おれのものなのに、奇妙に新しい」

へろへろがおずおずと尋ねた。

「気分はどうだい？」

シルバーは顔を上げ、にやりと笑った。

「気分？ おれの気分か……。そうだな、まるで生まれ変わった気分だ……。おれは……。おれは……」

何か言いたそうであるが、言葉が出てこない。やがて両目が大きく見開かれた。

「そうだ！ おれは今、生まれた！ おれは今から生きるんだ！」

立ち上がる。全身に力が漲り、活気が充満するかのようだと、その目がある一点に集中した。

「あれは、宇宙船だな？」

シルバーの言葉にパックが返事する。

「ああ、あれは【呑竜】といって……」

返事も待たず、シルバーは出し抜けに走り出した。「あっ」と追いかけるパックとミリイを尻目に、シルバーは飛ぶように【呑竜】に駆け寄り、その船内に飛び込んだ。

「これは、おれが頂く！」

エア・ロックから宣言すると、シルバーは操縦席に座った。エア・ロックが閉まって【呑竜】は浮かび上がる。

「シルバー！ 何をするっ！」

パックの叫びも耳に入らず、シルバーは【呑竜】を発進させた。月の開いた格納庫から宇宙へ飛び出し、あっという間に見えなくなる。

「泥棒っ！ あたしの船を返して……！」

ミリイが叫ぶが、もう遅い。管理人はモニターから顔を上げ話しかけた。

「超空間フィールドが展開しました。あの船は、行ってしまいました」

「どこへ？」

ミリイの問い掛けに、管理人は首を振った。

「判りません。どういっわけか、計器が矛盾した答えしか返さないのです」

ミリイとパックは顔を見合わせた。

「シュレーディングー航法！」

二人同時に叫ぶ。ミリイは頭を抱える。

「やられたわ……！」

パックはミリイを見つめ、尋ねた。

「これから、どうする？」

ぐい、とミリイは顔を上げパックを見つめ返した。その目からしっかりと闘志に満ちている。

「決まってるわ！ シルバーを追いかけて、あたしの船を取り返す！」

それを聞いてパックは、にやりと笑った。

「そうじゃなくちゃ！ おれも手伝うぜ」

ヘロヘロが二人を見上げた。

「僕もさ！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0259k/>

S F 宝島～宇宙船野郎～

2010年10月11日04時07分発行